WORST CRISIS -tail-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＷＯＲＳＴ　ＣＲＩＳＩＳ　－ｔａｉｌ－

【Ｎコード】
Ｎ０９７３Ｄ

【作者名】
早村友裕

【あらすじ】
ディアブル大陸の西岸を支配するグリモワール王国は穏やかな気候と豊かな国土に恵まれ、４５０年以上も安定を保ってきた。が、先日隣国セフィロトの急襲に遭い、東の都トロメオを奪われる。無事トロメオを奪還できるのか。そして戦争の行く末は――（ＰＡＳＴＤＥＳＩＲＥ－ｔａｉｌ－続編）

SECT．1　第二回戦（前書き）

この物語は連作です。

【LOST　COIN　－head－】　http：／／ncode．syosetu．com／n3660c／

【LOST　COIN　－tail－】　http：／／ncode．syosetu．com／n3665c／

【LAST　DANCE　－head－】　http：／／ncode．syosetu．com／n4082c／

【LAST　DANCE　－tail－】　http：／／ncode．syosetu．com／n4617c／

【PAST　DESIRE－head－】　http：／／ncode．syosetu．com／n6324c／

【PAST　DESIRE－tail－】　http：／／ncode．syosetu．com／n7899c／

【WORST　CRISIS－head－】　http：／／ncode．syosetu．com／n0921d／

【WORST　CRISIS－head－】（本作）

順にお楽しみください。

SECT．1　第二回戦

草原の雪が溶け、春がやってきた。トロメオの周囲は今も赤い羽根で彩られているのだろうか。
カシオの周辺では色とりどりの花がその顔を見せ始めていた。誰もが心躍らすはずの春の訪れは、セフィロト軍とグリモワール軍の緊迫した睨み合いに慄くように静かに訪れた。
戦争の始まりから9ヶ月目、グライアル草原では新たな戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

グリモワール国軍の最重要任務は東の都トロメオの奪還。
騎士団長とレメゲトンが会議を行う場所とは別に、カシオ中心部にある屋敷がレメゲトン用としてあてがわれている。元の持ち主がダイニングとして使っていた部屋を会議用とし、空いた部屋を一人ずつに割り当てて使っていた。
炊事などは自分たちで賄えるのだが、レメゲトンにそんな事はさせられないという周囲に押され毎日若い騎士団員が通ってくるのだった。

食事を終えてそのままレメゲトンの会議を開く。
くそガキと翠光玉（エメラルド）騎士団員２００名と追加の一般兵を加えたグリモワール軍は一気にトロメオを奪還する姿勢を既に打ち出していた。
城塞都市ではないカシオで防衛線を張るメリットはない。
早急にトロメオの奪還が必要だった。
まずは全く戦況を理解していないくそガキに対し簡単に説明を施した。
「現在戦闘に出ているのはあの手品師（マジシャン）ゲブラ、死霊遣いホド、それに最近出てきたセフィラの長ケテルだ」

「ゲブラは峻厳の天使カマエル、ホドは栄光の天使ラファエルを、ケテルは王冠の天使メタトロンを召還します。３天使とも非常に高い能力を有していますが、中でも長のケテルは飛びぬけています」
アリギエリ女爵が情報を追加する。
このくそガキが突然出てきた長い名前をすべて覚えられると思いはしなかったが、どうやら口の中でぶつぶつ繰り返しながら覚える努力はしているようだ。
「今回のトロメオ陥落もほぼケテル一人の力で成し遂げたようなものよ。あいつ……本当に腹立たしい！」
ねえさんはどん、と机を叩いた。
気持ちは分からなくもないが、心臓に悪いからやめて欲しい。
がたがたと窓まで揺れる衝撃に、給仕係で来ていた若い騎士も含めてその場にいた全員が硬直した。
「あら、ごめんなさい。驚かすつもりはなかったのよ」
肩をすくめたねえさんだったが、ぴりぴりとした空気は纏ったままだ。
くそガキは恐る恐る口を開いた。
「２人は力を剥がしたって言ったよね。んで、いま戦闘に出てるのが３人、ていうことはまだ５人も残ってるんだ」
「そうだ。だが温厚な慈悲の天使ツァドキエルを守護に持つケセドが戦場に出てくるとは考えにくい。戦闘能力的にはネツァクも出て込んだろう。基礎の天使ガブリエルを使役するイェソドは不明だ。まだ幼い少女だという噂もある。総指揮を執るマルクトも戦闘に参加しないと見て、残りは……」
あの銀髪のセフィラ。異常にこのくそガキに執着し、命を狙うセフィラ第６番目ティファレトの双子。
このガキがずっと会いたい会いたいと繰り替えす相手――
「あのヒトだね。ミカエルさんを召還する銀髪のヒト」
自然に言おうとした努力は認めるが、ガキの声は微かに震えていた。

今でも会いたいと思っているのか。
そう聞きそうになったがぐっとこらえた。
「王都ユダへの乱入後拘束されているらしいが、いつ戦場に出てくるか分からん。用心に越した事はない」
「うん」
素直に頷いたガキの肩で見ないうちに長くのびた黒髪が揺れる。
大人びた表情にどきりとした。
「他の天使が戦場に出ることはないと仮定して、残りはゲブラ、死霊遣いホド、セフィラの長ケテルの3人を倒せばいい」
「ラックを入れて3人、ようやく1対1で対応できそうね。ケテルはアレイに任せるわ。あいつを倒せる可能性があるとしたらあなただけよ」
目に見えない光の矢を使うケテルの攻撃はもともと戦闘に特化しているわけではないねえさんや戦闘経験の浅いくそガキでは避けられないだろう。
最も、避けられたところで自分の攻撃がケテルに通用するかは分からなかったが、やるしかなかった。
ねえさんの言うとおり、倒せるとすれば可能性は自分にしかない。
「分かっている。前回は軍の事があって退いたが、今度は完全に叩き潰してやる」
ねえさんもそれが分かっているのだろう。
ほんの一瞬だけ金の瞳の中の意思が揺らいだのを見逃さなかった。
「死霊遣いは私が引き受けるわ。大人数を相手にするのは得意だから邪魔さえ入らなければあんな奴敵じゃない」
確かに多人数戦闘はデカラビアとバシンの加護があるねえさんが適任だろう。
自分がケテルを、ねえさんがホドを。
残りのゲブラは……
「できるわね、ラック」
「うん」

黄金獅子の末裔は強い意思を込めた瞳をしていた。
以前戦闘したときは手を抜かれていたとはいえフラウロスを初めて使う状態で一撃をいれている。剣技をマスターした今、倒せなくとも足止めが出来る可能性は高かった。
何よりゲブラはこのくそガキを気に入っている帰来がある。
当てには出来なかったが、殺すことはしないのではないかという疑心が片隅にないわけではなかった。
「あいつはおそらく見たことのない剣術を使ってくるだろう。千里眼を使えればいいのだが、堕天のアガレスは召還できない。あいつの召還するカマエルとお前の使うフラウロスが同等だとしたら、あとはお前自身の力が重要になってくるだろう」
「無茶はしちゃだめよ。負けそうだと思ったらすぐに言うこと！王都で一人レラージュと戦った時とは違ってここには私も、アレイだっているんだから」
そう、そのために近くにいるのだ。
どこにいても助けに行けるように。
「うん、分かった」
「何より、戦場で私たちレメゲトンの使命は一つ。一般兵をセフィラとの戦闘に巻き込まない事よ。天使を召還した状態のセフィラと互角に戦闘できる単騎兵はいない。いるとしても騎士団長クラスでサブノックの武器を持つ『覚醒（アウェイク）』という部隊のトップメンバー数名だけ。でも、私たちは悪魔を召還することでセフィラを押し留める事が出来るわ」
「普通の兵士さんには手を出さずに、セフィラのヒトだけ相手にしたらいいんだね」
「そうよ」
ねえさんはどこか悲しげに微笑んだ。
その気持ちは言葉にしなくとも伝わってきた。
自分が大切に育てた子が戦場で敵と戦うという。守るためといいながらも血を流す事になるだろう事実――戦争なんかなかったらよ

かったのに。
それでもねえさんはその感情を振り切ってガキを諭した。
「最初の目的はトロメオの奪還。それ以上はまだ何も考えなくていいわ」
その瞳に悲痛な色を映しながら。
愛しい子が戦場に出ることに傷つき心の涙を流しながら――

SECT．2　新シイ武器

部屋を出てすぐ、黒髪のレメゲトンが追ってきた。
「アレイさん」
「どうした」
「あのね、実はね……王都の城下町まで一緒に買いに行った小太刀があったじゃん」
「それが？」
「ずっと使ってたらぼろぼろになっちゃって……」
くそガキがそう言いながら鞘から抜いた小太刀は刃こぼれしてもうろくに切れはしないだろう状態になっていた。それだけでなく峰の方からひびも入っている。
いったいどうやって使えばこういう状態になるんだ。
武器の手入れも教えなくてはならない。そう思って大きなため息をついた。
この状態で戦闘すればいつ刀身が折れるか分からない。そうなれば生命に危機が及ぶ。
「どうしてこんなになるまで放っておいたんだ。武器はこまめに手入れしろ。小さな亀裂が戦闘では致命傷を招く事もあるんだ。コインと同じだ。お前の命を預かるものだ。もっと気を配れ、このくそガキ」
一気にそこまで言うと、ガキは素直にうなだれた。
「ごめんなさい」
「……まあいい。いい機会だ、戦場に出る前にお前の武器を作ってもらえるかサブノックに頼んでみよう」
悪魔耐性とそれなりの腕を持つ者は既に大方『覚醒（アウェイク）』のメンバーになってしまったそのため、ここのところ武器を求めてサブノックを呼び出す機会が減っていた。
何ヶ月もの訓練でどれほどの腕になったかは分からないが、こい

つならすぐに武器を作ってもらえるだろう。
「ほんと？」
「ああ……これからお前は軍の前で紹介されるのだったな。その後だ」
「アレイさんも一緒に行くんでしょ？」
「一応出席する事になっている」
「んじゃ、一緒に行こう！」
そう言うとガキはぱっと自分の手をとった。
温かい感触にどきりとする。
「やめろ、恥ずかしい。ガキじゃないんだ」
「いつもガキって言うくせに」
「お前は自分の見た目を気にしなさ過ぎなんだ！」
こんなところを『覚醒（アウェイク）』のメンバーにでも見られたら何を言われるかわからない。
しかし、嬉しそうなガキの様子を見ると振り払う気にはなれなかった。
仕方がない。
そう思いながらも人に触れられることに喜びと驚きを感じていた。
悪魔の血を持つ自分にとって、このガキは躊躇なく触れる事が出来る数少ない人間の一人だった。もしかすると、自分の中の悪魔を受け入れられるのは世界中でこの少女だけなのかもしれない。
いつだったかねえさんが言っていた言葉をやっと微かに理解した。
――あの子を絶対に離しちゃだめよ。ラックにはあなたしかいないし、あなたにはラックしかいないんだから

しばらくはそのまま歩いていたのだが、向こうからフェルメイがやってくるのが見えて慌てて手を振り解いた。
見られただろうか？
フェルメイはいつもの笑顔でにこりとガキにも笑いかけた。
「ウォル先輩、そちらが新しいレメゲトンの方ですか？」

「ああ。これから軍の前でお披露目がある」
そう言うとフェルメイは軽く頭を下げて挨拶した。
「初めまして。私はフェルメイ＝バグノルドと申します。炎妖玉騎士団アルマンディン部隊長と対　幻想部隊（フラウス）『覚醒（アウェイク）』の副隊長を兼任しています」
「初めまして。レメゲトンのラック＝グリフィスです」
ガキも笑顔で答え、手を差し出した。
フェルメイは形式に沿ってその手をとり、甲に尊敬の口付けを落とす。
「どうぞよろしくお願いします。ミス・グリフィス」
するとガキは驚いたように目を見開いた。
そうだった。3年間カトランジェという田舎の街で育ったくそガキにマナーも何もないのだ。
軽くため息をついて教えてやる。
「手の甲への口付けは敬意を表す。そのうち必要になるかも知れん、覚えておいた方がいい」
「ああ、そうなんだ。おれは握手しようと思ったんだけど」
握手を交わすのは互いに武道を心得ている場合だ。もともと武器を持っていない事を示すために行う挨拶だから、女性のレメゲトンと騎士団の部隊長の間で交わされるのは不適切だ。
もしここが戦場で、このガキがフェルメイより上位の騎士だったならば話は別だが。
武器の手入れといい、まだまだ教えなくてはいけない事が多いようだ。
「俺やねえさんがいる前ではフォローしてやるから構わんが、一人でいる時は身分の上下に気をつけろ。レメゲトンが下手な事をすれば問題になる」
「面倒なんだね」
そんなやりとりを、フェルメイは驚いたように見ている。
当たり前だ。誰も名門グリフィス家の末裔であるレメゲトン、そ

れも見た目だけなら絶世の美女とも呼ばれることになるだろうこの少女の口からでるにはあまりにも不自然な言葉だからだ。
だが、フェルメイなら性格上このようなくそガキのいい教育係になってくれそうだった。
「フェルメイ、公式の場以外でこいつに敬意を払う必要はない。見た目はこうだが、分かるとおり中身はガキだ。王都で貴族として育ったわけでもないから礼儀もない。その上鳥頭の阿呆だから苦労する事になると思うが、よろしく頼む」
「またガキって言った！」
むっとしたように唇を尖らせる表情は、見た目と年に合わない。
口で言うのが面倒になって考えるより先に手が出てしまった。額に手のひらが軽く当たって、思った以上にいい音がした。
ああ、しまった。阿呆面を見ながらずっと我慢していたのだが……とうとう叩いてしまった。
一瞬何が起きたか分からずに呆けたガキは、隣にいた俺に額を軽く叩かれたのだと気づいて憤然と抗議した。
「えええ?！　アレイさん今、叩いた?　おれのことぶった?」
「黙れ、うるさい、このくそガキ」
余計面倒な事になってしまった。
「ねえちゃんに言いつけてやる！」
「勝手にしろ。余計な事言ってないで行くぞ。遅れる」
「もう！」
またも唇を尖らせたガキを放置してさっさと歩き出した。
フェルメイが微妙な表情をしていたのは見なかった振りをした。自分がこのくそガキをこんな風に扱っているのはどうせすぐばれる事だ。
不敬などといわれる前に、早めにわかってもらう必要があった。
新たなレメゲトンの到着が宣言される場となる中央広場にはすで

にねえさんもアリギエリ女爵も到着していた。
　というか最近この二人はなぜか異様に親しくなっている気がする。一体何があったのだろうか。
　裏の建物の中からひそかに広場をのぞくと、千を越す兵が既に集まっていた。
「シェフィールド公爵家のようにバルコニーでもあったらよかったのだけれど、残念ながらカシオにはそんなものないのよね」
　ねえさんはにこりと笑った。
「ラック、あなた飛べるかしら？」
「んー、わかんない。アガレスさんに聞いてみるよ」
　そう言ったガキはアガレスを呼び出した。
　堕天のアガレスは人間には友好的だ。それもこのくそガキへの知識伝達者の役も担っている。
　現れた金目の鷹としばらく会話を交わしたくそガキは、何の予告もなく宙に浮いた。
「飛べたよ」
「……」
　あまりにあっけない結果に、周囲のレメゲトン3人は思わず脱力した。
「じゃあ行きましょうか」
　ねえさんもデカラビアの加護を受け、漆黒の翼を大きく広げた。
「うわあ！　すげえ！　ねえちゃんかっこいい！」
「ふふ、ありがと、ラック」
　同じようにアリギエリ女爵の背に触れてデカラビアの加護を渡すと、ふわりと宙に浮いた。
　自分も行かなくては。
「ハルファス」
　いつものように名を呼び、加護を受ける。
　飛び立とうとすると、まじまじと見つめる漆黒の瞳に気づいた。
「何だ？」

まだまだ中身が子供だったグリフィス家の末裔は、さも嬉しそうに破顔した。
「なにソレ、かわいい！」
何を言っているんだと思ったが、ガキの視線の先にあるものに気づいて思わず表情が引きつった。
一瞬で間合いをつめて耳元に手を伸ばしてくる。
そんな事にアガレスの加護を使うのは卑怯だろう！
「うわ、柔らかい！」
「やめろ！　……殴るぞ！」
こちらもハルファスの加護を受けている。二人とも悪魔の加護を受けた状態で下手に抵抗すれば大惨事だ。
動けないでいると、上からねえさんの声が降ってきた。
「今はやめなさい、ラック。きっと後から存分に触らせてくれるわ」
「はあい」
そんなわけないだろう！と叫びたかったが、外の広場に聞こえては元も子もないので我慢した。
このくそガキの前でハルファスを召還するのはやめよう。
心に固くそう誓った。

SECT．3　告白

ここのところ、カシオに到着してすぐに見つけた町外れの剣術道場だった場所を稽古に使っていた。
その場所を使ってサブノックを呼び出してくそガキと引き合わせると、黄金獅子の末裔は思ったとおりあっさりと悪魔の承諾を得ることができた。
アガレスとフラウロスのコイン、グラシャ・ラボラスの左腕、マルコシアスとクローセルの羽根――そしてサブノックの武器。
こいつは一体何人の悪魔の加護を受ければ済むのだろうか。
その上ねえさんに口に出すなといわれたが、額に魔界の王リュシフェルの印を刻んでいる可能性もある。

道場から寝泊りする屋敷へ帰る途中、くそガキは途切れることなく王都での生活を嬉しそうに報告していた。学校へ通った記憶のないこいつにとって同い年の少年少女と過ごすのはいい経験になったようだ。
ヴィッキーと言う女性騎士にはかなり懐いていたようで、何度も何度も名前が出てきた。
王都でどれだけ満たされた生活をし、充実した日々の中で稽古に励んでいたのかがよく分かる。
ところがガキは、唐突に信じられないことを言い出した。
「朝起きたら首のコインがなくなっててさー」
一瞬何を言っているのか理解できなかった。
聞き返すことも出来ず眉を寄せると、ガキはへらへらと笑いながらコイン喪失と捜索の話を始めた。
どうやら貴族出身の娘が、平民と結ばれたいがためにレメゲトンの地位を狙いコインを盗んだというのがおおまかなあらすじらしかった。

事件解決まで話し終えると、ガキはポツリと呟いた。
「ねえ、アレイさん。レメゲトンってさ、やっぱすごいの？　みんながなりたいって憧れるくらい？」
「そうだな、事実上王に次ぐ位だからな」
それでも、自分は願ったわけではなかったしできることなら悪魔の気を持つ体など欲しくはなかった。
大切な家族を死に追いやったのは紛れもない自分なのだ。
「おれやっぱりまだよくわかんないよ」
悲しそうに目を伏せた少女はポツリと呟いた。
「でもおれはもうヒトに触れないよ。きっと……迷惑かけちゃう。だっておれは生きている限り悪魔の気を発し続けるんだから」
その言葉にはっとした。
自分が負った枷と同じだったから――
グラシャ・ラボラスのコインが埋め込まれた左手を持ったこのくそガキと、悪魔の血を受け継いだがためにヒトに触れられぬ自分は、同じ心の痛みを抱えている。
コインの埋め込まれた左手を震えるほど強く握り締め、グリフィス家の末裔は立ち止まった。
つられるように足を止める。
夜の冷やりとした空気の中に二人並んで外には出せぬ心の痛みを抱えていた。
同じ痛みを負っている。
とても不謹慎な事に急に距離が近づいた気がした。
これから生きていく先、悪魔の気を持った事で何度も何度も傷つくだろう。人に触れられぬ事で寂しさを一人抱える日もあるだろう。
その痛みを互いに癒す事はできないのだろうか。
震える左手にそっと手を添えた。
見上げてきた漆黒の瞳は今にも泣きそうだった。
「アレイさん。もしかしてアレイさんも――」
自分の中の痛みにも気づかれてしまったようだ。

それでも、口に出さなくていい。言葉にしても仕方のないことだ。
また、互いに傷つけあってしまうだけだろうから。
その先の言葉を阻むように、桃色の唇にそっと人差し指を当てた。
口を噤んだくそガキの手を引いて、もう一度夜の街を歩き出した。

コインの埋め込まれた手を引きながら、ほんの少し満たされた自分に罪悪感を覚えていた。
この左手があることで傷ついた少女を見ていくらか癒されてしまったからだ。人の傷を見て癒されるような事、あってはならないのに。
すると少女は、唐突に口を開いた。
「傍にいて、いい？」
何の脈絡もないその言葉に驚いて振り向くと、なぜか泣きそうな顔をしたガキの瞳が真直ぐにこちらを向いていた。
「おれはアレイさんに傍にいて欲しいよ。隣で戦いたいよ」
それは今までと少し違う言葉だった。
これまでは一方的に「傍にいて欲しい」と求めていた少女が初めて隣にいたいと言ったのだ。
どういうことだろう。
「おれはあなたの隣にいていいのかな……？」
上目遣いに求める視線は熱に浮かされたように浮かび上がった。
この言葉は知っている。
自分がずっと心の中で飲み込んできた言葉だった。
まさか――
「ラック」
名を呼ぶと、少女は何かを希うようにつないだ手を握り締めた。
「俺はお前の父親にはなれない」
もしこれまでと同じ感情だとしたら、自分はそれに耐えられない。
自分と同じ感情を返して欲しいという欲望はもう留められないところまできていた。

「もしそれを望むなら隣にいてやることは出来ない」
きっと自分の心が耐え切れずにまた深い傷を負ってしまうから。
傷つきたくないと思うくらいは許してもらえるだろうか。それともこんな問い自体が卑怯なのだろうか。
ところが少女は首を横に振った。
「違うよ」
背までである黒髪がさらさらと揺れて象牙色の頬にかかる。
その頬にはほんの少し紅が差していた。
「傍にいて欲しいと思うのも触れて欲しいと思うのも……こんなにもワガママを言うのはアレイさんだけだよ」
それはどういう意味だろう。
ねえさんに向ける感情とは別に、もっと深い感情を自分に向けてくれているというのだろうか。
そう遠くない未来、あなたの気持ちを理解するようになるはずよ、と言ったねえさんの言葉がよみがえる。
本当にそうなのか？
期待してもいいのか？
ひどく動揺した。ずっと望んでいたことだったのに
「もし違うと言うのなら」
俺は。
迷うことなく――

「どうしたの？」
突然言葉を切った自分に、不思議そうな声がかかる。
まったく、どうしてくれよう。
「続きは、また今度だ」
「え？」
「邪魔が入った」
予測したとおりの声が夜の街並みに響き渡る。
「ウォル先輩っ！」

同時に後ろから重圧がかかって、首の回りに腕が回された。
癖のある茶髪が首に当たってくすぐったい。
「離れろ、ルーパス」
もしかすると結ばれていたかもしれない瞬間を邪魔されて、思った以上に苛々していた。
手加減なしでその体を弾き飛ばして大きなため息をついた。
「邪魔しやがって」
「邪魔でした？」
「当たり前だ！」
本当にもう苛々する。
何故このタイミングで現れるんだ。
対してくそガキは突然乱入した炎妖玉騎士団（ガーネット）の少年に驚き、目をぱちくりしていた。
「ねえ、アレイさん。このヒト、誰？」
「こいつは対　幻想部隊『覚醒（アウェイク）』（フラウス）のメンバーの一人、ルーパスだ」
ルーパスはなぜかその猟犬のような目でくそガキをきっと睨みつけた。
「ウォル先輩は渡さん！」
さっきの会話を聞いていたのか？まさかそれを感知して邪魔しにきたのか？
だとしたら一度本気で怒る必要がありそうだ。
「ウォル先輩ってアレイさんのこと？　渡さんって、別にアレイさんはお前のものじゃないんだろ？」
「うるさい！　これ誰なんすか。騎士にも見えないし、やたら先輩になれなれしいし……」
ああ、そうか。
このくそガキの肩書きを知っていたらこんな事にはならなかっただろうか。
「お前は今日のお披露目にいなかったのか？　こいつは新しくレメゲトンとしてやってきたラック＝グリフィスだ」

そう告げると、ルーパスは真っ青になった。
レメゲトン就任以前からの知り合いである自分は別にしても、グリフィス家の末裔に対してこの態度をとればそれなりの処分は免れない……普通ならば。
「不敬罪は勘弁してやる。どうせこのくそガキもそんな事など気にしていない」
「えと、ルーパスだっけ？　おれはラック。よろしくな！」
ガキはにこりと笑ったが、ルーパスはすごい勢いで膝をついて頭を下げた。
「失礼しました！　ご無礼をお許しください！」
あからさまに困っているくそガキが目で助けを求めてきたが、答えられずにもう一度大きくため息をついた。
どうやってこのくそガキの中身を伝え、この大げさな畏敬を解くか……非常に難解な問いだった。

SECT．4　先ヲ見ツメテ

次の日にはレメゲトンと騎士団長の面々で会議が行われた。
円卓の部屋に入るとすでにレメゲトン以外のメンバーは揃っており、心なしか輝光石（ダイヤモンド）騎士団長から敵意が発せられていた。
時間に遅れたわけではないが急いで席に着く。
資料を手にしたフェルメイが開会を告げる。
「それではあまり時間もありませんのでこのまま始めさせていただきます。まず、ヴァルディス卿から提案があるとのことなのでお願いします」
彼の言葉で輝光石（ダイヤモンド）騎士団長サンアンドレアス＝ヴァルディス卿が立ち上がった。
どうもヴァルディス卿は戦場に到着以来ずっとレメゲトンへの不信を募らせてきたようだ。おそらくセフィロト国の開戦宣言理由がその起爆剤になったようだった。
「既に決定しているトロメオの奪還作戦だが、レメゲトンの人数も増えた事で、ぜひ一部改定を申し出たい」
ヴァルディス卿は睨むようにしてぐるりとレメゲトンを見渡した。
「レメゲトンの方々には門を開いてもらいたい」
その意味不明な提案に、ねえさんの押し殺した声が響く。
「……どういうことかしら」
「トロメオは城塞都市だ。塀を越えるのは得策ではない。だからその人知を超える力で持ってトロメオの門を開き、軍を城内に導きいれてもらいたいのだ。今回トロメオが陥落した裏には敵国のセフィラが大きく関与しているという。それならば、もう一度取り戻すためにレメゲトンの力を使うのは道理」
あれはケテルだからこそできた事だ。
ハルファスやバシンの力であれが出来るかと聞かれれば答えは否だ。

ひょっとするとねえさんが召還するメフィストフェレスやくそガキの使役するグラシャ・ラボラスなら可能かもしれないが、それはあまりにリスクが大きすぎる。
「お言葉ですがヴァルディス卿、開門は内部に忍ばせた密偵が行う予定では？」
ねえさんの言葉より先にフェルメイが慌てる。
提案の内容を事前に把握していなかったのだろうか。
「強大な力を持っているのだ、彼らに託した方が確実だろう」
「……ヴァルディス卿、紛れ込ませた密偵に何か起きたのですか？」
ねえさんの声が物騒な怒りを孕んだ。
まずい、これはかなり機嫌が悪い。
「報告を怠らないでください。些細な事が崩壊のきっかけになるのですよ」
上の欠片もない声はまるで規律正しい軍の上官だ。
とはいえ、自分もヴァルディス卿の言うことを真に受けるほど馬鹿ではない。また、卿も個人的な感情でレメゲトンに無茶な役を押し付ける事はしないはずだった。
ヴァルディス卿は言いにくそうに暴露した。
「密偵が一人捕まった。今下手な動きを取らせれば全員が捕虜になる危険がある」
「……っ！　そんな重要な事を今まで隠していたのですか！」
フェルメイが言葉を失う。
他の騎士団長もざわりとざわめいた。
ヴァルディス卿は敵にもぐりこませた密偵の管理、報告を一手に引き受けている。すべての情報は卿を通して行われているのだ。
他にもフォルス団長は『覚醒（アウェイク）』を担当、琥珀（アンバー）騎士団長クライノ＝カルカリアス卿は一般兵の統率を主に担当している。
「その密偵からこちらの情報が漏れたということはないのですか」
「調査中だ」
「他の密偵を一旦退かせるべきでは」

「それより人質として交換条件など出されたときは如何するのか」
全員がざわめき立つ。
混乱する会議を収めたのはフォルス団長の一喝だった。
「みな落ち着け！」
しん、と静まり返る会議室。
その中でねえさんはがたりと席を立った。
「なんとか方法を検討してみます。今日はこれで失礼するわ」
「そ、それでは今日はこれで……」
フェルメイが慌てて閉会を告げる。
密偵云々は騎士団長たちに任せるとして、自分たちは軍をトロメオ内に引き入れる方法を考えねばならなかった。

考えるといっても、もうほとんど結論は出ている。
どう考えてもレメゲトンの人数が足りないのだ。3人がセフィラと交戦した場合、門を開ける事が出来る人員がいない。
ケテルはもちろんゲブラもホドも一人で勝てるような相手ではない。
「んじゃあやっぱり、倒すしかないんじゃないかなあ？」
くそガキが首を傾げながら言う。
「自分たちを増やすのが無理なら、向こうを減らせばいいよ」
「まあ、要するに……そういうことなのよね」
ねえさんは大きなため息をつくと、非常に大雑把な作戦を告げた。
「んじゃ、そういうことで。自分に割り当てられた敵を可及的速やかに倒す事。倒し次第トロメオの門を開く事――作戦は、以上！」

作戦実行まであと数日、その間にくそガキは新しくサブノックに貰った武器を使いこなせるようになる必要があった。
突撃体勢を整えるため準備に追われる兵たちを横目に、特訓を開始した。

場所はサブノックを呼び出した町外れの剣術道場。
「マルコシアス！」
呼ぶとすぐに褐色の肌の剣士が光臨した。
マルコシアスも双剣使いだ。学べる事は多いだろう。
「黄金獅子の末裔　見違えた」
近いうち花開くと言った戦の悪魔は、予言どおり美しく成長したグリフィス家の末裔を見て満足げに微笑んだ。
「久しぶり、マルコシアスさん」
「サブノックの剣を手に入れたか」
「うん。あんまり時間がなくて……あと何日かで使えるようになりたいんだ」
「仕方あるまい」
そう言って笑った口元に八重歯がのぞく。
「剣を抜け　幼き娘」
マルコシアスの言葉でくそガキはサブノックに鍛えてもらった両腰のショートソードを抜き、古体術の空手に似た構えで両剣を前後に構えた。
古体術にすぐれた義兄上に習ったのだろうか。一朝一夕では身につかない闘気を纏っていた。
体格と体力の関係であまり大きな剣を振れないくそガキにとって、短い間合いで戦える空手と2本のショートソードはかなり有効な武器になるだろう。
サブノックは全てを見越してガキにあの2本の剣を与えたのか。
短剣と呼ぶには長く小太刀としては少々短いその剣は、真直ぐな刃を持ち、柄の先には殴打に耐えうる金属の半球が取り付けてあった。また、手の小さいガキに合わせて持ち手が細くしてあった。その柄にはサブノックの悪魔紋章が刻み込まれている。
「実戦を通して学べ」
マルコシアスも片方の剣を抜いた。
「いざ」

真剣での稽古が始まった。

数ヶ月ぶりに見るくそガキの戦闘力は、格段に向上していた。

本来の目のよさと素早さを生かし、非力さを完全にカバーした隙のない戦いができるようになっている。以前まで目立った無駄な動きと太刀筋のブレが消えている。

基礎をしっかりと体に叩き込んできた証拠だ。

また、いい意味で経験の浅さが出ており、時に全く読めない攻撃を加えてくる事もある。

たったの数ヶ月でここまで来るには元々の才能に加えて相当な鍛錬が必要なはずだった。

「……文句なしに『覚醒（アウェイク）』部隊に配属できるな」

並みの騎士では歯がたたないだろう。

このような戦闘スタイルの兵はいない。かなりの戦闘経験がないと部隊長クラスでも苦戦するはずだ。攻撃の相性を考慮すれば、カウンター攻撃に弱いフェルメイを倒す事も可能かもしれない。

ぞくり、とした。

レラージュの暴走を一人で抑えたのにも頷ける。

とても数ヶ月前の彼女からは考えられない成長だった。

さらに、これに悪魔の加護を加えたら？堕天のアガレスは天使の前に召還できないため、セフィラ相手には使えないが千里眼を戦闘中に使う術を既に身につけていたとしたら……？

「敵には回したくない相手だな」

客観的に見てそう思う。

それなりの体格に恵まれた自分が最も苦手とするのは自分より素早く、小柄な相手だ。

もしこのままの速度でこいつが成長を続けていくと、どうなる？

恐ろしい想像に身震いした。

絶対に追いつかれてなるものか。自分も高みを目指し続けよう。

決してこのくそガキに追い抜かれることなどないように。

作戦実行の日は目前だ。

―――　ハジマリ　―――

俗っぽい言葉を使えば『一目惚れ』と言うんだろう。
初めて見たときから虜だった。
今思えば、その感情は自分のうちに流れる悪魔の血があのくそガキの中に眠る強大な悪魔の影に強烈に惹かれただけかもしれない。
でもそれは所詮ただのきっかけでしかなかった。

あの少女の心を深く知るにつれ、どんどん引き込まれていった。
自身のことより周囲の人間を心配する優しい心。凄まじい過去と類稀なる才能を持ちながら、なお安寧とした生活よりも自身を鍛える事を選ぶ強靭な精神力。
それより何より――太陽のように周囲のものを照らす光と癒しの温かさ。
気づいた時には何を捨てても守りたいと思うようになっていた。

しかしながらあの少女の隣にはいつも育て親のねえさんがいる。
少女が全身全霊を賭けて求める「一つだけ」に選んだ相手だ。勝てるわけがなかった。
だから俺が勝手に傍にいるだけでいい、と思っていた。

ところがあの少女は時折俺にだけその弱さや迷いをさらけ出す。
そして俺は舞踏の夜にとうとう傍にいることを許された。
少しくらい自惚れてもいいのだろうか――その瞬間に何もかもが豹変した。

愛されたいと願う心が芽生えた。
あの少女以外要らないと心が叫んでいた。

ある夜に少女は「傍にいていい？」と聞いた。
それは父親に送るものなのか。それとも恋人に贈る言葉なのか。
真意は知れないが、少しは期待してもいいんだろうか？

あの時は邪魔されて言えなかった答えを口にしたら。
いったいあの少女はどうするんだろう……？

SECT．5　平穏ヲ願ウ

とうとうその日がやってきた。
トロメオ奪還計画実行当日――あのくそガキに初めて会ったのはちょうどこのくらいの季節だっただろう。暖かな風と鮮やかな草木に一筋の懐かしさを見出した。
柔らかい初夏の風と共に駆け抜けた少女の笑顔に釘付けになったのは一年前の今頃だ。
早いものだ。
馬術を完全にマスターし、隣で一人馬に乗るくそガキを見て驚きとほんの少しの寂しさを感じていた。
何も知らず、何もできずにいたあの頃とは違う凛々しい横顔はグリフィス家の末裔に相応しいものだった。成熟する一歩手前の少女は溢れんばかりの魅力を振りまいていた。
レメゲトンの正装ではなくいつものラフな服装に着替え、両腰にはショートソードを携えている。ずいぶん伸びた髪をポニーテールのように高い位置で括っていた。丈夫な皮の篭手にはマルコシアスとクローセルの羽根が縫い付けてあるはずだった。
髪を上げたことで首筋に刻まれたセフィラの印が露になっている。くそガキはセフィラの標的となった証を隠すつもりはないようだった――ねえさんがメフィストフェレスの印を全面に押し出すように、逃げるつもりのないところを示しているのかもしれない。
このくそガキを見るといつもその強さにはっとさせられる。
育て親のねえさんの持つ絶対に揺るがない精神は、このくそガキにも受け継がれているようだ。

遠目に改めて見るトロメオは堅固な要塞だった。
高い城壁と周囲を取り囲む堀が外的の侵入を阻んでいる。小高い位置にあるシェフィールド公爵家から見下ろされているようで不快

だった。
何ヶ月も篭っていた城塞都市トロメオの地理は完全に頭に入っている。扉を破壊して侵入してしまえばあとはなし崩しに制圧できる計画が整えられていた。
かろうじて入っている密偵の報告から、トロメオ陥落の時に逃げ後れ捕虜になった兵の位置や軍の大体の位置は把握できている。
やはり最も需要になるのは門を破る事になるだろう。
ケテルによって一度吹き飛ばされたその鉄の城門は簡単に修復されている。
あれさえ破れば。
それが自分たちの仕事だった。
もっとも、最強のケテルを相手にする自分は足止めが精一杯だろう。それはゲブラを相手にするこのくそガキにも言えることだ。
おそらく門を破るのはねえさんの役目になるだろうことは容易に予想がついた。
「どうしたの、ラック」
ねえさんの心配そうな声ではっとした。
見るとくそガキが泣きそうな顔をしてトロメオを見つめている。
「ううん、だいじょうぶだよ」
慌てて首を振ったが、その顔から不安な色は消せていない。
城内にいる人間たちのことを考えて胸を痛めているんだろうか。
それともゲブラを相手にする不安で顔がこわばっているのだろうか。
どうして、ここから逃げていいと言えないんだろう。逃がしてやりたいと思う気持ちがないわけではないのに。
強くもろい心を持つグリフィスの少女が傷つくところは見たくない。
しかし――
国を守りたい。この少女を傷つけたくない。逃がしてやりたい。
見守りたい。隣で戦ってやりたい。代わりに自分が傷つけばいい。
たくさんの感情が混ざり合ってどんな言葉もかけられなかった。

自分の願望すべてを叶えることはできない。だから「一つだけ」を選べといったのは他でもない自分だったのに。
いま、自分は「一つだけ」に選んだはずの少女が戦場に出て行こうとするのを止められない。
グリフィス家の末裔、レメゲトンの力は強大だ。
その戦力を遠ざける手はなかった。
どうしてこいつはこんな力を持っているんだ。コインを持たず、悪魔耐性や親和性がこれほどまでに高くなければこんな事態には……
いや、分かっているはずだ。そんな仮定は無意味だと。
現に力を磨いて戦場に降り立ったレメゲトンであるのだから逃げるなどという道はない。グリフィスの血筋に生まれ、ねえさんに拾われ、レメゲトンに就任した事もすべてがこのくそガキを形作っているのだ。
それでも、もし二人ともこんな力を持たずに出会っていたら、とは思わずにいられなかった。
心の片隅で願う平穏。
いつかそんな世界がくると祈る事くらいは許してくれるだろうか……

ねえさんは背に黒い翼を広げ、同じようにくそガキの背にもデカラビアの加護を与えた。
「ハルファス」
もう呼びなれた名を口にすると、耳元がむず痒くなる。
その途端下から手が伸びてきた。
もちろん触らせるわけがない。ひょい、と軽く逃げるとその手の先にはむすっとした顔のくそガキの姿があった。背に黒い翼を湛えている。
誰が触らせるか！
一歩距離を置くと、くそガキは頬を膨らませた。

くそガキがマントを脱いで『覚醒(アウェイク)』唯一の女性騎士アズに渡している間、先に上空へ向かう。
久しぶりにトロメオを上空から見下ろしたが、街並みがかなり破壊されているのがすぐ分かった。
丸くこげたような跡はケテルの光の矢によるものだ。
多くの兵の命を奪い、たった一人でトロメオを陥落するに至った原因。
「アレイ」
隣に来たねえさんが真剣な声で告げる。
「絶対に無理だけはしちゃ駄目よ。死ぬまで戦う必要はない、私たちの役目は今でも足止めだけなのよ。ヴァルディス卿の無茶を真に受けてたらとても体が持たないわ」
黄金の煌きが真直ぐに見つめた。
「死んじゃだめよ、アレイ。あなたは生きてあの子を守って」
「……だから、そんな言い方をするとねえさんが死ぬみたいじゃないか。やめてくれ」
言い返したが、ねえさんはにこりと微笑んだだけだった。
その微笑から視線を外して、ポツリと呟いた。
「だが……もう決めた。迷わない。この戦闘から帰ったら、ちゃんとあいつに言う」
それはこの数日で決心した事だった。
あの夜のくそガキの態度が、勘違いでないならばきっと――
「よかった。これで一安心ね」
ねえさんがもう一度にこりと微笑んだところでくそガキが空に上がってきた。
背にデカラビアの加護を受け、漆黒の翼をはためかせて。
トロメオ奪還は砦の確保以外にも、逃げ遅れて捕虜となってしまった多くの兵や備蓄していた食糧、武器を手に入れるためにも早急に必要だった。

今後の戦局には今日の勝敗が大きくかかわってくる事だろう。
さすがに緊張したのか、くそガキが珍しく眉間に皺を寄せてトロメオを睨んでいた。
「ラック。大丈夫よ、あなたは強い子だわ。きっと大切なものを自分の手で守る力を持っている」
ねえさんは母のように優しく微笑んで黒髪を撫でた。
ポニーテールが微かに揺れる。
「でも、忘れないで。私はあなたをずっと近くで守る。辛いときは言いなさい。あなたが望む限りずっと助けるわ」
その笑顔と言葉に一抹の不安がよぎる。
ねえさんがまるで今生の別れをしているようにも感じられた。
「心配しないで。ここには私もアレイもいるのよ」
何だろう、この不安は。
まるで死を覚悟しているかのような言動に、胸のうちがざわめく。
「行きましょう。グリモワール王国の、未来のために」
それでも、そういってトロメオを指差したねえさんはいつものようにレメゲトンの長としての威厳を放っていた。
「デカラビアはフラウロスと共存できないかもしれないわ。フラウロスを召還するときは気をつけて」
ねえさんの緊張を含んだメゾソプラノが消え入らないうちに、セフィロト軍から鬨の声が上がった。

SECT．6　戦闘開始

大きな地鳴りを立てて両軍が攻めていく。
黒い旗印のグリモワール軍、そして白い旗印のセフィロト軍。
数はほぼ同じだろう、ホドの幻想兵もケテルの参入もない、小細工一切なしの総力戦だった。この戦は一つの局面を迎えていた。
ここは絶対に退くわけにいかない。
なんとしてでもトロメオを取り戻さねばならない。
初めて戦場の空気に触れたくそガキは、肩を抱くようにして硬直していた。
無理もない。
あの黒い点の一つ一つが人間で、それらがみな殺し合いをしているなど、自分だって今なお信じられないことなのだから。
「行くぞ」
軽く肩に触れると、光を湛えた漆黒の瞳が見上げてきた。
すなおにこくりと頷いたガキの表情は凛としたガラス細工のようだった。
強くて、脆い。しかし一点のにごりもない純粋な願い。
そんなお前に、帰ってきたら必ず伝えよう。
お前の傍にいたいと。お前には傍にいて欲しいのだと。
そして――

トロメオの門を破壊しようとすれば確実にセフィラが出てくるはずだ。どこにいるのかは密偵調査でも突き止められなかったが、見ていることは確かだ。
そう踏んで全軍の衝突帯を避け、空から真直ぐに門へと向かった。
門が目視できる距離で停止し、両手を城門へと向ける。
「下がれ」

隣に浮かんだくそガキとねえさんに一応忠告する。巻き添えを食うことはまずないと思うが、ケテルの光の矢が応戦してくる可能性はあった。
ひとつ、深呼吸する。
そして今や戦友と化した戦の悪魔の名を高らかに叫んだ。
「ハルファス！」
「ひひ！　あれ壊していいんだな！」
聞きなれた甲高い声と同時に、周囲の空気が一変したのが分かった。
風がハルファスの支配下に落ちる。
凄まじい勢いのかまいたちが城門へと向かって飛ばされた。
さあ、出て来い！
城門にあたる寸前のかまいたちは、横方向から飛んできた炎の塊によって相殺された。
「来たわね」
こんなことができるのはセフィラの中でも一人しかいまい。
「まずはおれからだ！」
くそガキは迷うことなく両腰のショートソードを抜いて手品師（ゲブラ）に飛び掛っていった。
空を飛ぶことを覚えたくそガキは、めきめきとその力を伸ばしていた。
二本のショートソードを巧みに使ったヒット・アンド・アウェイの戦法で、それこそ駆け抜ける旋風のようにして敵を翻弄する。
鳥のように空を舞い、剣を振るうその姿を見たマルコシアスはこう言った――「燕だな（ケリドーン）　空を裂き　舞う　鋭い風」
そうして、あのくそガキが空を舞う姿に名をつけた。
鋭く空を裂いて飛ぶくそガキの姿に、ねえさんが感嘆の声を漏らす。
「あの子、いつの間にあんなに強くなったのかしら」
「……マルコシアスが『風燕（ふうえん）』と名づけた。素早さと、悪魔の加護

を持つあいつ独特の剣型だ」
「風燕(ウィンディ・スパロウ)？　ふふ、いい名ね。あの子にぴったりだわ」
追撃を加えながら門から遠ざかっていくくそガキと手品師の姿を、胸が裂かれんばかりの気持ちで見送る。
その後姿に心から無事を祈った。
無事に帰って来い。絶対だ。傷つくことも許さない。
もう決めたのだから。
「さあ、私たちはこっちよ」
ねえさんの声にふと視線を門に戻すと、兵たちが少し引いてぽっかりと広場のようになった門前に二人の神官が立っていた。
が、次の瞬間にはねえさんを抱いてその場を飛び退っていた。
同時に叫ぶ。
「サブノック！」
飛び出した青白いオーラを纏う武器の悪魔は振り下ろされたステッキを軽く受け止めた。
その隙に、ねえさんを抱えたまま門前に着地する。
ここが闘技場というわけか。
あからさまにセフィロトの兵がこの場所を開けている。これまでの戦闘により石畳で舗装されていた道も周囲に生えていた草木も根こそぎなくなってしまった土の大地こそ、自分たちのために用意されたフィールドだった。
ケテルとホドが自分たちを挑発しているのは明らかだ。
ここでセフィラとレメゲトンの決着をつけようというのだ。
「レメゲトンが一人増えたようですね……ゲブラがこの場を離れてしまうのは誤算でした」
色素の淡い茶の髪を風に揺らしながら、ケテルは冷徹な声で言い放った。
サブノックがそれを遮るように眼前に降り立つ。
つられるようにして、幻想(フラウス)のゲブラがゆっくりと地面に降りてきた。

背後に轟く戦の怒号は相変わらずびりびりと大気を震わせているというのに、まるでこの場所だけぽっかりと穴が開いたようだった。この場にいる誰かがほんの少しでも動けば、加護を持たない人間など介入する事もできない戦いが勃発するだろう。

息遣いにすら気を使うような空間を最初に打ち破ったのはハルファスの甲高い声だった。

「ひゃはは！　俺はメタトロンな！　お前はその傀儡で十分だ！」

サブノックの後姿に向かって放ったその言葉が沈黙を破壊した。

「戦争幻想（マルス・フラウス）、サブノックを消せ」

死霊遣いホドの呼びかけで、幻想の手品師がステッキを振り上げる。

ケテルは見たところなんら武器を持たず、ただ細いフレームの眼鏡をくい、と指で押し上げた。王冠の天使メタトロンの力に絶対的な自信があるのだろう。

隣のねえさんがバシンを召還したのを契機に、全員が弾かれるように戦闘を開始した。

魔界の長リュシフェルと並び称される天界の長メタトロンを相手に小細工は通用しない。

真っ向勝負だ。

自分の経験から培った戦闘的勘だけを頼りに持てる力の全てをぶつけるしかない。これまでずっと共に戦ってきたハルファスの加護を受け、軸足で強く地を蹴る。

この戦の前日マルコシアスから渡された白い羽根がコインに並べて右手首に括りつけてあった。

サブノック、マルコシアス、ハルファス。

力を与えてくれたすべての悪魔を信じて、自分のこれまでの鍛錬を信じて。

ケテルにたどり着く前に横っ飛びに地を蹴る。

「よく避けましたね、見えるはずはないのですが」

目が光を感知したときにはすでにその攻撃が自分のところまで届いている。文字通り光の矢は目に見えぬ速さで襲ってくる破壊の光線だった。
ケテルの様子と勘だけを頼りに避けるしかない。
逆に言えば、その光線さえ浴びなければケテル自身にそれほど高い攻撃力はないはずだ。
細いフレームの奥の狡猾な目を睨みつけながら攻撃のタイミングをはかった。
「ひひひ！　気をつけろよ！　あれ食らったら痛いじゃすまないぞ！」
「そんな事分かっている」
叫び返しながらも、メタトロンの放つあの絶対的な黄金のオーラを浴びてもなお怯まないハルファスが今は頼もしく思えた。
「ハルファス、あれを弾く事はできないか？」
「ひひ！　俺には無理だ！　お前の剣でもな！」
近寄るごとに光の矢を放たれたのでは、いつまでたっても間合いに入れない。
どうする？
受けるのを覚悟で突っ込むか？
「あいつの剣ならできるかもな！　ひゃは！」
ハルファスが指したのは闘気をまとった武器の悪魔の姿。
そうか、傷口を腐らせるというサブノックの剣は通常の武器ではない。あの剣を使う事が出来れば、あるいは……
幻想（フラウス）ゲブラと対峙した壮年の剣士はこちらに気づいたようだが、この状況で相手から意識をはずす事はありえなかった。
仕方がない、サブノックが幻想（フラウス）に負けるとは思えない。
少しの間逃げ回ろうか？
そう思ったとき、鋭いメゾソプラノが響き渡った。
「メフィストフェレス！」
刻（とき）の悪魔の召還だった。

SECT．7　滅ビノ天使

伝承が確かなら、メフィストフェレスも堕天のはずだった。が、天使の、それも天界の長の前であるというのに存在を保つどころか自分のフィールドに包み込んでしまっていた。

刻（とき）の悪魔は、世界の理を超えるまでに強大な力を持つというのか。

それでも支配が及ぶ範囲を最小限にとどめたのか、時が止まったのはこのフィールドだけのようだった。

その空間がメフィストフェレスの支配に落ちると同時に、幻想（フラウス）ゲブラの動きが停止する。いかに大量の羽根を使い作り上げた幻想といえど、メフィストフェレスの支配から逃れられなかったようだ。

サブノックには十分な時間だった。

大きく振り上げられた剣がゲブラを分断し、真っ赤な羽根がフィールド内を無数に散り、時間の止められた空間にさざめく事すらなく停止した。

「……オレの戦争幻想（マルス・フラウス）がやられちまった」

ぽつりとホドが呟いた。

サブノックは何もかもを理解しているかのようにそれを無視してこちらに飛んでくる。

そのまま青白い霧へと姿を変えたサブノックは、自分が手にしていた剣に絡みつくように吸い込まれていった。

禍々しいオーラが剣から流れ出している。

これこそが武器の悪魔サブノックの特殊能力なのだろう。

これまで誰も見た事のない武器への加護により、初めてケテルが放つ光の矢と対等に戦える力を得た。

「ひひ！　面白くなってきたな！」

甲高いハルファスの声が時の止められた空間に響く。

とは言っても、ホドもケテルもその干渉を受ける気配はない。ただ、空中でピクリともせず停止した大量の真っ赤な羽根だけがそれ

を伝えていた。
メフィストフェレスの加護を受けたねえさんは風もないのにふわりと髪を揺らして宙に浮いた。
この時のねえさんは実に妖艶な空気を纏う。
深入りしたら二度と現世へは戻れないと分かっていても嵌まり込んでしまう魔性。横顔は毒の棘を持つ真紅の薔薇、その声は船乗りを海中深く引きずり込むという妖惑女（サイレン）の囁き。
ぞくりとするほどの美貌は視線を外すことを許さない。
あの金の瞳に魅入られたら、もう……
「集中なさい、アレイ。またこの間のようなことになるわよ？」
はっとしてケテルのほうに視線を戻すと、ケテルが光の矢を放つところだった。
とっさに地面を蹴る。
間に合うか？！
が、予想していたような衝撃は来なかった。
「それが光の矢の正体？　案外小さいのね」
ねえさんが指差した先、凄まじい光とエネルギーを放つ光の球が浮いていた。
周囲を稲妻のように爆ぜる光がバチバチと音を立てながら取り巻いている。
メフィストフェレスは、天界の長が放つ光の攻撃の刻（とき）すらも奪ってしまうのか。
矢ではなく、ゲブラの放つ炎球と同じ形状をした光球だったらしい。あまりの速度で飛んでくるため傍から見ると光線のように見えたのだ。
ねえさんは唇の端で微笑むと、細く長い指をその光球に向けた。
くい、と指を動かすとその光球はなんとケテルに向かって飛んだ。
「！」
まばゆい光が炸裂する。
閃光に思わず目を閉じた。

恐る恐る目を開けると、ケテルは門の方向にふっとんで仰向けに倒れていた。
ピクリとも動かない。
「倒した……のか？」
「そんなに甘くないわ。使う人間はどうあれ、加護を与えたのは天界の長よ」
ねえさんの言葉の正しさはすぐにわかった。
仰向けのケテルがふわりと浮いた。
背に大きな金冠を背負っている。両脇から伸び、頭上を通るようにアーチを描く大きな金の輪だ。
「メフィストフェレス　貴方は彼と決裂したはずです」
ケテルの口から漏れたのは、本人とは違う声だった。
確かに音として認識し、文章として理解したはずなのに高いのか低いのか、掠れていたのかシンの通った声なのかも全く分からなかった。
強いて言うなら風の音に似ている。
低くも高くもない、自然が奏でる音だ。
「ほほ　ここにいるのは私個人の意思です　彼は関係ありません」
刻（とき）の悪魔の声はどこからともなく響いた。
その発信源が分からずあたりを見渡したが、姿は見当たらなかった。
「この世界は滅しようとしているのに　抗うなど　貴方らしくありません」
「我が名の娘が　存続を望むなら　私は喜んで力を貸しましょう」
「いつか壊れると知っていながら　何故心血を注ぐのです」
「芽が育つ故　私は希望を見出しました」
メタトロンとメフィストフェレスの言葉だけが時のない空間に響く。
「悪魔の子　黄金獅子の末裔　王族の良心　そして　我が名の娘メフィア　これですべてです」

「柱を立てるというのですか　今更」
「無論　人の心が　永遠（アエテルヌム）を望む限り」
「そうですか」
メタトロンの空気が変わった。
今度こそ、本気だ。
ケテルが力の一部を借りていた時とは段違いの威圧感で押しつぶされそうだった。
ハルファスもサブノックも黙っている。
悪魔の子、黄金獅子の末裔、そして『柱』……何度も様々な悪魔の口から出た言葉だった。
聞き覚えのあるその単語は自分たちのことを指すのだろう。光が別った世界が滅び行こうとしている、とはグリモワール王国の滅亡を示唆しているのだろうか。
この戦が終わったら問いただそう。
いったい悪魔たちは自分に何を求めているのか。光とは何か。柱とは。そして魔界の長リュシフェルはなぜ天使をやめ、魔界を創造したのか――
すべてのはじまりはグリモワール王国の建国、そして魔界の創造にある気がした。
「ならば　滅しなさい」
ケテルの――メタトロンの背後に広がった金冠がさらに光を帯びる。
よく見るとそれは金冠ではなく、数十枚もの翼だった。
煌かんばかりのまばゆい光をはなつ翼が幾重にも折り重なってまるで金の輪を背負っているように見えたのだ。
その背後にはもうトロメオの門が迫っているというのに。
加護を受けて走れば数秒もかからないこの距離が遠い。
「アレイ！」
鋭い叫びにはっとして考えるより先に体が動く。
今までいた場所には一瞬で大きな穴が口を開けた。

自分の身長ほどの深さを半球状に地面を抉り取られた。が、爆発とは違う。音もしなかったし周囲に抉り取られた土も落ちていない。
「……！」
何だこれは。
今までの破壊する攻撃とは全く種類が異なっている。
音もほとんどしなかった。
「避けなさい　私はあれに対抗する術を持ちません　ほほ　相性の悪い敵なのです」
メフィストフェレスの声が響く。
刻の悪魔ですら抵抗手段を持たないあの力は一体なんだ？
「ひゃはは！　やべえ！　やべえ！　あれ食らったら死ぬじゃすまないぞ！」
「何だ、あれは？」
「滅びだ！」
そうか、あれは消滅だ。
音もなく空間を消す。それは滅びの力に他ならない――世界を統べる者だけが持つ力。その前には時間を止める事も意味を成さず、ただ身を任せるしかない。
「ひひ！　あいつと同じだ！」
「あいつ……？」
滅び。
その言葉には覚えがある。
コイン第２５番目、殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラス。
あの悪魔も天界の長と同等の能力を持つのだろうか。あのくそガキはそんな悪魔と契約したと言うのか。
いずれにせよメフィストフェレスが対抗できないと言うのでは、自分たちに反撃の手段は残されていない。隣を見ると、ねえさんも唇を真一文字にひき結んでいた。
背に数十枚の翼を湛え黄金のオーラに包まれたケテル――メタトロンは静かに告げる。

「ラファエル　下がりなさい」
「無理だ。空間から出られない」
眼鏡のホドが答えると、メタトロンは右掌を頭上に高く掲げた。
ぱぁん、と乾いた破裂音が空間全体を震わせた。
ただそれだけでメフィストフェレスの支配していた空間から元の戦場に戻ってきた。
その証拠に空中に停止していた赤い羽根ははらはらと地面に舞い落ち、背後で戦の喧騒が響き渡った。
そして、地鳴りも怒声も何もかもの干渉を超えた声が耳に届いた。
「存続の見えない世界を滅ぼすのは　施しなのです　抵抗は許しません」

SECT．8　破壊人形（メフィア・ドール）

ねえさんの判断は早かった。
「退くわよ、アレイ！」
今の自分たちに勝てる相手ではない。
最高位の悪魔メフィストフェレスでさえ防ぐ事はできないと言い切ったのだ。これ以上この場に留まっても勝てる確率は限りなくゼロに近い。
もう一度作戦を練る必要がある。
それこそあのくそガキの滅びの悪魔を使うくらいに思い切った作戦が必要だ。
「ハルファス！」
「逃げんのか？　ひひ！　それがいいだろうな！　俺も消えたくないからな！」
強い風が自分の周囲を包む。
サブノックが乗り移った剣と共に堅固な障壁と成った。
ねえさんも黒い霧を纏って飛び上がる。
メタトロンの声が追ってくる。
「世界の存続を叫ぶ幻想（フラウス）は打ち払う」
その言葉をねえさんがはっきりと否定した。
「幻想なんかじゃない」
これまで何度も何度も自分の迷いを打ち払ってくれた迷いのない声だ。
「この国を滅ぼさせはしないわ。私の大切なものがたくさんあるの。傷つけて欲しくない人がたくさんいるの」
あのくそガキが言いそうな子供じみた理由だった。
しかし、自分たちの戦う理由などそれだけでよかったのだ。ここでこうして命を懸けて天界の長と対峙するには十分すぎる動機だった。

すべては自分たちが生きる世界の存続のため。
大切な人が生きる世界を守るため。
「もし貴方たちの侵略に抵抗できる最後の希望が私たちなのだとしたら、この場は逃げるのが最良」
そうだ。
自分たちレメゲトンがやられたら、もうグリモワール国に手は残されていない。『覚醒（アウェイク）』の面々ではホドを、ましてやケテルを押し留める事など不可能だ。
圧倒的な力を持つセフィラたちを相手になす術なく国を明け渡す事になってしまうだろう。
最も避けるべき事態。
勝つためでなく、負けないための戦い。
それは最初に誓ったとおりだ。
それを聞いた天界の長、セフィラ第一番目王冠の天使メタトロンは感情のない声で言った。
「メフィストフェレス　揺ぎ無い心に　入れ込みましたね」
「ほほ　貴方には分かりませんか　人が願う心の強さを」
「しかし　その思想は危険です」
ぴぃん、と空気が張り詰める。
その時だった。
トロメオから少し離れた場所で、凄まじい爆発音がした。
はっと振り向くと、見たこともないような炎柱が天高く上っている。地獄の業火と天界の輝炎が絡み合うようにして初夏の青空を貫いていた。
フラウロスとカマエルの炎が真っ向からぶつかり合っている。
あのくそガキが戦っている。
どきりとした。
ホドも、メタトロンすらその炎のぶつかり合いに目を奪われていた。
人知を超えた炎はトロメオの上空まで暴れまわり、いくらか軍を

巻き添えにし、最終的に大気と大地を震撼させる轟音を上げて爆発した。
「……！」
息を呑んでその様子を見守った。
地獄の業火が輝炎を飲み込んでいく。
二色の炎が交わりあった場所は紅蓮を越えた蒼淡色にみるみる変化していった。
灼熱を超えた温度の炎になった証拠だ。
「カマエル」
メタトロンの声ではっと現実に舞い戻る。
地獄の業火が天界の輝炎を飲み込んだ。これは、あのくそガキの勝利を確信していいのか？
ねえさんも同じことを思ったのだろうか。
金の瞳と視線が合う。ねえさんは風の障壁を纏う自分の隣に立ち、にこりと微笑んだ。
「消滅など　ありえません」
メタトロンの声にはやはり抑揚がなかった。
それでも少し焦りが感じられたと思うのは自分の気のせいだろうか。
その瞬間、フィールドをまばゆい光が覆った。
「……なっ？！」
一瞬目がくらむ。
同時にハルファスの容赦ない風でその場から吹き飛ばされた。
すぐ傍を光の矢が通り抜けていった感覚があった。次に飛んできた光球を勘だけで叩き落す。
ねえさんを庇うように立ちはだかりながらサブノックの加護を受けた剣で光球を次々叩き落していった。
メタトロンはその様子を見て、後ろに控えていたホドに命令する。
「ラファエル　捕らえてください」
「仕方ないな」

メタトロン相手にも敬語を使うことのないホドは、ぱちん、と指を鳴らした。
すると何もなかった空間に真っ赤な球体が現れた。真紅の羽根がぎっしりと詰まった硝子の球だ。
なぜかどこかで見た覚えがあった。
どこで見た？
「オレの最高傑作だ」
ホドはその硝子を砕いた。
ぴぃんと耳につく音がしてはじけとんだ硝子球から無数の羽根が舞い散る。
その羽根は徐々に形作っていった。
――信じられない姿がそこにはあった
「う……そ……」
普段あまり呆ける事などないねえさんが呆然となるほどに。
腰まであるストレートブロンド。猫のような金の眼。カトランジェの街中の男を虜にした女性らしい曲線を描く体。
いま、自分の隣にいる女性と瓜二つだった。
死霊遣い（ネクロマンサー）ホドが初めて笑った。さも嬉しそうに。
「破壊人形（メフィア・ドール）……もしかすると、本体より強いかもな」
そうだ、あれは以前ねえさんを束縛した血の制約。大きな十字架に括られたねえさんの姿が目の前に想起した。
驚いて目を見開いたねえさんは、時を止めようと手を伸ばす。
が、破壊人形（メフィア・ドール）と呼ばれた幻想（フラウス）は全く動じなかった。
「無駄だ。何しろこれはお前自身だからな」
血で人間を認識する悪魔にとって、ねえさんの血で作り出した幻想に危害を加えられないのはある意味道理とも言えた。
何と言うことだろう。
悪魔の力が効かないと知ったねえさんは太股に括っていたナイフを抜く。
が。

「だめだねえさん！　幻想（フラウス）に物理攻撃は……！」
ハルファスの作った風の障壁を解除してねえさんのもとへ飛ぶ。
自分の姿を映し出され、メフィストフェレスの力も効かず、思った以上に動揺していたらしい。効くか効かないか分からない無茶な攻撃をするなどいつものねえさんならありえないことだった。
間に合うか？！
一瞬遅く、自分の剣が届くより早くねえさんが短剣で幻想（フラウス）に斬りつけてしまった。
無論その攻撃は幻想に効かず、むしろ攻撃した彼女の方が吹き飛ばされる。
自分は遅れて追尾する幻想（フラウス）をサブノックの剣で牽制し、ねえさんを後ろに庇う。さらに追撃を加えるべく剣を振り上げた。
そして狡猾なメタトロンはその時を地上から狙っていた。
ねえさんが吹っ飛ばされて完全に防御できなくなる瞬間を。自分が攻撃に向かい、フォローできないその一瞬の隙を。
「Ｖ－Ａ－Ｌ－Ｅ」
別れの言葉を呟いたメタトロンがねえさんに指を向けた。
それが最後だった。
「――！」
目の前で、ねえさんが光の矢に貫かれるのを見た。

その瞬間だけ妙にスローモーションで覚えている。
ねえさんの姿をした幻想（フラウス）がホドの元に帰し、赤い羽根の塊に戻った。
その間にも真紅の液体を撒きながら落下するねえさんをなんとか地上すれすれで捕まえ、跪くようにして抱きかかえて傷を確認する。
「……っ！」
誰が見ても一目で分かる。
致命傷だ。

ちょうどメフィストフェレスの加護印があった腹部を、照準を絞った光の矢が貫通していた。
瞼は硬く閉じられ、傷からは真紅の液体が止め処なく流れ落ちている。
そこへ最悪の声が響いた。
「ねえちゃん！」
上空から落下してきたのは、ねえさんを誰より慕うグリフィス家の末裔だった。

SECT．9　グラシャ・ラボラス

上から落下してきたくそガキは、地面に着地するなり自分の腕の中にいるねえさんを覗き込みんで蒼白な顔で叫んだ。
すでに瞳が潤んでいる。
「ねえちゃん！」
くそガキの声にねえさんがうっすらと目を開けた。
「ラック……ゲブラは？」
「カマエルさんが消滅したよ。あとは門を破るだけだ」
「そう。よくやったわ、えらいわ……」
カマエルの消滅は確かだった。これでゲブラを退けたというのに！
ねえさんの声が小さくなっていく。
息が荒く、顔も蒼白だった。
腹部から流れ出す血が止まらない。このままではもう幾許も――
くそガキがねえさんの頬に触れた。
その瞬間、危険な気配を感じ取ってハルファスの風を呼ぶ。
「危ないっ！」
抱えたねえさんと目の前で泣きそうな顔をしたくそガキをまとめて風で吹き飛ばした。
もちろんメタトロンの光の矢を避けるためだ。
ハルファスの強い風の障壁が周囲を包む。
ねえさんは苦しい息の下で５つのコインをくそガキに差し出した。
「ラック、これを……」
くそガキは受け取ろうとしなかった。
そんな様子を見取ったのか、それとも見えていないのか。
ねえさんは切れ切れに言葉を紡ぐ。
「アレイ、お願いよ。お願いだから……」
皆まで言わずとも言いたいことは分かっていた。
これまで散々ねえさんがかけてきた保険だ。保険を使うつもりな

どなかったというのに。保険は保険のままでよかったのに。
ずっと知っていたのだろうか。セフィラとの戦闘で命を落とす事を。だとしたらなぜ――
「そんなこと言わないでくれねえさん」
脳が現実を拒否していた。ねえさんの命が消えようとしている、そんな事実を受け入れるには突然すぎた。
そしてどこかに残っていた理性、冷静な自分が警鐘を鳴らす。
まだここには二人のセフィラが控えているのだ。
守らねば。
この二人を。
サブノックの剣を抜いてメタトロンの前に立ちはだかった。
「死ぬぞ！　お前！」
「あの二人だけは逃がすんだ」
「ひひ！　一人死ぬけどな！」
「言うな！」
ハルファスを怒鳴りつけ、サブノックの加護を纏った剣を振り上げた。
飛んできた光球を勘だけで叩き落す。
轟音と共に光球が炸裂し、足元の地面が抉れた。
間髪いれず地を蹴り、メタトロンに切りかかる。ハルファスの加護がこれまでにないくらい自分の中に満たされている。
芽生えた絶望と怒りに反応してハルファスの力が増大していくのが分かる。
「悪魔の子　貴方も滅しなさい」
メタトロンの掌がこちらに向いた。
滅びの力だ。
「ひゃは！」
ハルファスの豪風で強引に吹き飛ばされる。
同時にマントの端が滅びに巻き込まれて消滅するのを見た。
「乱暴だな」

「ひひ！　感謝しろよ！」
「……ああ、助かった」
滅びは免れたが、転がるようにして地面に着地した。立ち上がるとすぐ光球が迫っている。連続で幾つも飛ばされる光球をサブノックの剣で弾いていく。
が、数が多すぎる！
どうする？！
空中に飛び上がるが、危機感は消えない。
とにかく飛び回り、目に見えない光球から逃れた。
「逃げるだけですか」
メタトロンの言葉に返せない。
逃げるのだって精一杯だ。
時にサブノックの剣を盾にしながらフィールド内を空中地上関係なく駆け回った。
怒涛のような攻撃がいったん止んだときには、すでに息が切れていた。
「諦めなさい　慈悲を与えます」
メタトロンの慈悲とは滅びの事だ。
後に何も残さない、次に繋がらない滅びの何が慈悲なのか。消す事に何の意味があるというのか。
そんなものに屈したくはない！
荒い息のまま剣を構えたとき、背後に恐ろしい気配が出現した。
この感覚は知っている。
あの時、銀髪のセフィラがミカエルを召還したときと同じ――世界が闇に包まれた。
刻（とき）の悪魔メフィストフェレスが支配した空間とは全く違う。
光の存在しない世界に取り残されていた。
絶対の闇の中でも金のオーラを放っている目の前のメタトロン、何が起きたかとあたりを見渡すホド、そして……

「待ってタよ　ルーク」
闇の毛並みと炎妖玉（ガーネット）の瞳。狂気の牙を閃かす殺戮者が闇の中に光臨した。
ざわり、と背筋に冷たいものが這う。
グラシャ・ラボラスの隣に佇む少女の瞳は光を失っていた。
「君の心ガ　絶望ニ染マる　コのとキガ　待ち遠シかったヨ」
闇の化身は光を失くした少女の左手に埋まるコインを真っ赤な舌で舐めあげた。
少女はほとんど表情を変えずにその大きな黒い狼の喉に手を当てた。殺戮者はその感触を楽しむがごとく、嬉しそうに目を細める。
少女は無機質な声で言った。
「お前なら出来るんだろ？　ラース」
「ルーク　キミの望ミヲ口に出しテ　そシタら僕ハ　実行するカラ」
大きな犬歯が引っかかるのか、グラシャ・ラボラスの口調はたどたどしく、声の幼さも手伝ってまるで幼い子供のようだった。
それなのに放たれる殺気は子供のものからは程遠い。
全く動けなかった。
足が凍りついたように動かない。
あの少女が背後に守る既に動かなくなった女性の体が目に入った。総毛立つのがわかった。煮えたぎるような怒りと深い絶望が同時に襲ってくる。
まさか。
まさかねえさんが……
たった今まで対峙していた天界の長の姿も忘れた。
動かない女性の隣に佇む表情のない少女の桃色の唇に釘付けになる。
少女はその口から信じられない願いを零した。
「壊して。全部」
「いいヨ」
軽い口調で請け負った殺戮と滅びの悪魔は本気だった。

心を破壊された少女の望みをかなえるために世界の全てを滅ぼすことも厭わないだろう――一番大切だった、ねえさんがいなくなってしまったこの世界を。
「ハルファス　どいてテヨ　メタトロンは僕ガ貰う」
「ひひ！　久しぶりだってのに我侭な奴だな！」
「お前も　消されタイのカ？」
ぎろりと睨んだグラシャ・ラボラスの殺気に心臓が凍りついた。
体が震えるのが止められない。
圧倒的な力の差を感じた。
「仕方ないな！　譲ってやるよ！」
相変わらず楽しそうなハルファスは、グラシャ・ラボラスとそれなりに仲がいいのだろうか。
そういえば、レラージュやハルファスとも交流があるといったことを聞いた気がする。
「それがイイ　僕ニ　逆らうナ」
殺戮と滅びの悪魔は光をなくした少女の左手に吸い込まれるようにして消えた。

最凶の名を冠す悪魔の加護を受けた少女は、ゆっくりとメタトロンに向かって歩を進めた。
あの少女は自分の知る少女ではない。
最も大切なものをなくし、世界に絶望し、我を忘れた破壊者だ。
――止めなくては
理性の欠片がそう告げたが、足は全く動きそうにない。
そんな自分の眼前を、悪魔に支配された少女が通り過ぎていく。
すれ違う瞬間にその悪魔はこちらを向いた。
「お前トモ　いずれ　決着ヲつけテやる　悪魔デモ天使デも人間でもなイ　半端モノ」
一瞬、ほんの一瞬だけ右手首のコインが熱くなったのがわかった。

マルコシアス？
褐色の肌を持つ戦士が胸を焦がしたのだ。
なぜ？
少女の姿をした最凶の悪魔は重力を無視してふわりと宙に浮く。
その背は先刻の戦いのためか大きく焼けており、短衣が焼け落ちて肌があらわになっていた。
のぞく肩甲骨の辺りから腰にかけて、大きな傷が見える。3年前の古傷だろうか、背全体にかかる大きな逆十字傷だった。
滑らかな肌に似つかわしくないあまりに悲惨な傷に、思わず眉をしかめた。
滅びの悪魔は左手をメタトロンの背後に向けた。
よく見ると、闇の空間のはるか向こう、かすむようにしてトロメオの門が浮かんでいる。
そう、あの少女はきっとねえさんの最後の願いを忠実に聞き入れようとしているのだ。
「消　え　ロ」
メタトロンの使った滅びとは全く比にならない大きな力が膨れ上がるのを理屈ではなく肌で感じた。
恐怖で動けなかった。
目を見開いたまま、トロメオの門が灰燼に帰すのを見た。

SECT．10　鎮魂歌（レクイエム）

何と言うことだろう。
トロメオの門を一撃で破壊した少女は愛らしい顔に恐ろしい表情の笑みを浮かべていた。
この間にメタトロンが全く干渉しなかったとは考えにくい。おそらく目に見えない攻防が行われていたはずだが、殺戮と滅びの悪魔と呼ばれた殺戮者は天界の長を前に全く動じていなかった。
同じ滅びの力を持つ天使と悪魔。
対極に位置する彼らはいま、何を思うのか。
「僕ノ領域を荒らすナラ　滅スト言ッタ筈だ　メタとろン」
不機嫌そうな悪魔の声。
「相変わらすですね　グラシャ・ラボラス」
ケテルの体を支配したメタトロンとグリフィス家の末裔の体を支配したグラシャ・ラボラス。
その間には険悪というにはあまりに凄まじすぎる一触即発の空気が張り詰めていた。
何かきっかけをもって、この二人は何もかもを滅ぼす力でもって戦いを始めてしまうだろう。いかなる人間にも入り込めない戦いを。
ぞっとした。
自分の後ろには何万もの両国の兵がいるのだ。
そんな場所で先ほどのような力を使われたら。
いかにここがグラシャ・ラボラスの作り出した特殊空間といえど周囲への影響は未知数だ。
大切な人をなくしたことで心が麻痺し、悪魔に体を明け渡してしまった少女を止めることも重要だったが、理性は大勢の兵を逃がす方が先だという判断を下した。
何より、あの戦いに介入するのは危険すぎる。
共倒れになる可能性が高かった。

「ハルファス！　ここから出られるか？」
「俺は無理！　だがお前できるだろ？　斬れる剣持ってるだろ？」
そうか。
サブノックの剣ならあるいはこの特殊空間も切り裂けるかもしれない。
迷っている暇はない。
やっと足が動いた。
地面に横たわったねえさんの体を慎重に抱き上げる。その傍に寄り添うように転がる５つのコインを一緒に拾い上げた。
すっかり冷えてしまったその体に、生命の息吹が戻る可能性はなかった。
絶望に打ち震えそうになるのをこらえて、左手でサブノックの剣を振り上げた。
この空間を、斬り裂け！
その祈りが通じたのか。
闇の空間はぱくりと裂け、その向こうに見慣れた戦場が姿を現した。
一瞬だけ振り返ってから思いを振り切るように空間から脱出した。
すぐに、戻るから。
お前を失う事だけはしたくないから。
だから、お願いだ。
心を失わないでくれ……！

冷たくなったねえさんを抱えてグリモワールの陣を目指した。
トロメオの門が完全に粉砕した事で戦場は大混乱に陥っていた。
特殊空間はここと切り離された次元にあるらしく、トロメオの門の前にはセフィロト軍とグリモワール軍の兵たちが入り乱れて打ち合っている。
危険だ。

トロメオの門が滅びの力を受けたことから分かるように、あの闇の空間とこの場所は完全に切り離されているわけではない。
おそらくあの空間で力を使えば、こちらに何らかの形で反映される。
早くこの場を離れなくては大変な事になる。
だが、どうすればいい？
この混乱した戦場でどうやってこの多くの兵をここから遠ざければいい？
「全員退けぇぇっっ！！！」
腹の底から叫ぶが、敵を討ち滅ぼすことにだけに集中する兵に届くはずもない。
どうしたらいい？
いったいどうしたら自分の声は届く？
ねえさんだったらこんな時どうするだろう。
きっと絶対的信念に裏打ちされたオーラでもって敵味方関係なく惹き付けてしまうはずだ。
そんなこと、自分にはできない。
途方にくれそうになった時、どこからか響く声があった。
「助けてやるよ　一回きりだがな」
ねえさんの持っていた5つのコインのうち一つが熱を放った。
そのまま空に浮いて、目の前で停止する。
この紋章は……
「……クローセル」
名を呼んだ瞬間、コインは蒼い光を放って砕け散った。
「！」
そして現れたのは、金髪碧眼の美しい悪魔――水を操るクローセルの姿だった。
美しく整った顔は絶望に沈んでいる。
その視線の先にあるのは、零れ落ちたストレートブロンドだった。
「やっぱり俺　何も出来なかったよ　ミーナねえさん」

今にも泣きそうなクローセルは冷たくなった頬に触れ、愛しげに何度も何度も撫でながら美しい涙の粒を一粒だけ零した。
涙の粒は青白くなってしまった頬に落ち、きらきらと宝石のように輝いた後弾けて消えた。
絵画の世界のように完成されたその光景に息を呑んだ。
ここが戦場であることもグリフィスの少女を残してきたことも一瞬忘れて美しい堕天の悪魔に見惚れた。
その視線に気づいたのか、クローセルは碧い瞳をこちらに向ける。
「コインの悪魔は契約者の意思でなく　自分の意思で　一度だけこっちに来られるんだ　それ以上は無理　コインが壊れちまうから」
クローセルはそう言ってへらりと笑った。
「だから　これは　俺の最後の仕事」
大きな三叉戟をぐるりと大きく一振りして、クローセルはにっと笑った。
まるであのくそガキが心配させないために無理に笑ったときのような表情だった。
たとえすでに動かなくなってしまったとしても、ねえさんの前で暗い顔を見せたくないのだろう。
悪魔も自分と同じように悲しみ、涙する事に驚きと親しみを感じた。これはクローセルだけなのか。それとも悪魔全体に言えることなのだろうか。
「ねえさんへの　鎮魂歌（レクイエム）」
三叉戟の柄についた鈴がしゃん、と美しい音色を奏でる。
くるくると回される戟の先から蒼い光が漏れた。
一度トロメオの上空からパフォーマンスとして輝光石（ダイヤモンド）のような水の粒を振りまいたクローセルの姿を思い出した。
リズムをとり、メロディーを奏でるように美しい舞を見せるクローセル。
鈴の音が水の粒のはじける音と重なり、愛らしい音を響かせた。
本来攻撃用であるはずの三叉戟は踊りの一部と化し、背に広がる

少し青みがかった大きな翼もひらりひらりと翻る。
その度に舞い散る羽根が溢れ出る水の粒と弾きあい、太陽の光を反射して綺羅らかに輝いた。
息を呑んでその姿を見つめた。
翼にあわせてしなやかに伸びる手の先から水の粒が舞い落ちる。
それはさながら宝石が舞い踊るようにして戦場に散っていく。
その一粒一粒がクローセルの流した涙のように。
戦いに集中していた兵たちの頭に上った熱を冷ましていった。
金属音と怒号が鳴り響いていた戦場から、ざわめきが起きはじめる。
人々は戦いを忘れて天を仰ぎ、そこに現れた天使とも悪魔ともつかぬ美しい舞い姿に釘付けになっていった。
光を受けた水は輝きを増す。
太陽の加護を受けた堕天の悪魔は、その瞬間すべての光を司る輝王に見えた。
「これで　さよならだ」
最後にクローセルは三叉戟の先から水のシャワーを戦場に浴びせた。
人々からどよめきと歓声が上がる。
「マルコの息子　お前に全部託してやるよ　ねえさんも　あのがきんちょも　世界も」
蒼い瞳で真直ぐに見つめ真剣な声で言った。
ゆらりと揺らめいて、足元から少しずつ消えていく。
喉の奥が張り付いたようにして声が出なかった。
答えなければと思ったのに、全く動けなかった。
「さよなら　ねえさん　大好きだったよ」
消え行く中でクローセルはねえさんの頬に軽く口付けた。
そのまま、光の化身は空に溶けるよう消え去った。
しん、と戦場が静まり返った。

遠くの方ではまだ戦の音が響いていたが、少なくともトロメオ付近にいた軍からは音が消え去っていた。
メフィストフェレスによって時が止められたかのように。
同じねえさんの使役していたクローセルによって沈黙がもたらされたのだ。
はっとした。
クローセルが作ってくれたこの時を無駄にしてはいけない。
「両軍、退け！　滅びが来る！　早くトロメオから離れろ！　メタトロンとグラシャ・ラボラスの巻き添えを喰うぞ！」
自分の声が響き渡った。
もう時間はないだろう。
そう思った瞬間だった。
轟音を立ててトロメオの外壁が崩れ落ちた。

SECT．11　闇カラノ救出

すでにこちら側にも滅びの影響が出始めている。
一刻の猶予もない。
「争っている場合ではない！　早く退け！」
続けてもう一度戦場に向かって叫ぶ。
門に続いて外壁が突如として崩れ去った――それは人々の恐怖心に火をつけていた。
一人、また一人と武器を捨てていく。
「レメゲトンの指示に従え！　すぐにトロメオから離脱する！」
いち早く叫んだ声の主は前線で『覚醒（アウェイク）』のメンバーに混じって戦うフォルス騎士団長だった。
その声を契機にしていっせいに兵が引き始めた。
安堵のため息をついてから戦場にフェルメイの姿を探す。
真紅の鎧から目当ての人物を見つけ出して、退軍に巻き込まれないように慎重にフェルメイの元へと舞い降りた。
「ウォル先輩！」
フェルメイが馬をとめる。
そして、自分の腕の中にいる人物に目を移してはっとした。
「トロメオの門は破壊できたが突入は危険だ。安全なところまでねえさんを頼む」
「ファウスト女伯爵……グリフィス女爵は？」
「あのくそガキは今メタトロンと戦っている。俺もすぐにそちらへ行く」
既に冷たくなってしまったねえさんの体をフェルメイに渡すと、彼は泣きそうな顔で唇をかんだ。それでも強い瞳を真直ぐこちらに向けた。
いつも優しく笑っている面影はなく、その表情は真剣そのものだった。

「お帰りをお待ちしています。先輩もグリフィス女爵も……ご無事をお祈りします」
「ありがとう」
最後に微笑んでから、ハルファスの風を纏って再び上空に向かう。
兵はトロメオから離れ始めていた。
が、滅びの力も相当量が漏れ出している。
音もなく地面が抉り取られ、堀の壁が消え、時に逃げ遅れた兵を巻き込んで消滅していく。
止めなくては。
もういいんだ。
トロメオの門は消滅した。外壁も崩れ、堀は破られ、城塞都市としてはほとんど機能しないだろう。もう十分だ。
「ひひ！　またあそこに行くのか？　死ぬ気か？」
「当たり前だ。このままでは……」
「あいつは俺たちの中で一番だぞ？　メタトロンと同じくらいに戦うのはあいつくらいだ！」
「それでも止めるんだ」
残してきた少女が心配だった。
グラシャ・ラボラスを召還しメタトロン相手に戦う――どれほど無茶な事かはわかっている。前回の相手はミカエルだったが、それでも左腕を失ったのだ。
滅びの力を使う二つの力がぶつかり合う戦いに巻き込まれて無事で済むはずがない。
サブノックの剣を振り上げた。
もう一度、今度はあの少女を止めるために。
「斬り裂け」
祈りを込めて剣を振り下ろす。
剣先が空間を切り裂いた。
その向こうに――滅びの空間が姿を現した。

闇の空間に金の煌きを放つメタトロンが浮かんでいた。
それに相対するように闇を纏った少女が笑っている。いつも彼女を包み込んでいた温かな微笑みがない。破壊を楽しみ、滅びに喜びを求める絶望の塊だった。
空間に満たされた闇と同じ色をしたオーラに包まれてそのまま闇に溶けてしまいそうで不安になった。
と、次の瞬間ハルファスの風で吹き飛ばされる。
何とか体勢を立て直したが、予想しない力を受けて頭がくらくらした。
「危ないぞ！　ひゃはは！」
既にぼろぼろになっていたマントの端がまた消滅していた。
光の矢とは全く性質が違う。自分の感覚では全く感知できない。
ハルファスがいなかったら、と考えて思わずゾクリとした。
「俺に滅びの力は分からん……頼む、力を貸してくれハルファス」
「ひひ！　いいぞ！　無理やり吹き飛ばすけどな！」
「ありがとう」
滅びの力は感知できない。光の矢は避けられる。
それ以外の攻撃はまったく分からないが、グラシャ・ラボラスとの戦いに集中している今こちらにまで力を削ぐとは考えにくい。
とにかく隙を突いてあのくそガキの近くまで寄れればいい。
ねえさんがいなくなり、その絶望で悪魔を暴走させたあいつを止められる可能性があるとすればこの場では同じレメゲトンの自分しかいなかった。
こうなってしまった今、あいつに自分の声が届く保証はない。
それでも信じるしかなかった。
グラシャ・ラボラスに左手を食われて心をなくしかけたあいつを呼び戻せたように。
フラッシュバックに飲まれた時に現実に立ち返らせたように。
ほんの一度だけでも、傍にいたいと願ってくれたのは嘘ではない

と信じたい。
「ひひ！　飛び込むんなら消える事を覚悟しろ！　あいつ強いぞ！」
「分かっている」
「ひひ！　お前仕方ないやつだな！　シンジューしてやるよ！」
シンジューというと心中のことだろうか。
自分が飛び込もうとしているのは、ハルファスとサブノックの加護をもってしても命の保障などない戦闘の真っ只中なのだろう。いつも楽しそうにしているハルファスが心中と言うほどに。
それはそうだろう。
目の前で戦いを繰り広げているのは、天界の長と最凶の悪魔なのだ。
本当なら人間である自分が同じ空間にいることだっておかしいはずだった。
人知を超えた強大なエネルギーが空間に充満している。
震えそうな体に力を入れた。
悪魔と天使の戦いに巻き込まれてしまった少女を救い出さねばならない。絶望に打ちひしがれ、心を失いかけている少女を現実に繋ぎ止めねばならない。
絶対に失いたくない。
「行くぞ、ハルファス！」
そう叫ぶと、サブノックの剣を抜いて真直ぐに少女の下へ向かった。
近づくにつれて双方が放つ攻撃の余波が響いてくる。
時にサブノックの剣で光を、闇を弾きながらグラシャ・ラボラスが憑依した少女の元へ向かう。
ハルファスの風防壁が周囲を覆っていたが、ほとんど効果はなかった。
凄まじいエネルギーを秘めた光と闇は自分の体を簡単に切り裂いていく。
「ひひ！　遠いな！」

本当に、遠い。
すぐそこにいるのに。
地を駆けている時ならば一瞬で届きそうな距離なのに。
ハルファスの乱暴な風を受けながら、視線だけは少女から離さない。
背に大きな逆十字傷を負った少女はマルコシアスが名づけたとおり、空を鋭く舞い、天界の長を翻弄している。
その瞳に光はなく、動きも普段のくそガキからは考えられないほどに俊敏で力強い。
殺戮を目的としてきた者だけが持つ野生の動きだった。
手加減なしで吹き飛ばすハルファスの風に頭が揺さぶられ視界が一瞬かすむ。
しかし、そうでもしなければ滅びの攻撃は避けられないのだろう。
「くそ……！」
血を流しすぎたか。
だんだんと意識が薄らいできた。
それでも。
瞼の裏に少女の笑顔が浮かぶ。
頼むから。
戻ってきてくれ。
「……ラック」
ポツリと呟いた声は周囲の技の破裂音にまぎれて消えていったはずだ。
それなのに、少女の姿をした悪魔はほんの一瞬だけ動きを止めた。
その瞬間だけ少女へと続く道が現れた。
ハルファスはその一瞬を見逃さなかった。
凄まじい風に押し出されて吹き飛ばされる。
正確なその豪風は、自分を少女の前まで運んでいった。
逃すまいと右手を少女に向かって伸ばす。
「ラック……！」

漆黒の瞳がかすかに揺れる。
少女の右手を掴んだ次の瞬間、再びハルファスの風でその場から吹き飛ばされた。
これまでで最も強い風に、脳が揺さぶられる――しかし、自分の背に舞ったマントがほとんど消失したのがわかった。
間一髪だ。
メタトロンがはるか後方まで遠ざかっていた。
「邪魔をスルな　半端モノ」
少女の口から悪魔の声が漏れ、肩口に鋭い痛みを感じる。
殺戮の悪魔の鋭い牙が自分の肩口に食い込んでいた。

SECT．12　懺悔

ばきばき、と鈍い音がした。
鎖骨が砕けたかもしれない。
あまりの痛みに気が遠くなりそうだった。
それでもなんとか少女の手を放してしまうことだけは免れた。が、サブノックの剣は自分の手を離れ落下していった。
「ひひ！　やめろよ！　人間は脆いんだぞ！」
「おマエもダ　ハルファス」
目を血走らせた悪魔は自分の肩口から顔を上げて自分の頭上に浮かぶハルファスを睨みつけた。
口元が真っ赤に染まっている。
もしこの距離で滅びの力を使われたら逃れる術はなかったが、それでも少女の右手を放すつもりはなかった。放してしまったら二度と……戻ってこない気がした。
痛みを通り越して焼けるように熱い左肩が体力を奪っている。
少女の姿をした殺戮の悪魔は、にやりと笑って口元の血を腕で拭った。
残酷なその笑みはあの少女のものではない。
「半端モノ　お前ノ血　嫌いジャない」
舌で唇の血を舐めとり唇の端をあげる様は完全に血を好む殺戮者のものだ。
おぞましい悪魔の姿に背筋が凍った。少女が左手を喰われたときの光景を思い出す。今も胸に突き刺さる悲鳴も――
この悪魔は躊躇いなく傷つける。世界も、人間も、契約者さえも……
放せない。放してしまったらきっとまたこの少女が傷つくことになる。もうぼろぼろなのに。世界の全てだったねえさんを失って、絶望の淵に叩き落されて。

もうこれ以上傷つかなくていい。
帰ってこい。
俺がお前を癒すとは言わないけれど、今度こそずっと傍にいてやるから。
どれだけ泣こうとも、どれだけ絶望に染まろうとも。
絶対に隣を離れやしないから。

すると、突如悪魔の顔が歪んだ。
一瞬だけ苦悶の表情を浮かべた後、ばちん、と大きな破裂音がした。
「?！」
一体何が起きた?！
途端、くそガキの全身から黒い霧が噴出した。
「なんダ　ルーク　起きチャッタのカ」
悪魔の声が少女の口以外の場所から聞こえた。黒い霧は徐々に収束し黒い毛並みの大きな狼に姿を変えていった。
その姿からは確かに闇の威圧を感じたが、先ほどまでメタトロンを相手にしていた悪魔とは別人のように殺気が消え去っていた。
少女の隣に現れた悪魔は、幼い声で鼻を鳴らした。
「あーア　つまんナイ　ぐずグズしてる間ニ　メタとろんも　消えたシネ」
「ひひ！　追い出されてやんの！」
ハルファスが笑う。
そうか。
悪魔の加護を受けるのはあくまで契約者側の意思だ。
このくそガキが意識をはっきりと保ち、拒絶さえすればグラシャ・ラボラスは体を支配する事などできない。
「五月蝿いヨ　ハルファス」
自分の頭上に浮かぶハルファスを威嚇した殺戮者は、最後にため息をつくようにこう言った。

「マ　いいヤ　楽しカッタし　また呼ンデ」
闇の空間が薄れていく。
ほとんど破壊されたトロメオの外壁と門が姿を現した。
直下の地面は抉れて、そこだけ大きな穴を作っている。爆発と違い、滅びで消えた大地は不自然なほどに落ち窪んでいた。
好きなように暴れた殺戮者が消えた瞬間、少女は加護を失って落下した。

間一髪落下する体を右腕だけで支えた。必然的に抱き寄せるような形になる。触れられた左肩がずきりと痛んだ。
それでも目の前にある漆黒の瞳はもう一度光を取り戻していた。
よかった。
この心を失わなくてよかった。
夢から覚めたばかりのようにぼんやりとした表情のくそガキの唇からかすかな声が漏れる。
「……アレイ、さん」
なんでそんな間抜けそうな声を出すんだ。
どれだけ心配したと思っているんだ。
「この馬鹿が……！」
左腕を動かそうとすると凄まじい痛みが襲った。
かろうじて大きな血管を破られることは避けたが、殺戮の悪魔の牙は確実に自分の肩を砕いていた。気の遠くなりそうな痛みに自然と息が荒くなる。
血が止まらない。
左肩だけでなく、グラシャ・ラボラスとメタトロンの戦いに突っ込んだ代償は全身に残っていた。
五体満足なのが不思議なくらいだ。
ハルファスがいなかったら自分は命を落とすどころか存在さえ消滅していたに違いない。

でも何を失ってもよかった。この少女が無事に帰ってくるならば。
じっと見つめた漆黒の瞳からつう、と透明な雫が伝う。
「……ごめんなさい」
精一杯搾り出した言葉は消え入りそうに震えていた。
破壊の限りを尽くした少女は、ぼろぼろと大粒の涙を流しながらただ懺悔していた。
「ごめんなさい……ごめん……なさ、い……」
その懺悔に答える術を自分は持たない。
ねえさんを失くした。その痛みは計り知れない。しかし、世界を破壊していい理由にはならない。滅ぼす動機としてはならない。
その点ではまだこいつは子供だった。
心の痛みを内に秘める方法を知らなかった。思うまま、その感情のままに破壊の化身を召還してしまった。
その結果としてトロメオを破壊し、双方の軍を巻き込み、大地を消した。
この数刻で被った被害は計り知れない。
どういう形になるかは分からないが、きっとこいつはこれからその償いをせねばならない。
そして、何より今度こそきちんとねえさんの死と向かい合わなくてはならなくなるだろう。
「戻る、ぞ」
とにかく戻らねば。
何があったのかを報告せねば。
「ねえさんもすでに……フェルメイが……」
体は既に軍に戻っているはずだった。軍がどこまで退いたのか、最後までトロメオ近くにいたフェルメイたちは無事なのかも確認する必要がある。
そして出来る事ならセフィロト軍がトロメオから離れているこの隙に城塞都市を押さえて……せねばならないことは多い。
大変なのはこれからだ。

ケテルは無事だ。おそらくホドも無事だろう。しかしこちらはねえさんを失ってしまった。
どうやってその穴を埋めるか。
失ったものは大きすぎた。
レメゲトンの長だったねえさんの代わりを務められるものなど存在しない。
一体どうしたらいいんだろう……

そんな風に一度に多くの事を考えすぎたんだろうか。
落下するように、意識が一気に暗いところへ墜ちていった。

SECT．13　誤解

目が覚めると、ふと手に温かい感触を覚えた。
なんだろう？
首を回してみると、艶やかな漆黒の髪がシーツの上に広がっている。
「……くそガキ」
自分の手をしっかりと握ったまま眠りについた少女がそこにはいた。
意識を失う前に見た姿と変わらない。
服が焼けて背の大きな逆十字傷があらわになっているし、髪や頬には乾いた血がこびりついており、重ねられた手は土に汚れている。
ベッドにもたれるようにして座り込んだ足元に皺になった毛布が落ちていた。
いったいどれだけここにいたんだろう。
心配してくれたのだろうか。心のどこかに明かりが灯る。
意外にも体が軽い。
肩の骨が砕けたはずだったが、痛みがない。動かしてみると何の滞りもなく上下に稼動した。
安らかに眠るくそガキを起こさないようにゆっくりと起き上がってみた。シーツを剥ぐと、服を着ておらず包帯があちこちに巻かれていた。
包帯を全てほどいてみたが、少なくとも上半身に急を要するような怪我は見当たらない。ただ、肩口に引きつるような傷跡が残っていた。
もちろん全身に傷跡が残っていたが、痛む傷はなかった。
完全に治っている。
いったいどれだけの時間が経っているのだろう。傷が癒えているということはまさか何ヶ月も眠っていたのではあるまいか。

いや、それでは隣にいた少女が気絶する前と同じ服だった事の説明が付かない。
「何故だ……？」
思わず呟くと、それに反応してくそガキが身じろぎした。
握られた手に力が篭る。
ゆっくりと顔を上げたくそガキは、ぼんやりとした目でこちらを見た。目が腫れている。ずいぶんと泣いたのは一目でわかった。
「……あぁ」
くそガキの口から心から安堵のため息が漏れた。
漆黒の瞳がみるみる潤んでいく。
その雫が頬を伝う前に。
くそガキが胸に飛び込んできた。
突然すぎて抵抗できず、そのまま仰向けでベッドに倒れこんだ。
「よ……かったぁ……」
胸に顔を埋めた少女から嗚咽が漏れる。
その様子を見て胸が締め付けられた。きっとずいぶん心配をかけたんだろう。
世界の全てだったねえさんを失って滅びの悪魔を暴走させたこいつを止めるため、自分は全てをかけて闇の空間に飛び込んだ。
何とか救出できたものの重傷を負っていたはずだ。
ねえさんを失ったこいつの傍から自分までいなくなってしまったら。
こいつの世界は今度こそ崩壊してしまうに違いない。
きっとねえさんを思って死ぬほど泣いたんだろう。もう会えないのだという現実を受け入れるまで何度も何度も絶望に飲み込まれそうになったはずだ。
その上まだ泣くのか。
魔界の王リュシフェル、貴方はこの少女にどれだけ試練を与えれば気が済むのか。どれほど傷をつければ満足するのか。
しかし――こいつもまた、無事でよかった。ゲブラとの戦いを越

え、滅びの悪魔に乗っ取られた体を取り返した。
震える肩を抱いて、背を撫でた。
が、その手に素肌の感触を受けて我に返る。
考えてみれば自分も一糸纏わぬ姿なのだ。
何だかこのままではいろいろまずい気がする。
もしこんなところ誰かに見られたら……！
ガキの肩を抱いたまま手をついて起き上がると、必然的にくそガキが自分の腰の上に座り込んだ状態になる。
額をつき合わせるようにベッドの上で、不思議そうにきょとんと見上げてきた漆黒の瞳は真っ赤になっていた。
その両肩に手を置いて、遠ざける。
「頼む。離れてくれ」
よく見るとくそガキの短衣はぼろぼろで、肩と胸の辺りにかろうじて布が残っている程度でほとんど焼けるか裂けるか、なくなっていた。胸から腹にかけて巻いてあるサラシも見え隠れしている。
眼のやり場に困って目を逸らすと、ガキは首を傾げた。
そうだ。こいつは人前で着替え出すほどに無頓着な奴だった。アガレスとの契約の時を思い出して思わずため息をついた。
「何で？」
くそガキの顔が泣きそうに歪む。
ああ、もう泣くな！
潤んだ瞳が近づいて、アップになる。
心臓が跳ね上がった。
「もしかしてまだどこか痛い？　ブエルさんが全部治したと思うんだけど……」
「いや、平気だ。体は全く問題ない」
そうか、癒しの悪魔ブエルを召還したのか。
ではなく。
この状況をいったいどうしたらいいんだ！
世界中で一番大切な少女が、肌もあらわに自分の上に乗っている。

それも大きな瞳を潤ませて額が触れそうなほど近い距離で。
本当に襲ってやろうか？
泣きそうな少女を前に困り果て顔を引きつらせて硬直していると……どうして嫌な予感ばかりが当たってしまうんだろうか。
コンコン、とノックの音がして部屋のドアが開いた。

「失礼します。ミス・グリフィス？　ウォル先輩の具合は……」
部屋に入ろうとしたフェルメイは、ベッドの上を見て硬直した。
ほとんど裸の男の上にこれまた露出度の高い服を着た、というか布を纏った少女が乗っているのだ。
フェルメイはひくりと笑顔を引きつらせると、それでも礼儀を忘れずに軽く頭を下げて退出した。
「待っ……フェルメ……イ……」
既視感（デジャ・ヴ）。
再び大きくため息をついて頭を抱えた。
これはいったい誰にどういう弁解をしたらいいんだろう？
「アレイさん？」
首をかしげたくそガキを見て力が抜ける。
これだけ何も気にしなくていいというのは全く羨ましい限りだ。
「俺はもう元気だ……着替えるから出て行け。それからお前も着替えて来い！」
部屋から出るドアを指してそう叫ぶと、くそガキはひょい、と飛び上がってベッドから降りた。
その瞬間に背中の逆十字傷が視界に入ってどきりとした。
「じゃあすぐ戻るよ！　待ってて！　どこにも行っちゃダメだよ？」
何度も念を押して部屋を出て行ったのを確認してからシーツを纏って床に足を下ろした。
部屋を見渡して、どこか見覚えがあることに気づく。
そうだ、ここはトロメオのシェフィールド公爵家だ。
と、いうことはグリモワール軍がトロメオ奪還に成功したという

事だ――レメゲトンの長という大きな犠牲を払って。
記憶を頼りにクローゼットを引っ掻き回し、なんとか着られそうな服を見繕った。
どうやらここはシェフィールド公爵の息子の部屋だったらしい。少しばかりサイズが小さいが、男性用の服を見つけて身にまとった。
細身のパンツにラフな灰色のシャツ。革靴も見つけた。十分だ。
服を着ようと大きな立ち鏡の前に立つと、自分の姿が嫌でも目に入った。
「……」
腰まであったはずの髪が肩の辺りでばっさりと切れていた。
おそらくあの闇の空間でくそガキの右手を取った直後、『滅び』によりマントと共に消失したのだろう。自分の体が残っていただけでも奇跡だ。まるで願をかけて伸ばしていた髪が自分の身代わりに滅びの力を受けてくれたかのようだった。
後でアリギエリ女爵にでも切りそろえてもらう事にしよう。

自分が起きたのはどうやらトロメオ奪還の次の日らしかった。太陽はまだ頂点付近にある。それほど時間は経っていないのだろう。
アリギエリ女爵からねえさんの葬送が行われる旨を聞いた。
シェフィールド屋敷の中庭を解放し、棺を王都へ送るという。
集まった人々は悲しみにくれていた。グリモワール軍内で凄まじい人気を誇っていたねえさんだ。涙する者は数え切れず、トロメオは沈鬱な空気に包まれていた。
棺の中眠るねえさんはいつもと変わらないように見えた。アリギエリ女爵の心遣いか体についていた血は綺麗に洗い流され、レメゲトンの正装を纏っている。今にも起き上がって動き出しそうだ。
最前列に並んだ自分たちレメゲトンが順に別れの辞を述べる。
形式にのっとった辞詞（ことば）だが、くそガキの声が震えている。
ちらりと横を見ると、ひどく青ざめて今にも崩れ落ちそうな顔を

していた。
我慢していたんだろう、辞詞(ことば)が終わった直後に口元を押さえて葬送の儀から抜け出していった。
レメゲトンがそんな事をすれば当然周囲にも動揺が伝わる。
追いかけよう、と思った瞬間　輝光石(ダイヤモンド)騎士団長ヴァルディス卿の鋭い視線を浴びて思いとどまった。自分まで抜けてしまうわけには……
「ウォル先輩、行ってください。この場は何とかしますから、ミス・グリフィスを」
背後からフェルメイの声がした。
「彼女には先輩が必要でしょう？……実は、ずいぶん前からそうじゃないかと思ってました」
「いや、あれは……」
否定しようと思ったが、フェルメイはにっこり笑った。
「すごく、お似合いだと思います。だから早く行ってあげてください。ミス・グリフィスもきっと待っているはずです」
「……すまない」
もう誤解云々は後回しだ。
あのくそガキの後を追って葬送の儀から離脱した。

SECT・14　離脱

後を追って屋敷の裏手の庭園に駆け込んだ。
少し時間が経っているが、追いつけるか？
と、ハーブ園の中央付近に黒髪を見つけて駆け寄る。
「……ラック」
声をかけると漆黒の瞳がこちらを貫いた。
助けて、とその目が叫んでいる。
苦しい、寂しいと全身で助けを求めている。
全身全霊の救難信号をすべて救い上げるように手を差し出すと、少女はすがりつくようにその手をとった。爪が皮膚に食い込むほど強く腕を掴み、このまま壊れてしまうんじゃないかと思うほどがたがたと震えた。
苦しさが伝わってきてなんとも言えない感情が渦を巻く。
吐くほど辛い思いを味わってまでこいつが戦場にいなくてはいけない理由は何なんだろう？
「もう、いい」
お前は強い。未来を見据えて前に進む力を持っている。
でも、それは傷つかないことと同義じゃないんだ。
「もういいんだ……」
今ならミュレク殿下の感情が分かる。
殿下はこの優しい心を戦に晒すことを拒み、こいつが望まずとも戦地から遠ざけようとした。きっとこうなってしまう事を恐れて。
嗚咽はだんだんと大きくなり、ついに少女は大声を上げて泣き出した。
庭園全体の大気を震わすような慟哭が響き渡った。
すべての苦しみとすべての絶望を込めたその叫びは、空も大地も何もかもを悲哀に染めていく。もちろんそれは自分も例外ではない。
悲痛な棘を持った悲鳴は自分の心を切り裂いていった。

どうすることも出来ない己の無力さを噛み締める。
自分だけではではグリモワール国どころか、この少女一人救えやしない。
ねえさん、やっぱり俺では駄目なんだ。あなたがいないと――
泣きじゃくる少女を胸に抱いて、自分も一滴だけ涙を流した。逝ってしまった強い瞳の女性を思い、もう二度と聞く事のないメゾソプラノを思い出しながら。

王都から、新たにレメゲトンに就任したライディーン＝シンと漆黒星騎士団の半分を派遣する、という連絡が届いた。
ゼデキヤ王の耳にもねえさんが殉職した事が入っているはずだ。
あの心優しき王はきっと胸を痛めていることだろう。人知れず涙したかもしれない。
レメゲトンと騎士団長の会議場で、書簡を手にしたフェルメイが王からの詳しい指示内容を告げる。
「騎士団長のクラウド＝フォーチュン卿は王都に残留し新設王族警護隊の隊長を兼任されます。従って騎士団の代表権は鷹部隊長ライガ＝アンタレス氏、その元に鷹部隊と鷲部隊、それと鷺部隊の一部を派遣されるそうです。総勢２０１名、到着予定は……」
義兄上は王族の警護のため王都に残留するらしい。
鷹部隊長のライガ＝アンタレスは自分より一年遅れて騎士団試験に合格した出生不明の騎士だ。型破りな剣を使うマルチファイターだと聞くが、実際手合わせした事はなかった。
何より、このくそガキにとって慣れた漆黒星騎士団の人達と共に戦うことでほんの少しでも安心感を得られるだろう。
相変わらず暗い顔で俯いている隣のガキをちらりと見る。
膝に乗せた拳が震えている。
本当なら今すぐにでも逃がしてやりたい。
こんな悲惨な場所から――

「……グリフィス女爵に王都への帰還命令が出ています。漆黒星騎士団　鷺部隊2名、鷹部隊1名と共に騎士団到着次第帰還せよ、との事です」
書簡を読み上げるフェルメイの言葉に耳を疑った。
「王都帰還……？」
ガキがぽかりと口を開けてフェルメイを見た。
信じられない、といった顔だ。
「後日到着されるレメゲトンのライディーン＝シン氏と交代で、王族警護部隊への配属命令が出ています。到着はおそらく2日後になるでしょうから、すぐに出立準備をして王都へ向かってください」
それを聞いて、心の中でゼデキヤ王に深く感謝する。
ねえさんの殉職――それがこのくそガキにとってどれほどの痛手かゼデキヤ王には分かっているのだ。これからの戦闘に支障をきたすだろう事も見越しての判断だろう。
自分の力ではぼろぼろになったくそガキを戦地から遠ざける事などできはしないから。
ありがとうございます。
ねえさんの分もこいつの分も、自分が埋めて見せるから。

会議が終わってなお呆然としているくそガキの頭にぽん、と手を置くとひどく複雑そうな顔で見上げてきた。
「おれ……ここを離れるの？　だって、セフィラはいっぱい残ってるよ……？」
「大丈夫だ。お前の代わりに新しいレメゲトンが来るのだろう？俺は会った事などないが、ゼデキヤ王が任命されるくらいだ、きっと強いんだろう」
「うん、強いよ。ライディーンは強い」
何の迷いもなく肯定したくそガキを見て、その信頼を得た新しいレメゲトンに大人気なく軽い嫉妬の心を抱く。
騎士団に入ったばかりの15の少年が破壊の悪魔レラージュと契

約したのだ。いったい、どんな人間なんだろう？
見下ろした漆黒の瞳は以前と変わらず美しく澄み切っていた。
「でも……でも、おれがいなくなってもアレイさんはまた危険な目に遭うんでしょ……？」
そのまなざしに釘付けになる。
舞い上がるような感覚と苦しくなる気持ちが同居して言葉に詰まった。
「ねえちゃん、みたいに……」
震える声で必死に紡いだその言葉は、自身を傷つける刃だ。
この上まだ自らを傷つけようというのか。
切ないほど、狂おしいほどにこみ上げる感情が爆発しそうになる。
が、それを押さえてゆっくりと漆黒の髪を撫でた。
「大丈夫、俺は強い。お前の前からいなくなったりはしない。絶対に、だ」
死なない。こいつがいる限り。この少女を絶対に悲しませたくないから。
強く決意して微笑むと、漆黒の瞳が泣きそうに歪んだ。
悲しませたくないのに、どうして自分はいつもこの少女の泣き顔ばかり見ているんだろう。笑顔が見たいのにどうして笑わせてやる事が出来ないんだろう。
自分の無力さを噛みしめながらも少女を戦地から見送る決意をした。

2日後、騎士団の到着と入れ替えにくそガキは王都へと旅立った。
セフィロトに侵入させた密偵からそろそろトロメオの陥落準備が整いつつあるという情報が入っている。こちらも早急に戦闘準備を整えねばならない。
ずっと稽古を共にしていたという女性騎士二人と鷹(たか)部隊の騎士を一人、計3名の護衛を連れたくそガキは、荷物も少なく王都に向か

うことになる。
女性騎士のうちオレンジの髪のほうが、くそガキの話に再三出てきたヴィッキーという女性らしい。ヴィクトリア＝クラーク、年はくそガキと同じくらいですらりと背が高く正義感の強いしっかりした人柄が伝わってきた。
もう一人は白髪に赤目という容姿の、一見少年騎士にも見える女性だった。シンシア＝ハウンド、全く感情の映し出されない紅の瞳に一瞬どきりとした。表情もなく言葉少ない。その姿はどこか幻想兵に近いものを感じさせて背筋がぞわりとした。
鷹部隊の騎士は部隊のリーダーを務めるという精悍な印象の壮年騎士だった。おそらく護衛はこの騎士一人で、残りの二人はくそガキと仲が良かったために王が気を回して付き添いにしてくれたんだろう。壮年騎士は青いバンダナのライガ＝アンタレス部隊長といくらか打ち合わせをしている。
これから戦場を離れるくそガキはいくらか安心した顔をしていた。やはり、戦の空気はあいつの傷ついた心には厳しいものだったんだろう。
戦場を離れる事で少しでも心の傷を癒してくれたら。
「それでは私たちは王都に向かいます」
「団長によろしくお願いしますよ、キャストさん」
軽く手を上げたライガ部隊長はどこかフォルス団長と同じ空気を感じる。騎士の様相に似合わぬ真っ青なバンダナで表情は分かりにくいが、飄々とした人物だということだけは十分にわかった。
くそガキは馬上から自分に向かって手を伸ばす。
求められるまま寄ると、くそガキは両腕を首に回した。ふわりと優しく包まれて、耳元で小さな声がした。
「死なないで。絶対。死なないで……」
別れ際にどこか聞き覚えのある言葉を残して、グリフィス家の末裔は戦場を離れた。

SECT．15　無力

新しいレメゲトンだという少年は、珍しい紅髪を持つ長身の剣士だった。
身長は自分とそう変わらないだろう、舞台俳優のような端正な顔立ちと落ち着いた雰囲気はとても15歳とは思えなかった。シンプルな黒基調のレメゲトンの正装に身を包んでいる。
強い意思を秘めた藍の瞳を持つ少年だった。
くそガキを見送った後、シェフィールド公爵家の会議室で初めて顔を合わせた。
向けられた視線が一瞬、敵意を持ったように感じたのは気のせいか？
「初めまして、アレイスター＝クロウリー伯爵。ライディーン＝シンと申します。レメゲトンになる前は漆黒星騎士団（ブラックルビー）　鴉部隊（からす）の構成員でした」
「よろしく」
右手を差し出すと、ライディーンと名乗る少年は軽く握手した。
その間もずっと藍色の瞳に射抜かれている。
気のせいではない。
初対面だというのになぜこの少年は自分に対して敵意を剥き出しにしているんだろう？
困惑して眉を寄せると、それが不機嫌そうな顔に見えたのかライディーンのほうもあからさまに不機嫌そうな顔をした。
が、それは一瞬で、紅髪のレメゲトンはすぐにくすくすと笑った。
そうするとようやく15歳という年齢通りに幼い表情がのぞく。
「無愛想だという噂は本当のようですね。クラウド団長に聞いたとおりです」
初対面だというのに失礼な奴だ。
しかしながら噂の出所が義兄上では、文句の言いようがない。

何より、あのくそガキを相手にするようになってからずいぶんと自分は寛容になった。特に年下の相手に対しては。
握手し終わった右手を引っ込めて、ぼそりと言う。
「敬語は使わなくていい。それに伯爵と呼ぶのもやめろ。同じレメゲトンだ」
レメゲトンの間に身分の上下はないし、ライディーンもこの先セフィラとの戦闘に参加することになる。共にグリモワール国を守る事になる仲間だ。
あのくそガキも敬語など全く使わないなのだから、この新入りのレメゲトンが自分に敬語を使う理由はなかった。
すると紅髪の少年騎士はどこか悲しげに微笑んだ。
「ラックと同じ事を言うんですね」
少年の言葉に思わず頬が引きつる。
くそ、またあのくそガキと同じ台詞を吐いてしまったようだ。
彼は、じゃあ敬語は使いませんよと念を押した後、なぜかぐっと唇をひき結んだ。そして、藍色の瞳に強い意思の光を灯してはっきりと宣言した。
「あなたには負けない」
「は？」
脈絡のない言葉にもう一度眉を寄せる。
聞き返そうと思ったが、そこへフェルメイが割り込んだ。
「失礼します。これから『覚醒（アウェイク）』で打ち合わせを兼ねてシン男爵のご紹介をしたいと思います。隣の部屋へ移動していただけますか？」
負けない、と言ったライディーンの意図は分からない。
敵意はあったが深刻なものではなく、どうやら宣言どおりライバルとしての相手に向けられる類のものだった。何より彼自身が人に危害を加えるような事をする人物でない事は瞳に灯る意思の光を見ればすぐに分かった。
だとしたら、いったいどういう意味で自分に宣言をしたのだろう？
今日が初対面で何をした記憶もないのに。

共通点といえば騎士からレメゲトンになったこと、それと7人の中では年が近い男性だということくらいか？
他に全く思い浮かばなかった。
よく考えてみれば、彼の持つ敵意に近い視線はミュレク殿下が自分に向けるものと非常に良く似ていたことにすぐ気づけたはずなのに。

もともと使用人たちの食堂として使われていたであろう隣の部屋は広く、10メートルほどもあるテーブルが幾つも並んでいた。すでに『覚醒（アウェイク）』のメンバーが集合して席についている。後ろの方には新たなメンバー候補であるライガ部隊長をはじめとした漆黒星騎士（ブラックルビー）団の面々が数名並んでいた。
フォルス団長が前に立っており、席の最前列にはルーパスが陣取っている。
自分が入ってきたのに気づくとぱっと顔を輝かせて寄って来た。
「ウォル先輩！」
その右腕にはきつく包帯が巻かれ、白い布で吊ってあった。
「怪我をしたのか？」
「大丈夫っすよ、たいした事ありません！」
猟犬のような目でにかっと笑ったルーパスを見て少し胸が痛む。
自分の傷はアリギエリ女爵のコインの悪魔ブエルに治してもらった、いわば反則技だ。他にももっと重症で苦しむ兵たちもいるというのに――
癒しの悪魔を使いすぎることは出来ない。対価が大きいからだ。血を好む癒しの悪魔ブエルは、一人の怪我を治す対価に生贄となる人間一人の血を限界近くまで吸い取るという。
アリギエリ女爵がブエルを使わず、医療で兵たちを治すのにはそういった事情があるのだ。
「ルーパス、席に着きなさい。ミーティングを始めますよ」

「はあい」
フェルメイに言われてルーパスはようやくしぶしぶ席に戻った。
前に立っていたフォルス団長も最前列の席に着く。椅子が小さく見えるのはフォルス団長の並外れて大きな体が原因だろう。
よく見渡してみると、あちこちに怪我を負っている隊員が見え隠れしている。
代えの効かない『覚醒（アウェイク）』隊員たちの疲労と負傷具合は軍の中でも特にひどかった。戦死した者や、自分のように重症で戦闘不能になった者、悪魔の武器に耐え切れず精神に支障をきたす者などが続出している。
武器を与えた者は５０名近くいるのだが、現在『覚醒（アウェイク）』として活動できているのはほんの３０名ほどだった。
漆黒星騎士団（ブラックルビー）が合流した事で少しは楽になるだろうか。
いつまたホドが幻想兵を使ってくるかも分からない。何しろ戦闘できるレメゲトンが新入りを混ぜて２人しかいないグリモワールと違ってセフィロトにはまだ多くのセフィラが残っているのだ。レメゲトン２人だけで相手が出来ないセフィラを部隊のトップメンバー数名で対応する作戦も視野に入れていた。
逝ってしまったねえさんと、戦線離脱したあのくそガキ。
ライディーンという少年騎士の実力は分からないが、二人分の穴を埋めることは不可能だろう。
紅髪の少年騎士が挨拶を終えた。
それを見計らってここでも司会役のフェルメイに声をかける。
「少しだけいいか？」
そして、全員の前に立った。
もう何ヶ月も生死を共にしてきた『覚醒（アウェイク）』メンバーの視線がいっせいに向けられる。
その視線をすべて受け止めて、しっかりと見つめ返した。
「皆知っていることだが、先日の戦闘でレメゲトンの長だったファウスト女伯爵が殉職された。非常に遺憾なことであると同時に、我

が軍にとって大きな戦力の喪失である事はここにいる『覚醒(アウェイク)』の者なら承知の事だと思う」
　ねえさんはこの部隊において絶対的な信頼と尊敬を集めていた。隊員たちの心のよりどころだった事実は否めず、もちろん士気の要ともいえる隊員の心に深いダメージを与えたのは傍から見ていても伝わってきた。
　しかし、現状を伝え悪魔に近い力を持つ彼らに助力を仰ぐ必要があった。
「グリフィス女爵も王命で王都に帰還した。代わりに先ほど紹介されたライディーン＝シン男爵は第１４番目、破壊の悪魔レラージュを使役する。アリギエリ女爵は戦闘用のコインを持たないため、現在戦闘に参加できるのは俺とシン男爵のみになる」
　あのくそガキの帰還理由は王命ということになっているが、『覚醒(アウェイク)』のメンバーならあいつがねえさんを失った事によりとても戦闘できる状態でなくなったせいだということが分かるはずだ。
　あいつがグラシャ・ラボラスを暴走させた事と自分が重症を負った理由は伏せてあった。
　あのくそガキが殺戮と滅びの悪魔を召還して、ねえさんを手にかけたケテルを退けたことになっている。自分の怪我もすべてケテルとホドにやられたことになっていた。
「セフィロト国のセフィラは全部で１０人、これまでの戦闘で故フアウスト女伯爵がコクマとビナーの２人、グリフィス女爵がゲブラを撃破した。残りは総指揮官マルクト、セフィラの長ケテル、死霊遣いホドの３人。それに加えてまだ４人のセフィラが控えている」
　これまでの戦闘から、ケテルは自分がすべての力を使っても止められるかわからない。
　ホドの操る幻想もかなりの難敵だ。そちらをライディーンに任せるとしても、他のセフィラが出てきた時点でグリモワール軍は壊滅状態に陥るだろう。
「『覚醒(アウェイク)』を結成した時にも言った。俺たちレメゲトンだけでは…

…足りないんだ」

SECT．16　ライガ＝アンタレス

こんな事を言ったと知れたら、反レメゲトン感情を持つ貴族たちに何を言われるかわからない。いつも揺ぎ無い姿しか見せようとしなかったねえさんにも叱られるかもしれない。

それでも、自分の力ではどうしようもない事がある。

「力を貸してほしい。人知を超えた力を持つセフィラとの戦闘に巻き込んでしまうかもしれない。悪魔の力を持たぬ生身の人間に頼める事ではないのは分かっている……だが、他のものたちには任せられないことなのだ」

自分の無力さは分かっている。あのくそガキ一人救ってやることすらできない。

しかしそれを嘆いているだけでは前に進めない。

力がないのなら借りればいい。自分が持てる全てを出しても出来ない事は手伝ってもらえばいい。自分ひとりで何もかも出来るなんていう幻想はとうの昔に捨てていた。

最前列に座っていたフォルス団長が豪快な笑い声を上げた。

「ははは！　そんな事分かっている。今さら何を言う！」

「そうですよ、先輩。そんな他人行儀な」

フェルメイも続けて笑った。

「でも、そんな先輩が好きっす！」

どさくさに紛れてルーパスが抱きつこうと飛んできたのを蹴り飛ばした。

それを見て隣にいたライディーンがぎょっとした顔をする。

この少年騎士もすぐにこの部隊の面々と打ち解けられるだろう。

大丈夫、お前がいなくても俺たちは負けない。誰一人死なせやしない。

だから王都に戻ってゆっくり心を癒して来い、ラック――

ミーティングを終え、漆黒星騎士団（ブラックルビー）のトップメンバーと面会した。
部隊長のライガ＝アンタレスは真っ青なバンダナを目の辺りまで下げており、顔はよく分からなかったが口元で笑っている事が伝わってきた。漆黒の甲冑に身を包んでいたが、その様相とバンダナがどうにも似つかわしくない。
「どうも、初めまして。漆黒星騎士団（ブラックルビー）　鷹（たか）部隊長ライガ＝アンタレスです」
「レメゲトンのアレイスター＝クロウリーです」
握手を交わすと、ライガ部隊長は全身を嘗め回すようにじろじろと見回した。
思わず眉を寄せると、彼はにやりと笑った。
「……ラックが懐くわけだ」
レメゲトンのガキの事をラックと呼ぶのは、それなりに親しい人間だけだ。
そうか、この人は漆黒星騎士団（ブラックルビー）であのくそガキの面倒を見ていたんだろう。ガキの話にヴィッキーやメリル、ルークなどの名前と並んでライガさん、というのが幾度も登場したのを思い出した。
「くそガキが迷惑をかけませんでしたか？」
「いんや、まじめに稽古してしてましたよ。誰よりも熱心に」
「それならよかった」
ほっと息をつくと、青いバンダナの部隊長はおかしそうに笑った。
「……失礼。いや、あいつは本当に幸せ者だ。想い人からこれだけ想われているんだから」
その言葉に絶句した。
……いったい何がどこまで知れ渡っているんだろう。あのくそガキは王都にいる間、何を話していたんだろう？
微妙な表情を浮かべると、ライガ部隊長ははっきりと言った。
「自分に出来ないことを『出来ない』とはっきり言うのは並大抵の事じゃない。下手なプライドが邪魔をして認める事が難しいからだ。

それでもあなたははっきりと言った。助けてくれ、と口に出した。そうそう出来る事じゃない」
いつしか普段話すような口調になっていた部隊長に、不思議と違和感を覚えなかった。それどころかきっぱりと断言するその言い回しは、強い信念に裏打ちされていて心地よい。
「出来る限りの努力をし、本当に相手を信じる真直ぐな心を持っていないと無理だ。それは生半可な覚悟じゃ出来ない。本当に、素晴らしいと思う」
しかしながら初対面の人間に面と向かって褒められ、動揺していた。
そのせいか思わずぽろりと内面を吐露してしまった。
「俺に何も出来ないのは事実だ。事実、ねえさんもあのくそガキも助けられなかった」
くそガキは精神に深い傷を負い、王都へ帰還することになってしまった……隣にいれば守れると思ったのは幻想だった。
すると部隊長は額に手を当てて天を仰いだ。
「あーやばいわ、俺まで惚れそう」
「……」
今の何がそういう風に繋がるんだ。手品師といいルーパスといい……何故自分の周りにはこんな人間が多いのだろう。
困り果てていると部隊長の後ろに控えていた金髪の青年が冷たい声で言い放つ。
「隊長、やめてください。クロウリー伯爵が困ってらっしゃいます」
「何だよ、俺は思ったとおりに言っただけだ」
「それをやめてください、といつも言っているんです。しかもレメゲトンの方相手にいつもの口調になってます」
「気にすんな！」
「だからっ……」
ひくりと頬が引きつった金髪の青年に少し同情する。フェルメイとフォルス団長のやり取りを思い出してかすかに綻んだ。

すると部隊長も金髪の青年もぴたりと動きを止めてこちらを凝視した。
一体なんだ？
二人は驚いた顔を見合わせた。
「……微笑ったよ」
笑ってはいけないのか？確かに無愛想といわれているが、笑う事くらいあるぞ？いや、確かによく笑うようになったと言われるのは最近だが。
「な、ちょっと惚れたろ」
部隊長の言葉に金髪の青年は口を噤んだ。
頼むから否定してくれ！
フェルメイが間に入って打ち合わせがまともに進行するまで、この二人の漫才をただ眺めていたのだった。
ライガ隊長をはじめとして、先ほどの金髪の青年ファイアライト＝リドフォールなど全部で１０名のメンバー候補と対談し、最終的にはサブノックと面会させる５人を選出することができた。

業務を終えて部屋に戻る頃にはすでに真夜中を回っていた。
さすがに疲れた。
ねえさんがこれまでこなしていた仕事の多さを改めて思い知る。その上ねえさんは時間を見て兵団一つ一つに顔を出していた。疲弊した兵たちに声をかけ、時に救護班の手伝いをしながら兵と個人的に話す。とても今の自分には出来ない芸当だ。
せめてあのくそガキがいたら――
弱音が漏れそうになって慌てて頭を振る。
ベッドの端に座って頭をうなだれた。
この上さらにセフィラと、それも天界の長ケテルと戦闘するなど考えられない事だった。
右手首に括りつけたコインを左手で覆い、心を落ち着ける。
マルコシアス、サブノック、ハルファス。

「まだ、大丈夫だ」
あいつに誓ったから。
お前の代わりに俺が頑張るからと。もう誰も死なせないと。
セフィロトはいつまた攻めてくるだろうか。外壁は崩れ、その瓦礫で堀が埋まってしまったトロメオは砦としての機能をほとんど失っている。
ああ、そうだ。明日には本格的な戦闘の前にライディーンと悪魔を交えて手合わせしてみる必要がある。お披露目や挨拶もあるが、何とか時間を取れないだろうか。
あとは敵意があからさまになってきたヴァルディス卿との折り合いもつけなくてはいけない。他にも上位に位置する騎士の中でレメゲトンに不信を抱くものも増えている。その動揺が下につく兵士にまで伝わる前になんとかせねばならない。
もうそろそろセフィロトからの攻撃が始まってもおかしくはない。
それからあと今こなすべき事は何だ……？
そんな風に考えている間にいつしか眠りについていた。

SECT．17　ライディーン＝シン

次の日も慌しい職務が待っていた。
朝からシェフィールド屋敷内の会議室に篭り、また時にトロメオ城下を駆け回った。
やっと一息つけたのは夕刻頃になってからだった。今日一日行動を共にしていたライディーンもソファでぐったりとしていた。
「先輩、疲れたよ……」
「戦闘以外にも業務は多い。特に今、長のねえさんがいなくなり、アリギエリ女爵が医療班の方で手一杯だから必然的に俺たち二人に責がかかる」
こうしているのを見ると15の少年だというのを思い出す。そうか、ねえさんの弟のヨハンと同い年だ。
まるで年の離れた弟でも出来た気分だった。
しかし、昼間の働きは素晴らしかった。くそガキと違って言葉遣いも礼儀もしっかりしており、また期をみて自分の意見を述べる機転も持ち合わせている。これからの成長によっては長を務めるようになるかもしれない。
そんな紅髪の少年はソファにうずまったままぽつりと聞いた。
「ねえ先輩。『ウォル』って何？」
「『ウォルジェンガ』の愛称だ。俺の名はアレイスター＝ウォルジェンガ＝クロウリーだから、炎妖玉（ガーネット）騎士団の者たちはみなそう呼ぶな」
「ウォルジェンガ……？！」
ライディーンは驚いたように目を見開いた。
「どうした？」
「ウォルジェンガって、だって、水龍の真実の名じゃないか！」
今度はこちらが驚いた。
王都の裏街の風景が浮かぶ。キイじぃが嬉しそうに話してくれた

故郷の国の伝説――光、闇、水、炎を司る『龍』という妖魔をめぐる壮大な物語。
「どうして？　それは俺の母さんの故郷の言葉なのに！」
ああ、そういうことか。この少年は珍しい髪色をした異国出身の母を持つと言っていた。きっとその母親がキイじぃと同じ故郷の生まれなのだろう。
思わぬ繋がりに驚いた。
「俺に名前をつけてくれた人が遠い国の出身だと言っていた。その人はおそらくお前の母と同じ故郷から来たのだろう」
「名前をつけてくれた人？　父親じゃなく？」
その問いには一瞬躊躇った。
しかし、折角だから話しておこうと思った。
「俺はもともと貴族じゃない。王都の下町で生まれた平民の庶子だ。父親はクロウリー公爵だが母は平民だ」
それを聞いて、少年の藍色の瞳が大きく見開かれる。驚きや戸惑いが入り混じった表情だった。
自分が庶子である事は表面的には隠してある事実だが、貴族のほとんどが知ることだ。この世界に入った以上いつかは知られることだった。
「王都の裏街で5つまで育った。そこにはお前の母と同じ出身を持つ老人がいて、俺に名をつけ、理性を司る戦神『水龍ウィオラ』の隠された忌み名なのだと教えてくれた。話好きで龍という妖魔にまつわる物語も多く聞いたな」
なぜかライディーン相手に少しばかり饒舌になっている自分を感じていた。
が、当時の話は誰にでも出来るものではない。特に、反レメゲトン感情を持つ者たちやクロウリーの名を神格化している兵、レメゲトンに精神的に依存している騎士たちにはとても言えるものではなかった。
ねえさんはいくらか知っているが、くそガキにすら話したことは

ない。
あまりに懐かしく話し始めると止まらなくなってしまった。
ずっと聞いていたライディーンも、キイじぃの故郷の伝説の話になるとソファから身を乗り出してきた。
「懐かしいな、母さんがよく話してくれた。母さんの住む場所では、感情を司り芸術の神と呼ばれた『炎龍フィルラ』が崇められてたって。その部落ではだいたいみんな赤茶みたいな色の髪なんだけど俺みたいに特に髪が赤い人間は神殿で神官や巫女として働けたんだって」
「ではお前の母親も巫女だったのか？」
「うーん、母さんはあんまり自分の話してくれなかったな。いつもフィルラの加護を受けた人間の話ばっかりしてた」
先ほどまでの疲れを忘れたかのように目をキラキラさせて話す様子を見るとほっとする。
本当に、弟のようだ――義兄上も自分を見てこんな感情を抱くのだろうか。
そうやって少しずつ心を許していった。

完全に日が沈む頃、漆黒星騎士団（ブラックルビー）の青年、ファイアライト＝リドフォールがやってきた。この金髪の青年はライガ部隊長とレメゲトンのパイプ役も担っているらしい。
「あ、ファイ先輩」
ライディーンがにこりと微笑む。
すると金髪の青年は意外、といった顔をした。
「何だ、仲良くしてるじゃないですか。散々ごねたくせに」
その言葉にライディーンはむっと口を尖らせ、ファイ先輩は意地悪だな、と言った。ほんの少し頬が赤いのは照れているんだろうか。
先ほどから少年らしい反応が見え隠れしているのがひどくかわいいらしいと思う――こんな感情これまで持っていなかったのに、自分はいったいどうしたんだろう。不思議なほどに感情が豊かになっ

てきている自分を感じていた。
金髪の青年はにこりと笑う。それはいつも笑顔のフェルメイと少し似ているが、この青年はもっと裏にいろいろ隠し玉を持っていそうな笑顔だった。
「どうですか、ライディーンは。ちゃんとやっていますか？」
「ああ。あのくそガキ……ラック＝グリフィスとは比べ物にならないくらいに良くできたレメゲトンだ」
「……でしょうね」
くすりと笑った金髪の青年に、ライディーンはぼそりと言う。
「俺はあいつに敵わない。まだ、追いつけてない」
そのまなざしは真剣で、悔しさが全面ににじみ出ていた。
あのくそガキは悪魔を暴走させたこの少年を命がけで止めたという。まだそれを引きずっているのだろう。自分の無力さを噛み締めながら。
「大変ですね、想い人が強すぎるというのは」
金髪の青年がさらりと言った言葉にライディーンは藍の瞳を鋭く吊り上げた。
……想い人？
「ファイ先輩！」
頬を赤くしたライディーンが叫ぶ。
ああ、そうか。最初から自分に向けられていた敵意はそういう意味だったのか。
やっと納得できた。
「それは……苦労するぞ」
我が身を振り返り、思わず呟いてしまう。
どうやら彼にも身に覚えがあったらしい。
もう一度ソファに身を埋めて、ライディーンはポツリと聞いた。
「ウォル先輩も苦労した？」
「……どうだろうな」
本当にあいつは天然娼婦へと育ってしまったのか？まさか他にも

こんな少年たちがわらわらといたりするんだろうか。
漠然とした不安がよぎる。
ライディーンは誰に向けるでもなく言葉を紡いでいった。
「あいつは『おれはミジュクモノだから』って言ったけど、そんなことない。あいつは守るべきものをちゃんと知っているし、目標を定めてしまえば絶対に折れないし負けたりしない」
藍色の瞳はあの漆黒の瞳の少女を心から信頼していた。
その強い瞳にどきりとした。
「俺が一度契約に失敗しても立ち直れたのはあいつがいたからだ。ラックは悪魔を暴走させた後も俺のことを信じてくれた。だから今度は俺があいつを信じてる。絶対にあいつは戦場に帰ってくる」
ライディーンは膝の上に拳を握り締めた。その両手にはずっと手袋がはめられている。それは、あのくそガキが暴走を取り押さえる際にやむを得ずつけた唯一の傷を隠すためにはめているらしい。
その傷は深く、二度と剣を握れなくなるかもしれないと言われたほどだったと聞いている。おそらくもう一度剣を握るまで苦痛のリハビリをこなしてきたはずだ。
くそガキはずっとその傷を悔いていた。自分にもっと力があればそんな思いをさせずに済んだのにと嘆いていた。
「今はまだ無理かもしれないけど、ラックはきっと帰ってくる。ウォル先輩もそう思うだろ？」
「……ああ、そうだな」
ひたすらあいつを戦場から遠ざける事しか考えていなかった。傷ついて流した涙を見て、あいつの脆さにばかり目がいってしまっていた。
でも、あのくそガキは強い。それは忘れてはいけない事だ――まさかこんな少年に思い出させられるとは、自分もまだまだ未熟者だな。
「俺は負けない。あなたには、負けない！」
初めて会ったときにも聞いた台詞が何故か今度は違って聞こえた。

一歩間違えば敵意とも取れるその感情は、もっと純粋で真直ぐな思いだ。ライディーンの魂をそのまま表した正直な言葉は、とても心地よかった。

「でも……」

少し目を逸らすように、ライディーンは呟いた。

「あなたも、嫌いじゃない。会う前は、ちょっと嫌いだった、けど」

その言葉に驚いて目を丸くすると、騎士団での先輩にあたる金髪の青年はにこりと笑って紅髪をぐりぐりと撫でた。

「よく言えました」

「子ども扱いはやめろ」

頬を膨らませたライディーンが文句を言う。

レメゲトンになったとはいえ騎士団の先輩には逆らえないらしい。

昔の自分の姿を投影して思わず微笑んでしまった。

「ああ、そうだ。こんな事をしにきたわけじゃなくて、ライガ隊長からの連絡事項を伝えにきたんでした」

ぽん、と手を打った金髪の青年は手にしていた資料をぱらぱらとめくり、ライディーンに対する注意事項や連絡を重ねていった。

そろそろ新しい『覚醒（アウェイク）』部隊候補とサブノックを会わせる時間だ。

二人を残し、部屋を出た。

SECT．18　オルゴール

サブノックに武器の作製を頼み終わって部屋に戻ると、ライディーンは一人ソファにうずくまっていた。その前にあるテーブルには、先ほどの青年が置いていったと思われる資料が山積みになっている。

近寄ってみるたが反応はない。どうやら眠ってしまっているらしかった。

起こさないように隣に座る。

しかし、どうやらライディーンは眠っていなかったようだ。薄暗い部屋で、すぐに小さな声がした。

「……ウォル先輩」

「何だ」

「俺、ずっと先輩は名門クロウリーで生まれた瞬間から何もかもを持ってたと思ってたんだ。でも違ったんだな」

その言葉に自分は答えを持たなかった。

いつかは知れることとはいえ、レメゲトンとして戦場に着たばかりの少年にとって唯一の先輩が実は庶子であるというのはショックな事だったかもしれない。

少し考えなしすぎたか、と反省する。

ライディーンはじっと俯いたまま続ける。

「俺はずっとあなたを目指してたんだ。平民でも、生まれ付いての貴族に負けないってずっとがんばってた」

負けない、という言葉はそういう感情も含んでいたのかもしれない。

紅髪に隠されたライディーンの表情は分からないが、震えた声から思いが伝わってきた。

「あなたを越えたかったよ。だって、俺も……クロウリーの血を継ぐ平民だから」

「クロウリーの血を？」

「じーさんのじーさんだかがクロウリーの庶子だったって言われた。だから俺にも悪魔の血が流れてる」
突然の告白に思わず絶句した。
この少年も自分と同じ悪魔の血を継いでいる……？
「そのせいなのか俺、ぜんぜんあなたのこと嫌いになれないんだ。会う前はずっとずっと憎んでいたはずなのに。騎士としてもレメゲトンとしても越えてやるって……でも、あなたも俺と同じ、平民の出身だって聞いてしまった」
「……」
「どうしたらいい？　ずっとあなたに負けないことだけを考えてきたのに、憎んでいたはずなのに、一緒にいるとそんな気がどんどん薄れていくんだ。あなたを越えようとしてた自分が小さくなっていくんだ……」
最後はほとんど涙声だった。
「どうしたらいい……？」
少年の迷いが伝わってくる。
ずっと信じてきた理が覆ってしまう事は世界の崩壊にも繋がりかねない。その姿はまるで、騎士をやめてレメゲトンになれと強要された自分そのもののようだった。
グリフィスの少女と出会ってレメゲトンでよかったと思えたように、どんな言葉ならこの少年に届くのだろう。
もしあのくそガキだったら何を言うだろう？こんなときあの優しい少女はどんな風に考えるだろう――いや、きっと少女なら何も考えない。心の内を占める感情をそのまま表に出すだろう。
「俺は……俺も、お前のこと嫌いじゃない」
口から出たのはそんな言葉だった。何の飾りもない、深い意味も慰めも一切含まない素のままの言葉。
「悪魔の血のせいかもしれないが、お前が弟みたいに思える。だからお前も――」
ぽん、と紅髪に手を置いた。よくくそガキ相手にそうしていたよ

うに。
小さな嗚咽が漏れた。
まだ幼いレメゲトンは感情を持て余していた。ずっと信じてきたものが崩れ去るのはとても言葉に表せるものではないだろう。
しかし、あのくそガキの言葉を借りるならこの少年はもっと強い心を持っている。
憎しみではなく共闘できる仲間と認識してくれたら。
きっとセフィロト国にも対抗できる力となるはずだ。

小さな小さな嗚咽が消えて、薄暗い部屋にもう一度静寂が戻ってきた。
そんな中で、今までの自分からは考えられない感情で満たされていた。まるで子を見守る親の気持ちだ。弱冠１５歳のレメゲトンはまだ迷いも多いだろう。
導いていけるだろうか。
ずっとねえさんが自分に対してそうしてくれたように。
「俺を憎むのは構わない。クロウリーの名でレメゲトンになったのは事実だ。５歳以降は貴族として英才教育も受けている」
揺らいではいけない。
ずっと繰り返していた言葉は『義務』から『当然』へと姿を変えた。
「しかし、もしお前が俺のことを認めてくれるならその方が嬉しい。同じ願いを持つ事が出来るなら、きっと数を越えてセフィラにも対抗できる」
ライディーンは大きな可能性を秘めていた。
義兄上に認められるほどの腕前を持つ騎士だったこの少年となら、剣士ではないねえさんや戦闘スタイルが特殊なくグリフィス家の末裔とは実現できなかったコンビネーションを発揮できるかもしれない。
そのためには共に戦うことを心から願う必要があった。

今はまだ無理かもしれないが、いつかきっと。
初夏の夜のかすかに冷やりとする空気が部屋を満たしていた。

戦場にきてからもずっと鍛錬は欠かしていない。
その朝も早く起きるとすぐに剣を差して外に出た。
朝焼けの空は、明日の雨を示唆している。西の方は今日あたり雨だろうか。王都へ向かったあの少女がそろそろ雨に降られているかもしれない。
シェフィールド公爵家の中庭に出る。
ねえさんの葬儀が行われたこの大きな庭では様々なイベントが行われるのだろう。舞台のように作られたバルコニーがあり、大勢が並んで談笑できる広い芝生が地面に敷き詰められている。花が顔をのぞかせる花壇は邪魔にならないよう端によっている。中央付近に大理石で作られた噴水はあったが水は涸れていた。
遮るもののないこの広い空間は剣の稽古には非常に都合が良かった。
サブノックの長剣を左手ですらりと抜いてマルコシアスに教わった剣の型を打つ。あの魔界屈指の剣士のように美しく舞うことは出来ないけれど、毎日毎日続けた型は自分の体に馴染んでいた。
一通りの型を終えて剣を鞘にしまう。
すると背後に気配を感じて振り返ると、紅髪の騎士が佇んでいた。
「おはよう、ウォル先輩」
「早いな、ライディーン」
少し俯き加減だったが、表情は暗くない。むしろどこかすっきりした顔をしていた。
「毎朝練習してたんだ」
「ああ、そうだな。鍛錬を欠かすと落ち着かない」
そう言うと、ライディーンは顔を上げて笑った。まるで初夏の朝の空気のように爽やかに。

「敵わないや」
やっとこの少年の素顔が見られた気がした。敵意のような視線も、15という年にしては妙に大人びた態度もこの純粋な少年には似合わない。
きっとそれなりに理由があるのだろうが、へんな意地を持って貴族に敵愾心を育ててきたようだ。もしかするとそれは周囲の大人から植え付けられたものかもしれない。
ぽん、と紅髪に手を置くと、少年は嬉しそうに笑った。
「……俺も、あなたみたいな兄さんがいたらよかったな」
身長はそう変わらないが、やはり年下だな、と思う。
「明日にはセフィロト国の攻撃が始まるとの情報が入っている。業務を早めに終わらせて軍に顔を出そう。俺たちは、ただいるだけでも士気が上がるらしいからな」

軍に顔を出してから屋敷に戻るとすぐ、アリギエリ女爵に呼び止められた。
ここ数日医療活動に加えて残されたねえさんの遺品を整理していた彼女の顔にも疲労の色が濃い。アリギエリ女爵にもそろそろ休養が必要だった。
ライディーンとも簡単な挨拶を交わした後、女爵は本題を切り出した。
「遺品を整理していたら、衣類や武器に混じって悪魔紋章の入ったオルゴールが見つかりました。最初はジュエリーケースかと思ったのですが、第56番目のゴモリーに聞くととても大切なものだからぜひあなたかグリフィス女爵に、と」
そう言って差し出されたオルゴールにはかすかに見覚えがある。
ああ、そうだ。ねえさんの店の奥、地下倉庫にひっそり隠すように置いてあった漆黒の天鵞絨（ビロード）の箱。銀の悪魔紋章が張りめぐらされている立派な造りだった。底にねじまきが付いているためにかろうじてオルゴールだと分かる。

確か鍵がかかっていたはずだが。
「鍵はゴモリーが開けてくれたようです。まだ中は確認していませんが……」
ライディーンが肩に手を置いて覗き込んでいる。
少々迷ったが、オルゴールの蓋に手をかけた。
意外なほど呆気なく開いた箱の中には――コインが数枚入っていた。嫌ほど見慣れたくすんだ黄金色のそれはまごう事なき悪魔のコインだった。
「ロストコインか？　かなりの数だな」
が、手にとって見ると悪魔紋章には覚えがあった。
思わず眉を寄せてその紋章をまじまじと見る。が、何度見ても同じ紋様だ。
「……クローセル？」

SECT・19　最終決戦

そんなはずはない。あのコインは自分の目の前で砕け散ったはずだ。これが最後の仕事だ、と美しく舞った彼の姿を思い出す。彼はもう現世界に来られないはずだった。そして、コインもこの世に存在しないはず。

他のコインも調べてみると第1番目バアル、自分の持つハルファスと対にされる第39番目マルファスなどで、クローセルを含めて全部で5枚のコインが入っていた。

ねえさんから貰ったコインを胸ポケットから取り出してみる。やはり、クローセルのコインはない。残り4つのコインが鈍く光っていた。

「なに？　どしたの、ウォル先輩」

「……ありえないんだ。クローセルは契約者なしに現世界に来た。その時にクローセルのコインは砕け散ったはずだ。それなのに、コインがここにある」

どういうことだ？

そう思った瞬間、オルゴールの中から黒い光が漏れた。

「うっ！」

何だ？！

思わず目を閉じた。

そして次に目を開くと――オルゴールの中のコインが一つ増えていた。

第26番目の悪魔ブーネ。サミジーナが口寄せで死んだ人間の魂を呼び寄せるのに対し、ブーネは死人を実体化させる力を持つと言われていた。

「なぜコインが増えたんだ？」

しかも第26番目ブーネはこれまで見つかっていなかったロストコインだ。

いったいそれがどうして突然ここに現れたんだ？
はっと空を見上げると、分厚い雲が青空を隠していた。
――胸騒ぎがした。
もしこのオルゴールの中に入っているコインがすべて契約者なしに召還された、すでに砕け散ったコインだとしたら。今現れたブーネのコインが、どこかで無理な召還を受けてついさっき砕け散り、このオルゴールの中に現れたのだとしたら。
王都に向かったあのくそガキが関わっている可能性が高い。だが、悪魔の怖さを誰より知っているあいつは王都にいるくそじじいなしに悪魔を呼び出すことなど絶対にしない。
すると、ブーネを呼び出したのは誰だ？
ざわり、と背筋に冷たいものが這った。
何故かはわからないが頭の中に警鐘が鳴り響いていた。
そこへ、フェルメイが息せき切って駆けてきた。
「すみません、今入った情報です！　セフィロト軍が朝、カーバンクルを発っていたそうです！　おそらくあと数刻で数万のセフィロト軍がトロメオに到着するとの事です」
「……！」
最悪だ。
しかし、考えている暇はない。
オルゴールのこともブーネのコインのことも気になったが、それよりなによりここは戦場――敵が攻めてきたのなら、自分たちは迎え撃たねばならない。
この国を、この国に住む人々を守るために。
隣の新しいレメゲトンも緊張の糸を張り詰めた。
騎士特有の、実戦直前に纏う心地よい緊張だった。
「行くぞ」
そう言うと、ライディーンは少年から騎士の顔になって真剣なまなざしでこくりと頷いた。
少年は甲冑を含む騎士のフル装備を纏ったが、それはさすがに重

過ぎるだろう。
悪魔を使う戦闘において、普通の盾や剣はほとんど意味を成さない。先日渡したサブノックの剣と身軽な装備があればいい。それこそねえさんの露出高い服が実はかなり理にかなっていたのだ。
甲冑と兜をすべて置き去り、すでに整列を終えた軍に向かった。

既に時刻は昼を過ぎ、夕刻までにはそれほど長い時間はない。
今日のところはほんの少しの間耐え抜けばいい。
「打ち合わせどおりだ。フォルス団長、ライガ部隊長、それにビート、クラック。４人はホドとケテル以外のセフィラが出た時点で何を後にしても相手にしてくれ。俺たちも出来る限りはやく来る。何とか持ちこたえて欲しい」
「了解だ、レメゲトン」
フォルス団長が片手を挙げて答える。
「状況によってはフェルメイとジルが参加してくれ」
「はい」
「分かりました」
一通り全員に指示を伝えた。
そして最後に少年騎士に目を向ける。
「行くぞ、ライディーン」
にこりと笑った少年騎士と拳を付き合わせ、空に飛び立った。

目下には黒旗のグリモワール軍がトロメオを背にずらりと整列している。
地平線の方向を見れば、白い旗印のセフィロト軍がこちらに向かって進軍していた。
「俺はケテルを相手にする。ホドを頼む。幻想（フラウス）に気をつけろ。特に……破壊人形（メフィア・ドール）と呼んだねえさんの分身が手ごわい」
「ホド自身は？」

「おそらくそれほど戦闘力はないはずだ。が、幻想に気をとられるとやられる」
自分が身を持って体験したように。
ライディーンの頭上には緑のフードをかぶった影が揺らめいている。これがレラージュだろうか。サブノックと同じ傷を腐らせる武器を持つというが、飛翔能力があるとは思わなかった。
自分の頭上に浮かんだハルファスがけたたましい声で笑う。
「ひゃはは！　久しぶりだな！　レラージュ！」
「お前の声を聞くと　頭が痛くなりマスよ　ハルファス」
「ひひ！！」
ハルファスは今までになく嬉しそうだった。
そういえばハルファスの使う、一定範囲の大気を制御下に置く空間支配『狂風鳥（フレスヴェルク）』という技名はレラージュがつけた、と言っていた。もともと仲がよいのだろうか。
「よくお前が契約したな！　あれだけ嫌がってたくせに！」
「その台詞　そっくりそのままお返ししマス」
「俺はこいつ好きだからな！　強いしな！」
「根負け　したんデスよ」
ため息をついたレラージュは、ハスキーな声で履き捨てるように言った。
悪魔を根負けさせるとは、たいした奴だ。
隣を見ると、紅髪の騎士は照れたように笑った。がんばったんだよ、と小さく呟く少年には大きな自信に満ちている。それでも一度契約に失敗した相手に根負けさせるまで食い下がるのは並大抵の事ではない。
「ひひ！　俺はケテルな！　お前は傀儡で十分だ！」
ハルファスは以前サブノックにも吐いた台詞をそのままそっくりレラージュにも向けた。
「そんな事言うと　帰りマスよ？」
「何言ってんだ！　お前もわくわくしてるくせに！　きゃはははは

！」
狂戦士（バーサーカー）ハルファス、破壊の悪魔レラージュ。戦場においてこれほど頼もしい味方はない。
西に傾きかけた太陽。その方向からやってくるセフィロト軍。
何故だろう、漠然とした不安が胸のうちを駆け抜けた。

「サブノック！」
不穏な気配を感じて悪魔の名前を読んだ瞬間、自分の真横を何かが掠めて言った感覚があった。
目に見えぬ速度で放たれる光の矢。
サブノックの加護による禍々しい気を纏った剣を抜き、左手で構えた。
隣のライディーンも同じくすらりと剣を抜く。それは昨日サブノックから受け取ったばかりの長剣だった。自分の持つ剣と非常によく似た装飾のそれは、きっと武器の悪魔が敢えて対になるよう仕組んだに違いない。
光の矢が飛んできた方向に白い神官服の姿を見つけた。
が、それはセフィロト軍の真っ只中だ。さすがに飛び込むわけにはいかない。
するとライディーンは少し考えた後に言った。
「少し荒っぽくなるけど、あれだけ隔離しようか？」
「どうするんだ？」
「闘技場を作る。できればあの辺りの兵士だけ逃げて欲しいけど」
「……仕方ないな」
ねえさんのように効果的な罠が思いつかない自分に複雑な作戦は思いつかない。
いつも、真っ向勝負を挑むしかない。
「俺が先に降りて撹乱する。あの辺りをセフィラ以外吹き飛ばすから上空で少し待て。ケテルの光の矢にだけ気をつけろ」
「はあい」

「気の抜ける返事をするな」
ライディーンは最近遠慮がない。それに従って反応がどんどん幼くなっていき、最近では自分の前でだけひどく甘えるような態度をとるようになっていた。
このままではくそガキが戻ってくると自分はガキ二人を抱え込まなくてはいけないことになる。
今からため息の出そうな思いだった。

SECT．20　シア

ハルファスの加護を受け、サブノックの剣を振りかざして軍の中央に突っ込んだ。
空からの襲撃はセフィロト国の特権ではない。
慌てふためく兵たちを尻目に、適当な場所を見つけて地面に降り立った。
白い神官服を纏った天界の長に剣を突きつける。
「久しぶりだな、ケテル」
隣にはすでに背に羽根を湛えた眼鏡少年ホドの姿がある。幻想は連れていないようだったが、前回は破壊人形（メフィア・ドール）の元となる真っ赤な硝子球を召還していた。油断は出来ない。
ケテルは狡猾な笑みを見せる。ねえさんの命を奪ったその笑みに殺意を覚えてしまうのは仕方のないことだろう。
煮えたぎる感情を抑え、必死で平静を保とうとする。
「来ましたね、クロウリー伯爵。しかし何の策もなく突っ込んでくるとは……思った以上に動揺してらっしゃるのですか？」
その問いには答えず、果敢にも飛び掛ってきた兵士をサブノックの剣で吹き飛ばす。加護を受けた自分に生身で戦いを挑むなど自殺行為であることを分かっているのだろうか。
「ハルファス、力を貸してくれ」
「ひひ！　いいぞ！　いちいち聞くな！」
許可を得ずとも悪魔の力を使えるのは分かっている。
それでも、これは一種の儀式だった。今から使う強大な力は自分の力ではないことを確認し、言い聞かせるために毎回口にする言葉なのだ。
この儀式だけが自分を悪魔と人間の境目ぎりぎりで保っていてくれるような気がしていた。
今なら使えるかもしれない。

「狂風鳥（フレスヴェルク）……！」
初めて使った時は制御できず、数百名の命を一瞬で奪ってしまった豪風を今なら使えるかもしれない。
周囲の大気が、一瞬にして制御下に落ちた。
その豪風を使って兵を馬ごと吹き飛ばしていく。
落下の衝撃で死なないように地面に叩きつけられる前に風で受け止め、地面に降ろす。
「一体何を……？！」
驚いたケテルから反撃が来る前に、ケテルとホドに向かってかまいたちを飛ばす。
彼らがそれを打ち落としている間に掃除は完了していた。
狂風鳥（フレスヴェルク）のとけたその場所には、ぽっかりとした空間が残っていた。
中央に馬上のケテルとホドのみを残し、他の兵たちは半径数十メートルの土肌の向こうに折り重なって転がっている。
この間ねえさんを手にかけたケテルが用意した闘技場のように。
「ありがと、ウォル先輩！」
上から少年の声が降ってきた。
同時に紅髪の騎士が自分の隣に着地して地面に両手をつき、高らかに悪魔の名を叫んだ。
「レラージュ！」
それと共に周囲で爆音が上がった。
「？！」
周囲の地面が土煙を上げている。セフィラ二人と自分たち二人を取り巻く大地を円形に取り囲むようにして地面が崩れる。トロメオを取り囲んでいた堀のように深く削られたその溝は、自分たちを完全に取り巻いて円になった。
「……逃がさないつもりですか？」
「飛べるお前たちに意味はないだろう。兵を巻き込まないためだ」
立ち上がったライディーンがケテルに向かって言う。
「おや、新しいレメゲトンですか。漆黒星騎士団（ブラックルビー）出身らしいですね、

つい先日戦場に着たばかりとお聞きしましたよ」
ケテルの言葉にライディーンは驚いた顔をした。
つい最近レメゲトンになったライディーンの存在は、軍以外でグリモワールでも一般市民にはほとんど知られていない。出生も素性も年齢も、もちろん使う悪魔の名も。
それなのに、情報が敵方に漏れている。
「まあ、なりたてのレメゲトンにどれほどの事ができるかは知りませんが」
細いフレームの眼鏡をくぃ、と直し神官服をはたはたと叩いた。
「仕方ありませんね。ついこの間完膚なきまでにやられたのを忘れましたか？　あの女性のレメゲトンの命も」
ケテルの言葉に頭にかっと血が上った。
思うより先にかまいたちが飛んでいた。
ケテルの頬に赤い筋が浮かぶ。
「黙れ」
思うより先に喉が震える。
この男がねえさんの命を奪ったんだ。あの光の矢で貫いて。
――許サナイ
胸の中に熱い感情が煮え滾る。
ホドはまたも空中でぱちん、と指を鳴らした。
真っ赤な羽根が詰まった硝子球が召還される。
ところが全員が戦闘態勢に入る前に、この場に乱入してくる影があった。
おそらくセフィラの増援だろう。予測していた事ではあったが緊張が張り詰めた。
空から飛来したその人物は、まるでメタトロンのような翼の金冠を背に負っている。初参戦したセフィラであるのは一目瞭然だった。折れそうに細い肢体と白髪には見覚えがある気がした。白い神官服は纏っていないが、動きやすそうな漆黒の騎士服を身につけている。

少年とも少女ともつかぬ儚い顔立ちに感情は見られない。
ところがケテルはその影に気づいて驚いた表情を見せた。
「マルクト、どうしたんですか」
あれが第１０番目王冠の天使サンダルフォンを使役するマルクト？！
その上ケテルはマルクトの登場に驚いたようだ。呼んだわけではないらしい。
しかもマルクトと呼ばれた人物の服はあちこち焼け焦げており、すでにどこかで戦闘してきたのは一目瞭然だった。
息を切らしたマルクトはケテルに向かって不機嫌そうに叫んだ。
「バレた、失敗だ。ティファレトもやられた」
「……そうですか。ではリュシフェルも無事なのですね？」
「ああ」
今、マルクトは何と言った？
リュシフェル、とそう言わなかったか？
さっと顔から血の気が引く。
「残念ですね。またやり直しですか」
「あいつに……ラックに手を出したのか？！」
思わず叫んだ。
ケテルの隣のマルクトがちらりとこちらを見た。白髪に隠された赤目が病的なほど白い肌に浮いている。あの、感情を灯さない瞳には見覚えがあった。
「……シア」
隣のライディーンがポツリと呟く。その顔は蒼白だ。
シア、という名を思い出す。あの白髪と感情のない赤い瞳は一度見たら忘れられるものではない。
それは、あのくそガキとトロメオを発った漆黒星騎士団（ブラックルビー）　鷺（さぎ）部隊の少女の名だった。
血が逆流する感覚が全身を駆け巡った。

あのくそガキの元にマルクトが……？リュシフェルは無事だ、ということはあのくそガキも無事なのか？ティファレトがやられたということはグリフィス家の末裔はミカエルを倒したというのか？
何より、あいつはリュシフェルを召還したのか？
分からない事が多すぎる。
「シア！　お前シアだろ？！」
ライディーンが叫ぶ。
「旧友がお呼びですよ、シンシア＝ハウンド」
「それはオレの名ではない。オレはセフィラ第１０番目マルクトだ」
「そんな！　ずっと……騙してたっていうのか？！　俺もクラウド団長も！　リーダーも！　ラックも！」
ライディーンの声が響き渡る。
マルクトは視線をこちらに向けることなくぼろぼろになった黒いマントを剥ぎ取った。少年にしては細すぎる体が姿を現す――オレ、と言っているがこれは女性だ。おそらくあのくそガキと同じくらいの年頃の。
「答えろよ、シアっ！」
悲痛な叫びはただ周囲の戦の喧騒に飲み込まれた。
人が乗り越えるには深すぎる溝がここを囲んでいるから兵は入ってはこないが、周囲では今もグリモワールとセフィロトのぶつかり合いが起きている。
あのマルクトがずっと漆黒星騎士団（ブラックルビー）に入り込んでいたというのか？王都の足元に駐在する騎士団の、それもあのグリフィスの末裔のすぐ傍に！
マルクトはケテルと二言三言話した後、また飛び立った。
「待て！　シア！」
続いてライディーンが飛び立つ。
止めようとした時、上空からさらに人影が降ってきた。
漆黒の髪が風に靡いた。漆黒のマントがふわりと地に下りた。

「ん？　どこだ？　ここ」
間抜けな声。思わず崩れ落ちそうになる。
何故、お前がここにいる？
「……ラック」
呟いた声に少女は振り向く。
少しはにかんだような笑顔で。
「ただいま、アレイさん」

SECT．21　抉傷

いったいどうしてくそガキがここに？
王都へ向かったはずではなかったのか？
「ごめんね、遅くなっちゃった」
「お前……なんでここに」
「言ったじゃん。おれはここで戦うためにずっとがんばってきたんだ。アレイさん、おれはアレイさんの隣で戦うって言ったよ？　本当は――ねえちゃんも隣にいるはずだったけど」
そう言ってほんの少し悲しそうに笑った少女は、完全にとはいえないが回復しているように見えた。確かに悲しみは持っていてもそれを飲み込むだけの心の余裕が見えた。
「詳しいことはまた言うよ。それより先にシアを……」
そして見上げた少女は、白髪のマルクトとそれを追う紅髪の騎士の姿を見た。
「ライディーン！」
「ラック！　シアは俺に任せろ！　お前はシアに攻撃なんて出来ないだろう？！」
ライディーンの言葉にくそガキはぐっと詰まった。
確かにゼデキヤ王が共に選ぶほど親しかった相手だ。攻撃するなど出来ないだろう。
「先輩、後は頼んだよ？」
ぴっと指を突きつけた少年騎士は、マルクトを追って飛び去っていく。
残された断崖で囲まれた闘技場。すでに全員が戦闘意欲を剥き出しにしていた。
ホドは大きな硝子球を抱えて地面に降りた。もう一度ぱちん、と指を鳴らすと乗っていた馬が消滅した。ケテルも同じようにして地面に降り立ち、メタトロンの加護を受けて背に数十枚の翼でできた

金冠を背負った。
くそガキもマントを脱ぎ捨てて首にかけたコインをぎゅっと握り、静かに悪魔の名を呼んだ。
「フラウロスさん」
その瞬間、空間に炎が吹き荒れる。
以前見たときとは比べ物にならない灼熱の嵐に思わず一歩飛び退る。ただその場にいるだけで皮膚が焼ける感覚があるのに、あのガキはちゃんと制御できるのだろうか？！
オレンジの毛並みに黒い斑点の入った豹の姿、その周囲には灼熱を超えた蒼い色の炎が取り巻いている。
「もう少し温度下げられるかな？　おれも熱いんだけど」
「難解　だが　努力する」
しわがれた声がして炎の勢いが少し弱まった。
驚いた事に、グリフィスの末裔は完全に灼熱の獣と呼ばれたフラウロスを制御下においている。それも、おそらくカマエルを吸収し力を増したと思われる強力な炎の悪魔を、だ。
「ひひ！　フラウロスも来たか！　カマエル倒したみたいだな！」
「ハルファス　契約　珍しい」
「いいだろ！　俺こいつ好きだ！」
「理解不能」
本当にハルファスは何故こんなにも自分に懐いているんだろう？
謎だ。
するとくそガキは目をぱちくりとさせてにこりと微笑んだ。
「すごいね、アレイさん。大人気じゃん」
「お前が言うか？」
フラウロスとグラシャ・ラボラスを従えてルシファの印を額に刻むお前が。
「だってフォルスさんもフェルメイさんも、ルーパスだってライディーンだって、ゲブラも……みんなアレイさん大好きだよ？」
いろいろ思い出したくない名前も並んでいたが、聞かなかったこ

とにした。
じゃあ、お前はどうなんだ？
思わずそう聞きそうになって慌ててやめる。これは、この戦が終わってからでいい。
一つため息をつくと、くそガキはもう一度嬉しそうに笑った。
「ケテルは俺が引き受ける。でないとハルファスが承知しないからな」
「ひゃは！」
「んじゃあおれは……」
漆黒の瞳が死霊遣いを射抜く。
「あいつだ」
死霊遣いは笑う。大きな黒フレームの眼鏡の奥で。
まるで待っていましたと言わんばかりの様相で。
「バカだな……今回の破壊人形（メフィア・ドール）は前回の比じゃないぞ？」
嫌に自信ありげな様子に、少し警戒する。
「ほんの数日で何が変わる」
「変わるぞ。強力な幻想（フラウス）に力を裂いていたのが無くなるからな」
強力な幻想？
その言葉でくそガキは何か思いついたようだった。それを確認するかのように強い口調で問う。
「もしかしてシアがグリモワールにいた間、マルクトの幻想で軍を誤魔化していたのか？」
そうだ。
先ほど現れた元鷺（さぎ）部隊の少女が本物のマルクトだとしたら、これまで総指揮官として軍にいた人物は？
それは、きっとホドの作り出した幻想（フラウス）だ。
だが、マルクトは軍に帰還した。これ以上　幻想（フラウス）を形留めておく意味はない。
「勘がいいな。レメゲトン」
ホドがにやりと笑った。

その恐ろしい笑みに思わず身構えた。
要するに目の前にいるのは、すべての力を破壊人形につぎ込む事が出来るようになった――全力のセフィラ。
「行け、僕の破壊人形（メフィア・ドール）」
赤い硝子球が大気を震わせて砕け散る。
中に詰まっていた羽根が飛び散り、それは収束して徐々に形作っていく。
長いストレートブロンドが風に靡いた。
「……ねぇ、ちゃん」
隣の少女が呆然とした声で呟く。
しまった。
このガキはまだねえさんの幻想（フラウス）がいることを知らない――！
「ねえちゃん！」
金の猫眼、腰まであるストレートブロンド。真紅のドレスを纏った妖艶な美女。
その瞳に光はなく全く表情のない傀儡だとしても、あの少女にとっては3年間育ててくれた親代わりなのだ。全てをかけて共にいることを誓った大切な人間だったのだ。
黒髪の少女は目を潤ませた。
目の端に浮かんだ雫がみるみる膨らんでいく。
「ねえちゃん、何で……？」
希うように両手を伸ばし、ふらふらと幻想（フラウス）に寄って行く。
「待て、ラック！　それはねえさんじゃ……！」
破壊人形（メフィア・ドール）が細いナイフを両手に数十本広げた。
危ない！
とっさにハルファスの風で少女を包む。
風に煽られたフラウロスの炎が勢いを増す――もしくは、主人が傷つけられようとされたことによる怒りで炎の勢いが強まったのか。
灼熱の獣はケテルとホドを威嚇する。
幻想の放った地面にナイフが突き刺さる頃には、すでに少女は空

に浮いていた。
「ねえちゃん！！」
悲鳴のような声を上げて、遠ざかるねえさんの姿をした幻想に手を伸ばす少女。
風に涙がぱっと散ってきらきらと光を反射した。
飛んできた少女を地面に落ちる直前で受け止めた。すぐ駆け出そうとする少女を行かせないように後ろから抱きとめる。
がたがたと震える少女は、期待と絶望の入り混じった表情で真直ぐに幻想を見つめていた。死んだはずのねえさんが目の前にいる。しかし、ねえさんが自分に向かって攻撃した。この全く理解できない状況を飲み込むには、まだ早すぎた。
やっと薄皮が張っただけの傷口を抉り出され、少女は全身で悲鳴を上げていた。
右腕で少女を止めながら左手でサブノックの剣を振るう。
弾いた光球は軌道を変えきれず、顔の横をかすめていく。
「落ち着け、ラック！　あれは、ねえさんじゃない！」
思い切り叫ぶと、少女は振り向いた。
潤んだ大きな漆黒の瞳に射抜かれて思わず言葉を失う。
「そんなはずない。だってあれはねえちゃんだ！」
「違う！　あれはホドの創った幻想だ！」
強い口調で言い返すと、少女はぐっと唇をひき結んだ。
「嫌だよ……違うよ……ねえちゃんだよ。ねえちゃんは……」
ふるふると首を横に振る少女にだって本当は分かっているはずだ。
胸の痛みを抑え、心を鬼にしてはっきりと宣言する。
「お前だって分かってるはずだ。ねえさんは死んだ！」
その瞬間、少女の瞳の端に溜まっていた雫がつぅと頬を伝い落ちた。
「あれは、敵だ。ホドの創り出したただの傀儡だ。ねえさんの血を持つだけの、ただの……破壊人形だ」
少女の体から力が抜ける。

腕をほどくと、その場にへたりと座り込んでしまった。
呆然と幻想を見つめながら座り込んだ少女を庇うようにして前に進み出た。
「ラック、お前はそこにいろ」
灼熱の獣が主人を守るために戻ってきた。
フラウロスに任せておけばこの少女が傷つくことはないだろう。
あの忌まわしいねえさんの亡霊は自分が打ち払う。
左手のサブノックの剣を真直ぐに幻想へと突きつけた。

ところがへたり込んだ少女はすぐに立ち上がった。
全快とは言えない、よろけながらもそれでも立ち上がった。フラウロスの炎が包む中にゆらりと立ち上がった姿には闘気が満ちている。
「待って、アレイさん」
何故だ？なぜこの少女はすぐに立ち直れた？
「あれは、おれが倒す」

SECT．22　ラファエル

震えそうな声を必死に保っているのが分かる。
それでも闘気は収束していない。あの幻想に対する敵意が復活している。
「ねえちゃんの『偽物（フラウス）』なんて、おれが許さない！」
フラウロスの蒼炎に似た怒りの感情が少女から燃え上がった。
ああ、そうか。この少女は怒っているんだ。自分の大好きだった人の偽物など許せるはずがない。それは何よりしてはいけない事だったのだ。
ねえさんの死を乗り越えたばかりのくそガキにねえさんの幻想を見せるなど――
「フラウロスさんはケテルをお願い。倒さなくていい、こっちに介入できないように足止めして」
怒りに満ちたグリフィスの末裔は灼熱の獣に命じた。
そして自分の方を見た。
「あいつはおれがやる。アレイさんは、ホド本体をお願い」
そのはっきりとした口調に、何故か逆らえなかった。この場に存在するものの力を完全に把握し、指示を出したとしか思えなかったからだ。
灼熱の豹フラウロスは大きく空に向かって吼えた後、ケテルに向かって突進していった。
その速度は半端ではない。一瞬見失った、と思ったらもう鋭い爪をケテルに向けていた。
「！」
驚いているうちに蒼炎が辺りを包み、ケテルと獣の姿はその中に消失した。
凄まじい火柱の熱風に思わず目を細める。
そして背後の少女からは信じられない固有名詞が飛び出した。

「ラース！」
それは滅びの悪魔の名。つい先日少女が召還し、トロメオをほぼ粉砕した原因となった最凶の名を冠す悪魔。
背後から凄まじい殺気が放たれる。
最凶の悪魔を配下にした少女は二本のショートソードを抜き放って自分に並んだ。
暴走の気配はない。
ただ感じ取れるのは静かに秘めた怒りのみ。
「……無理だけはするなよ」
「ありがとう」
全身から立ち上る殺気は紛れもないグラシャ・ラボラスのものだ。が、意識ははっきりしているし絶望に心を明け渡す事もなかった。
その様子を見て思う――こいつはまた一つ強くなった。
逃げる事を知った。しかし、辛い事に正面から向き合う事を学習した。
辛い事を知らないわけではない。無理する事を我慢するのを知らないわけでもない。逃げる弱さを認めないなんてありえない。
それでも、その全てを乗り越えて力に変えてしまった。それは最凶と呼ばれた悪魔から加護を受けるほどに。
挫折を知った魂は、本当の意味で肩を並べて戦える。
「行くぞ！」
叫んでからもう一度長剣を握りなおした。
「うん！」
少女の返答を待たず、幻想の本体――ホドに向かって鋭い刃を向けた。

ホドは翼を広げて飛び立った。
どうやらこの場を破壊人形に任せて逃げる気らしい。
「させるかっ！」

強く地を蹴ってホドに剣を振り下ろす。
するとホドの背後に現れたラファエルはそのまま全身を現した。
栄光の天使ラファエルが真紅の剣で受け止めた。
体にぴったりとした黒のシャツをボタン一つ留めただけで上から羽織り、それと細身の黒いパンツに編み上げの丈夫なブーツを履いている。他にも銀や金の装飾品をじゃらじゃらと音がしそうなほど身につけており、とても天使とは思えない様相の、しかし背に3対6枚の翼を湛えた姿だった。
手にした真紅の刃を一振りし、ホドを守るように立ちはだかった。
「ひはははは！　ラファエル！　出てきたな！」
一旦距離を置く。
ラファエルの属性は『風』だと以前ハルファスが漏らした事がある。天使や悪魔に属性があるというのは初耳だったが、本人が言うのだから間違いない。きっとラファエルも風遣いだ。
サブノックの加護を受けた剣を真直ぐに突きつけると、ラファエルは口を開いた。
天使自身の声を聞くのは、メタトロンに続いて二回目だ。
「未だ懲りないの？　ハルファス」
思った以上に若く少年のような澄んだ声に、ハルファスの甲高い声が答える。
「当たり前だ！」
「マルファスを吸収した僕に敵うとでも？」
「ひひ！」
もういい加減天使と悪魔の会話で驚く事はないと思っていた。
残念ながら今現在自分はハルファスからもっと多くの情報を引き出しておけばよかったと後悔している。
マルファス、というのは第38番目ハルファスと対にされる戦の悪魔で第39番目のコインで召還できる。ハルファスと同じく風を使い長剣を操ると言われているが……まさか、栄光の天使ラファエルの片割れだったとは。

それもすでにラファエルに吸収されてしまったという。
「じゃあ　お前も吸収して欲しいわけ？」
「そんなわけあるか！　ばーか！　マルファスを返せ！」
「相変わらず　お前は馬鹿だね」
切れ長の眼、容姿はハルファスよりクローセルによく似た美しい栄光の天使ラファエルはあきれたようにため息をつき、濃い藍色の髪を揺らした。
それにつられて思わずため息をついてしまった。
フラウロスとカマエルが互いに互いを滅ぼしあったように、ラファエルとハルファスも二つに別たれた片割れ同士らしい。
そういうことはもっと早く言って欲しかった。
聞いたところで何も出来はしなかったが。
「ひひ！　今日は一人じゃないからな！」
自分の背後に浮いていたハルファスが飛び出して、羽根の生えた両手をかざしてふわりと地面に降り立った。その手には既に長剣が握られており、ハルファス自身も戦う気のようだ。
ラファエルはそんなハルファスに冷たい視線を向ける。
「そんな姿になってまで　逆らうの？　意味分からない」
「ひゃはは！」
ハルファスが甲高く笑う。
このどこまでも幼い狂戦士（バーサーカー）の過去はよく知らない。ラファエルとの確執も、未だによく理解できない天使と悪魔の片割れの話も。
しかし、こいつはずっと自分に力を貸してくれた。少しくらい返してもいい頃だ。
何より――目の前にいるラファエルを退けない限りグリモワールに未来はない。
自分の腰ほどまでしかないハルファスの隣に立ち、サブノックの加護を受けた剣をラファエルに突きつけた。
「ラファエル、グリモワールから退いてもらおう。いったいお前たち天使と悪魔にどんな理由があるか知らんが、これ以上領土を荒ら

すのは許さん」
「お前は　マルコシアスの子だよね　理由も何も　魔界が滅びるのは　世の理だよ　もう少し勉強してから言って欲しいね」
黒ずくめの衣装と完全に少年の域を脱した顔には不釣合いな幼い口調で、ラファエルは言い放つ。
どこか馬鹿にされているようで大人気なく苛立った。
「まあいいや　お前に興味はあったし　ハルファスは欲しい」
ラファエルは真紅の剣を構えた。
「隠れてて　ホド　メタトロンとフラウロスの方もかなり危ないし怪我しないように下がって」
６枚の大きな翼を眼鏡の少年を隠すように広げる。
ハルファスも羽根からのぞく鉤爪で長剣を固定した。
ラファエルが先に地を蹴ったのを契機に、３本の剣がぶつかり合う音が響いた。

SECT．23　慈悲

本当はライディーンとの連携を考えてコンビネーションをいくつか組んであった。
が、隣で戦っているのは戦の悪魔ハルファスだ。
さすがは、と言うべきだろう。戦の悪魔ハルファスはここ数日即席で作った何種類ものコンビネーションを難なくこなしていった。自分が派手な動きでラファエルの注意をひき、ハルファスが常に死角に回る作戦を基本に、剣技と風の刃を交えた怒涛の攻撃を繰り返す。
狭いフィールド内の天地関係なく駆け回る。
目に見えぬ光の矢をずっと受けていたお陰だろうか、ラファエルの攻撃の軌道が勘で読めるのだ。
全身に加護が満ち、感覚が最大限に開いている。ラファエルの力の波動を五感以外の感覚で鋭く察知し、そこへハルファスの風をぶつけて相殺する。
「本当にお前　人間なわけ？」
ラファエルが悲鳴のような声を上げる。
悪魔の血を継ぎ、人知を超えた力を使役し、戦の悪魔ハルファスと肩を並べて栄光の天使ラファエルと互角に打ち合う。悪魔の力を敏感に察知して打ち落とす。
もう自分は人間とは相容れないのかもしれない。
それでも、守ると決めた。自分の持てる力全てを駆使して戦うことを誓った。
「俺は……戦の悪魔マルコシアスの息子だ」
「リュシフェルと共に　魔界へ下った　裏切りの堕天使」
魔界の王リュシフェルは堕天だ。異端と呼ばれ凄まじく強い力を持ち、魔界を創造したという。そのリュシフェルを慕って魔界へ下った天使たちを堕ちた天使、つまりは堕天と呼んでいる。

なぜか魔界の存在を認めようとしない天使たちは、堕天を裏切りだという。
そして、堕天の悪魔は天使の前で存在できない。
世界には分からないことが多すぎる。天使や悪魔が『世界の理（ことわり）』と呼ぶ共通の規則は世界に存在するすべてのものを束縛しているのだった。
天使たちはその『理』に従ってグリモワール国を滅ぼそうとしている節があった。
「お前たち天使は何故魔界を認めようとしないんだ？」
「確かな柱もない　不安定なものを　滅ぼすのは慈悲だろう？」
慈悲。
確か天界の長メタトロンも同じことを言っていた――存続の見えない世界を滅ぼすのは　施しなのです、と。
「何が慈悲だ！」
未来のない、先に何も見えない滅びの何が慈悲なのか。
もし本当に天使が慈悲を与えようとしているのなら、未来を指し示し導く事こそが慈悲ではないのか。迷っている者を照らし出す光を与える事こそ施しではないのか。
「お前たち天使の考え方は理解できん！」
「マルコシアスの息子　お前は滅びを否定するの？　これだけこの世界が　揺らいでいるのに？」
「揺るがせない」
迷わない。
もし世界が安定しないというのなら、自分が守り支えてやる。
「ひひひ！　こいつは柱候補だからな！」
「エノクやエリヤのような　犠牲を　もう出させないよ」
がぎぃん、と大気を震わす音がして剣同士がぶつかり合った。
後ろからハルファスが狙っている。
さしものラファエルも少しずつ押されてきた。
少しずつ後ずさっていくその先にあるのは、フラウロスがケテル

を包んだ蒼炎の柱。
「ひひ！　焼けろ！」
ハルファスが放つ渾身の一撃がラファエルを吹き飛ばした。
背後に迫っていた炎柱がラファエルの翼を、体を飲み込んだ。

地面に降り立って息を整える。
「ひゃはは！　焼けたか？」
目の前の炎柱に消えたラファエルが出てくる様子はない。
ほっとしていったん剣を納めた。サブノックは一度魔界に帰る。
ハルファスは手にしていた長剣を消して、自分の肩に降り立った。
幼児くらいしかないハルファスは、ちょうど肩に座ることのできる大きさだ。
腕に生えた羽が頬に触れて少し痒いが我慢しよう。
あのくそガキはどうなった？
そう思ってあたりを見渡すと、ちょうど黒い膜翼を背に生やした黒髪のレメゲトンが地面に膝をつくところだった。
「くそガキっ！」
見るとねえさんの幻想が放ったナイフが左大腿に刺さっている。
あの程度のものが避けられないとは思えない。いったい何があったんだ？
ハルファスを肩に乗せたままくそガキの隣に駆け寄る。
足を負傷し、地面に崩れ落ちた少女を庇うように幻想との間に立つ。
すると、信じられないことが起きた。常に表情のなかった幻想（フラウス）が口角を上げ、微笑みを見せて少女の名を呼んだのだ。
「ラック」
もう二度と聞けないと思っていたメゾソプラノに、全身が総毛だつ。
そうか、このせいでくそガキは……

「その名を呼ぶな、幻想（フラウス）。心を持たないお前が軽々しく呼んでいい名ではない」
剣を抜いて真直ぐに突きつけると、肩に乗っていたハルファスが耳元でけたたましく叫んだ。
「おかしいぞ！　こいつ消えてない！」
「どういうことだ？」
「ラファエルも消えてない！」
「！」
ハルファスの言葉と共に、その場に熱風が吹き荒れた。
ラファエルの姿を飲み込んだ炎の柱が火の粉を上げ、うねり、踊り狂っている。
次の瞬間には凄まじい爆発音と共に蒼炎がはじけとんだ。

炎がおさまり、その場に風が吹き込んだ。風は熱を吹き飛ばし、爆発の土ぼこりも払っていく。
そこには翼を広げた二人の天使の姿があった――正確には、一人はメタトロンの加護を受けた人間だが。６枚の翼をたたえた栄光の天使ラファエル。数十枚の翼が金冠のように見える王冠の天使メタトロン。
その足元に、よろけながら立つ灼熱の獣の姿がある。
「炎に落とすなんてひどいな　ハルファス」
ラファエルが真紅の刃の剣を振った。
服がほんの少しこげているだけで、その体にダメージは見られない。
「フラウロスさん！」
灼熱の獣を使役する主人の悲痛な声が響く。
フラウロスの姿が消える。どうやら魔界に帰ったようだ。
ナイフの刺さった左足をひきずって立ち上がったくそガキは、息を荒くしながら自分の隣に立った。傷の痛みのせいか表情が険しかった。

最悪の状況だ。
敵は無傷の天使が二人、それに破壊人形（メフィア・ドール）。
こちらは負傷したくそガキと自分の二人だけ。
となりに立つくそガキは震えている。痛みのせいなのかねえさんの姿をしたものに攻撃を加えてきたことへの恐怖なのか。
いったい、どうしたらいい？
逃げるという選択肢はない。今も周囲では両軍がぶつかり合っているのだ。ここでセフィラを放置すればどうなるかは火を見るより明らかだ。
ケテル一人でトロメオを陥落させたあの日の惨劇が目の前に蘇った。
あれを繰り返す事だけはしてはいけない。
すると、くそガキは唇をひき結んだ。
「ラース、出てきて」
するとガキの体から黒い霧が噴出し、漆黒の毛並みを持つ大きな狼に姿を変えた。
殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラス。
「いいのカイ？　僕ハ　容赦しナイよ？」
「いい。躊躇ったら今度はおれの大切なものが失われてしまう」
「ソウ」
グラシャ・ラボラスは殺戮の牙を煌かせた。
「じゃ　メタとろンは　僕が貰ウヨ」
殺戮の獣は地を蹴り、ケテルに向かって突進する。
くそガキはもう一度ショートソードを構えてねえさんの幻想と対峙した。
「あれだけはおれが倒す」
荒い息を抑えて。
強い言葉で。
「ひひ！　じゃあやっぱりラファエルだな！」
ハルファスが叫ぶ。

仕方がない。今度こそとっととカタをつけて援護したい。
くそガキがねえさんに向かうのを見てから自分もラファエルに向かって剣を抜いた。

SECT．24　吸収

今度は確実に消滅させねば。
ラファエルが消えれば幻想も消える。そうすればあのくそガキが心を痛めることだってないはずだった。
栄光の天使は真紅の刃を閃かす。
「やられたいの？　カマエルを吸収した　炎の獣みたいに」
「やられるか！」
ラファエルの使う美しい型の剣技は、クローセルが最期に見せた舞を想起させた。人心をひきつけてやまない天使――彼らは一体何処から生まれ、どこへ向かうのだろう？
自分たちは二人で一度天使を追い詰めている。
ラファエルが何らかの手を打ってこない限り負けることはない。

ところが戦局は豹変した。
ラファエルが突如、ハルファスを大きく越える力でもって応戦してきたのだ。これまで押していたのだが、一瞬で形勢が逆転した。
凄まじい風がハルファスの加護を突き抜け、後ろ向きに吹き飛んだ。
「うぎゃっ！」
つぶれたようなハルファスの声がした。あいつも飛ばされたようだ。
慌てて空中で体勢を立て直し、ラファエルに剣を向ける。
６枚の翼を湛えた天使はポツリと呟いた。
「ああ……破壊人形（メフィア・ドール）が壊された」
それを聞いていくらはほっとする。
ああ、あの少女は自らの迷いを断ち切ったのか。あの手でねえさんの姿をした幻想（フラウス）を破壊したんだ。苦しみながらもあの強い心で。
あの――脆い心で。

早く戻ってやりたい。
あいつは泣いているはずだから。ねえさんを手にかけた辛くてもがいているはずだから。
「ひひ！　あせるなよ！」
ラファエルを挟んだ向こう側に浮かぶハルファスが笑う。
しかしながら力を裂いていた破壊人形がなくなり、完全体となったラファエルの威圧は予想以上だった。これが片割れを吸収した天使の力なのか。
本当に勝てるのか？
不安が胸を過ぎる。
するとハルファスは当たり前のように叫んだ。
「大丈夫だ！　お前はあいつの息子だ！」
「！」
あいつ。レメゲトンになったときからずっと自分に力を貸してくれた戦の悪魔マルコシアス。魔界屈指の剣技を誇る彼の息子を名乗ったからには剣で負けるわけにはいかないだろう。
困った時は基本に立ち返れ。
きっとマルコシアスならそう言うはずだ。
「ひひ！　これで終わりにするぞ！」
左手の剣を構える。
この戦争が始まってからをずっと生死を共にしたサブノックの剣だ。
共に戦うハルファスと、剣技を叩き込んでくれたマルコシアスと、剣を与えてくれたサブノック。これ以上心強い味方はない。
「ああ。いくぞ、ハルファス」
「ひゃはははは！」
最後の戦いが始まった。

ラファエルの力が満ちた空間では、凄まじい豪風が支配している。

ハルファスの加護がなければ簡単に弾き飛ばされていただろう、目を開けているのも困難だ。
まるで突然嵐の中に放り込まれたかのようだ。
「目に頼るな！　きゃは！」
ハルファスの声ではっとする。
そうだ。
これまでに習ったことを思い出すんだ。
目を閉じろ。そうすれば目に見えない殺気や剣気が見えてくる。
ふっと目を閉じると、妙に緊張していた体から力が抜けた。それだけでなく豪風の音も遠ざかり、そのぶん感覚が鋭敏になった気がする。
漆黒の瞼の裏に攻撃の軌道が閃く。
軽く体をずらすと、顔の横をかまいたちが横切った感覚があった。
目を閉じると感じられる。
風の通り道、この大気の流れ一筋一筋が意思を持って動いている様子が。
すべての空間を捕捉する感覚は狂風鳥（フレスヴェルク）を発動した時の感覚とよく似ていた。
マルコシアスが何度も何度も繰り返すのは、流れに逆らわないということだ。力に逆らわず、最小限の動きと技で敵の攻撃をいなす柔の剣。
一瞬ハルファスの加護を緩めて風に身を任せる。
ラファエルの風の動きを読みながら、飛んでくる刃を弾いたり避けたりしながら反撃の機会を待つ。
一瞬でいい。
マルコシアスの教える剣の極意は一撃必殺のカウンターだ。
時に風を曲げ、時に逆らいながら少しずつラファエルとの間合いをつめていく。
「ひゃは！」
ハルファスの声と共に金属音が鳴り響く。

同時に、一つの道が見えた。まるで闇の空間からあのくそガキを救い出したときのようにはっきりと見える道筋が。
ハルファスの攻撃で隙が出来たのだ。
「うおおっ！」
雄たけびを上げてその線（ライン）に突っ込んでいった。
その先にいるのは――ラファエル。
最期の一瞬だけ、目を開けた。
迫った真紅の刃を横にいなすように避ける。返し様、飛んできたかまいたちを弾き飛ばした。
その勢いを利用して体を回転させる。
狙いは、背に湛えた大きな翼。
豪風の中、一瞬だけ、音がやんだ気がした。
「うわあああああ！」
ラファエルは天使とは思えないような絶叫を上げた。自分が切り落としたのは、６枚のうち一番上の一対の翼。
呆気ないほどの感触で斬れたそれは、次の瞬間金色の光へと発散して消えた。
これまでの比でない強風に思わずラファエルから飛び退る。
しかし、絶叫に反応して強まった嵐の中でもハルファスは手の中の刃を消して呆然となるラファエルの背後に回りこんだ。
「ひひ！　返してもらうぞ！」
そう叫ぶと、二人はいつしか漆黒と化していた風の渦の中へと消えた。

一体どうなったんだろう？
自分の周りにはまた戦場の空気が戻ってきていた。フィールドの外で行われている戦の喧騒も響いてくる。
上から見下ろすと、この深い溝で囲まれたフィールドのみを兵が避けている。その様子はひどく不自然で人為的に見えた。
目の前の黒い渦から何が出てくる気配もない。

ただ、自分が落下しないところを見るとハルファスはまだ消えていないのだろう。
しかし、悪魔と天使の決着はそれほど長くかからなかった。
ぱぁん、という乾いた音がして渦がはじけとんだ。耳元にあった違和感が消え、背に何かの感触を覚える。ふと手を頭に当ててみると、そこにはマルコシアスが持つような角が二本生えていた。
「？！」
困惑して眉を寄せると、目の前にふわりと降りてきた影がある。
「ひひひ！　やったぞ！」
「……ハルファス、か？」
「そうだ！　ひゃはは！　他に誰がいる！」
驚いた。彼の姿はこれまでのような幼児のものではない。
見た目だけなら１５くらいの少年、悪ガキのような表情と目つきは変わっていないが身長はかなり伸びている。先ほどラファエルが着ていたようなシャツを軽く羽織って、装飾もやたらと増えていた。何より、声が違う。
甲高い幼児の声は少し落ち着いた少年の響きに変わっていた。
「やっとラファエル吸収した！　ありがとな！　お前のお陰だ！」
天使を吸収するとこれほどまでの変化があるのか？
驚きに目を見開いていると、ハルファスはふわあ、とあくびをした。この姿はもとの幼児となんら変わりない。
「疲れた！　おれ帰る！」
「ああ、そうだろう。ありがとう、また来てくれ」
消えられる前に地面に降りなくては。
そう思って高度を下げた。
ずっと上空を覆っていた雲から冷たい雨が降り始めていた。

SECT．25　繋ガリ

地面に降り立ったところでハルファスの加護が消えた。
どうやら魔界に帰ったようだ。
ふと土のフィールドを見渡すと、ふらふらとよろけながら立っているくそガキの姿が目に入った。
「アレイ、さん」
俺の姿を見るなり地面に崩れ落ちる。
慌てて駆け寄り、膝をついて仰向けに支えてやる。安心したのかくそガキは背を支えた腕に体重を預けてきた。
見ると左足は真っ赤に染まっている。かなり出血したようだ。
「大丈夫か？　傷は……」
「平気。やられたのは足だけだよ」
ざっと見たところ、致命傷になるような他の傷は見当たらなかった。
ひとまず安心して大きく息をついた。
くそガキはぼんやりとした瞳で見上げてくる。
「ケテルはラースが倒したよ。ラファエルさんは？」
「……ハルファスが吸収した」
そう答えるとくそガキはにこりと笑った。
これで全員だ。
ケテルをグラシャ・ラボラスが、幻想はこいつが、ラファエルは自分とハルファスが……ホドの姿は見えないが、ラファエルを失ってしまったあの少年に何の術もないだろう。
腕の中の少女も心底安心したようだった。
その時、雨粒を落とす空から雫ではない何かが舞い落ちてきた。
はらはらと舞うそれは赤い羽根――幻想を形作っていたねえさんの残骸。
何かを伝えるようにして少女の胸元辺りに降ってきた羽を、コイ

ンの埋め込まれた手が受け取った。
その手はかすかに震えている。
「ねえちゃんが……」
声も震えていた。
思わず肩を抱く手に力を込めた。
「おれが壊したんだ。二つに切り裂いて、殺したんだ。偽物。一瞬だったよ……」
出来る限り無機質に言おうとするのが余計に痛々しい。
言わなくていい。わざわざおまえ自身を傷つけるようなこと。この世で一番大切な人を手にかけることがどれほど辛いか、想像に難くない。
とくにこの優しい心を持つ少女にとっては。
漆黒の瞳が潤む。
「どうしてこんなことになったのかな？　おれは……ねえちゃんとずっと一緒にいたかったのに……。辛いね、アレイさん。大切なものがなくなるのは、すごくすごく悲しいね……！」
ああ、もうだめだ。
笑っていて欲しいと思っているのに、どうしてお前の泣き顔しか見られないんだろう。少しでも癒してやることは出来ないのか。この優しい心を持つ少女を少しでも笑わせてやる事はできないのか。
「こんなにつらいんだったら……もう『一つだけ』なんていらないよ……！」
少女は満身創痍だった。
世界の全てだったねえさんをなくした傷が癒えきる前に同じ姿をした敵に出会ってしまったのだから。そしてその敵を自らの手で滅ぼしたのだから――
俺は、代わりに少女の世界を支えられないだろうか。
傷ついてぼろぼろになった少女に残酷な感情を向けようとしていた。

ただただ涙を流す少女の頬にそっと手を伸ばす。
大きく潤んだ漆黒の瞳がこちらに向けられる。
「アレイさん」
そう、こちらを見て欲しい。
お前を見ているのは、見ていたのはねえさんだけではないと知って欲しい。
「ラック」
何もかもを失った少女に、その上自分の想いをぶつけるのか？重荷でしかないような言葉を、この時に晒してしまってもいいのか？
一瞬理性が過ぎった。
が、もう戻れなかった。
我慢の限界だった。
こっちを見ろ、ラック。ねえさんだけじゃなくて……俺を、見て欲しい。
「それなら……俺を『一つだけ』に選べ」
もう大切なものなど、『一つだけ』など要らないなんていわないでくれ。俺が全てをかけて守ろうと思っていたのはずっとお前なんだから。いつしか同じように『一つだけ』に選んで欲しいと思っていたのは――
驚いて目を見開いた少女を座らせ、両肩に手を置く。
言い聞かせるようにして思いの丈をぶつけていった。
「俺は死なない。お前の傍からいなくならない。そうやって悲しませる事なんて絶対にしない」
お前がいる限り生き続けよう。そしていつだって危険に飛び込んでいくお前の隣でずっと支えてやろう。
強くなりたいのなら剣を教えよう。知りたい事があるのなら出来る限りの知識を与えよう。もし辛い事があるのなら……隣で支えてやる。
あの舞踏の夜に誓った言葉だ。

今度こそ『うそつき』とは言わせない。
「俺はずっとお前だけ見ていた。どうやって何を学んできたか、苦しんでいた事だって悩んでいた事だって全部知っている。そのすべてが、愛しいと思う。だから……」
何を見て何を感じ、どうやって成長してきたか。それを知っているのはねえさんだけじゃない。
「すぐ決めなくていい。でも、覚えていてくれ」
さすがにここまできて一瞬躊躇ったのは仕方がない。
何しろ自分はずっとこの言葉を胸の奥で飲み込んできたのだから。
それでも。
この少女に知って欲しい。
「俺はお前を――愛している」
漆黒の瞳が大きく開かれた。
みるみる頬を雫が伝っていく。
とても長い時間だった。このまま時が止まったら、自分は心臓が破裂して死んでしまうかもしれないと思ったくらいに。
それでも知って欲しかった。自分がどれほど想ってきたかを。
受け入れてくれなくてもいい。俺はお前の隣にいると決めた。
それでも、もしお前が――
「アレイさん」
少女は答える代わりに首筋に手を回して抱きついてきた。
漆黒の髪が頬をくすぐる。
「ラック……？」
肩口にある漆黒の髪をゆっくりと撫でる。
愛しい、愛しい少女の体を抱きしめる。
すると耳元で、鈴が鳴るように小さな声が響いた。
「もうどこにもいかないで。お願い。おれアレイさんが、いちばん、好きだから」
信じられない言葉だった。
しかし、ずっとずっと欲していた言葉だった。

思わず腕を緩めて顔を覗き込む。
「本当に……？」
聞くと、少女は真剣な顔で頷いた。
「ほんとだよ。ずっと一緒にいたいよ。アレイさんに傍にいて欲しいって言われたかったよ」
戦場に到着した後の夜、サブノックと引き合わせた帰り道で、少女は同じ台詞を言った。
あの時の感情は勘違いではなかった。
胸が震えるような歓喜がこみ上げてくる。
「ラック」
頬に手を当てて顔を寄せた。
漆黒の瞳が近づく。
額へのキスは尊敬、頬へのキスは愛情、唇へのキスは――
触れたところから少しずつ温かくなっていく。
こんな戦場の真ん中で、冷たい雨が降る中でも何も気にならなかった。目の前にいる少女意外何も見えなくなった。
愛しい。誰より愛しい。
微笑んだ少女を抱きしめる。
これまで何度も何度も経てきた行為が、心が通じた今では少し特別なものに思えた。
「愛している。愛している……ラック」
今までいえなかった分を取り戻すかのように、何度も何度も声に出した。
腕の中の少女も小さな声で呟いた。
「傍にいて。今度こそ、もうどこにも行かないで」
切ないほどに狂おしくなる。
どうしようもなく、愛しい。
「安心しろ。嫌がっても……放さない」
もう二度と放したりしない。ずっとずっと、望んでいたのだから。
そして、少女がやっと望んでくれたのだから。

「いつまでも傍に……」
その瞬間、全身を冷やりとする感覚が貫いた。
よく知っているそれは、『殺気』だ。
まずい、もう逃れる時間はない。
せめて少女だけでも――

声が出なくなった。胸が焼けるように熱い。
体から力が抜ける。
「ひははあぁ！　死ね！　レメゲトン！」
背後から狂った声がした。
これは……ケテル？倒し損ねていたか……
視界が暗い。声が出ない。体に力も入らない。
かろうじて残った聴覚が少女の震える声を捕らえた。
「アレイさん……？」
ああ、また俺は約束を破るのか。
最悪だ。
最期に後悔するのは、グリモワール国のことでもゼデキヤ王のことでもない、目の前で泣く少女の事だった。
「愛してる……」
最期に鼓膜を揺らした少女の言葉は、その後悔全てを吹き飛ばしてしまった。
もう、十分だ。
これほど満ち足りた気持ちなら――

きっとねえさんは怒るだろうな。
少女に気を取られて油断し、命を落とす自分のことを。グリモワール国のことより少女を優先する自分のことを。
それでもなお満ち足りてしまい、後悔なく死地へ向かう自分のことを。

――愛してる

お前がそう言ってくれたから。

心が通じ、この腕に抱いてこれ以上何を求める？

痛みも恐怖を感じなかった。傍に少女がいたから。

ただ、少女が泣いてはいないか。最後までそれだけが心配だった。

―――　オワリ　―――

グリモワール王国建国から４６６年目の夏、後にグライアル合戦（ベッルム）と呼ばれるこの戦いで、グリモワール軍は甚大な被害を被った。

天下分け目と呼ばれたその戦での戦死者は万に上る。平原を焼きつくし、抉りつくしたその凄惨な闘いは周辺各国からも批難を受けた。ここにきて隣国クトゥルフはグリモワールの難民受け入れを決定し、北の大国ケルトは戦場となったグリモワールの一般人への食糧支援を申し出た。

被害はそれだけではすまなかった。

何より大きかったのは、王国創立以来多大な貢献を続けてきたレメゲトンが壊滅的な損害を被ったのだ。

総指揮官、当時の炎妖玉（ガーネット）騎士団長フォルス＝L＝バーディア卿から王都へ向けた手紙にはこう記してあった。

メフィア＝R＝ファウスト――死亡

ベアトリーチェ＝アリギエリ――生存

ライディーン＝シン――敵方捕虜

アレイスター＝W＝クロウリー――行方不明

ラック＝グリフィス――行方不明

戦力であったレメゲトンをほぼ失ったグリモワール軍はそれから程なく降伏を決めた。

王都ユダ＝イスジュデッカはセフィロト軍の占領下に落ち、第２２代国王ゲーティア＝ゼデキヤ＝グリモワール以下王族はみな捕らえられ、また高位に在った貴族もセフィロトの捕虜となった。

一部の有力な貴族は唯一の皇太子サン＝ミュレク＝グリモワールを秘密裏に国外へと逃がした。その行方は中心的に働いた漆黒星騎士団（ブラックルビー）長クラウド＝フォーチュン他数名にしか知られていない。

クラウド＝フォーチュンもその後に姿を消した。

セフィロト国は、皇太子サン＝ミュレク＝グリモワールはじめ逃れた高位の貴族たちに懸賞金をかけ、降伏から１年が経つ頃にはグリモワール全土をセフィロト国が支配し、悪魔崇拝を全面的に禁じる運びとなる。

こうして、悪魔を崇拝した王国グリモワールは４６７年に及ぶ歴史の幕を閉じ、悪魔は現世界から姿を消した。

多大な伝説を残したレメゲトンたちと共に――

あとがき的なもの

（あとがきは－ｈｅａｄ－　－ｔａｉｌ－　共通です）

ここまで付き合いいただき、ありがとうございます。
最初に書いておきます。

「まだ続きます！」

ここで第一幕は終了となりますが、幕間をはさんで第二幕を書く予定です。

もともと書き始めるときはここで終わる予定だったわけですが、作者がハッピーエンド好きなので悲劇で終わるわけにいかないなあというのが続編のはじまりです。

ですからここで「ＬＯＳＴ　ＣＯＩＮ」シリーズは終了です。
バッドエンドでいいという方、またトラジェディー好きだという人はここまでで完結としてください。

でも、もし「ハッピーエンドじゃないと絶対いやだー！」という人がいたらもう少しお付き合いください。
ただ、こからはぼんやりとした構想しかないので、更新はこれまでより格段に遅くなると思われます。

完結記念にＨＰ（ＰＣ用）を作りました。（小説部分はここと繋が

っています）
依頼して描いていただいた挿絵なども展示してあるのでぜひどうぞ
→ｈｔｔｐ：／／ｓｋｙ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｌｏｓｔｃｏｉｎ_ｈｔ／
また、絵を描いてくださる方は常に募集中です。

ここまでお付き合いいただいてありがとうございました！
また、これからもよろしくお願いします。

（以下作者の感想？的なひとりごとです）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
書き始めた当時はこんなにも長い話になるとは思わず、結局８章（８万字ほど）にも及ぶ長い話になってしまいました。
本当はラックの相手は銀髪の彼らだったとか、ライディーンがレメゲトンになる予定じゃなかったとか、誰かさんが〇〇るのを忘れたとか……たいした話も書いていない割に予定外のストーリーに右往左往してしまいました。

それでも８つに分けて書いたせいもあるでしょうが、アクセス数は８章合計で７００００人を達成しました（１２／２９現在）

ありがとうございます。

たくさんの人に読んでいただけて本当に嬉しいです。

天真爛漫でいつも一生懸命なラック。
彼女は作者の分身です。悩んだ事、苦しんだこと、経験してきたこと、考え方の変化……すべてファンタジーと関係ない日常で自分が学んできたこととリンクしています。
とにかくかわいく！がコンセプト。
それなりに気にいっていただけたようで、満足です♪

無愛想だけれど本当は誰より優しいアレイ。
つんでれ、へたれ、へんたい。三重苦です（ぇ）なんか見た目と中身のギャップがある人。を目指しました。近しい人にだけわかってもらってるよ的な。
恋愛レベルは中学生くらい。なぜか男にもてる男。

誰より強く絶対に揺るがないミーナねえさん。
これは作者の理想です。絶対的な信念を貫く、かっこいいおねえさん。なんでもできちゃうけど子煩悩。
彼女はたくさんの裏事情を知っていても敢えて口を閉ざします。ラックとアレイがかわいいから。彼女だけでなく悪魔の大半はそうの

ようですが。

爽やかな笑顔の下は誰より黒いクラウドさん。
実はとてもお気に入り。もっと話に絡んで欲しかった。悪魔の力を抜けば王国最強の騎士です。年齢不詳。幼女からマダムまですべての女性を虜にしてます。ラックも例外ではありません。

謎の行動で敵か味方か分からない手品師ゲブラ。
この人はいろいろかたりかたくてしょうがないのですがあんまり書くと墓穴を掘るのでやめておきましょう。

勇壮な褐色の肌の戦士マルコシアス、天使のような外見で口の悪いクローセル、穏やかな老紳士アガレス。
堕天3人組です。みんなやさしいです。とくに主人公格の3人には甘々です。

灼熱の獣フラウロス、狂戦士ハルファス、破壊の化身レラージュ、殺戮の牙を持つラース。
この4人は仲良しです。あと一人悪魔を足すと、風、炎、水（氷）、土、闇の5種が揃います。そのうち？

他にも思い入れの強いキャラクターばかりでした。もっと活躍させたい人もいっぱいいたんですが無理でした。

今回は一人称小説の性（さが）……書ききれない事が多すぎました。
特に戦闘場面！

ラックとアレイがそれぞれ敵を相手にすると、他の戦闘を全く描写できずこいつはいつの間にどうやって勝ったんだよ、という事が結構ありました。
ああ、これ書きたいのに、どうにかしてどっちかに見せられないかなあとか。
いろいろ考えながらも自分の構成力と文章力のなさが露呈されていくばかりでした。

何より戦闘描写が苦手です。
動きを言葉にするって、何て難しいんでしょう（笑

幕間の後、第一幕を全般的に推敲してみる予定です。

世界観、文章力、構成力、登場人物の個性など、まだまだ直すべき点はまだまだ多くあります。
これからも少しずつ精進していけたら、と思います。

短編でいろいろな人の過去を少しずつ書きたいものです。特に触れる機会の少なかったセフィロトサイドで。
全員がそれぞれ口に出せぬ過去を秘めています。いつか語ることに

なるでしょうか。

それでは、ここまでお付き合いいただいてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0973d/

WORST CRISIS -tail-

2010年10月8日14時05分発行